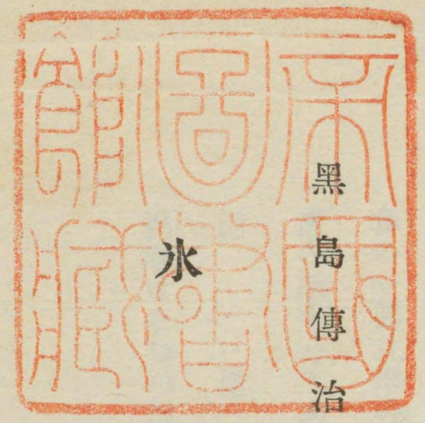
596-244
1200501527994

黑島傳治 著

氷河

日本評論社版

702



氷河

黑島傳治

日本プロレタリア傑作選集

日本評論社

596-244

目次

氷河……一
春の一圓札事件……四八
海の第十一工場……六三
氾濫……一〇九
渦巻ける烏の群……一六六

氷河

一

市街の南端の崖の下に、黒龍江が遥かに凍結してゐた。

馬に曳かれた橇が、遠くから河の上を輕く辷つて來る。

兵營から病院へ、凍つた丘の道を栗本は辷らないやうに用心しい〳〵登つてきた。負傷した同年兵たちの傷口は、彼が見るたびによくなつてゐた。まもなく、病院列車で後送になり、內地へ歸つてしまふだらう。――病院の下の木造家屋の中から、休職大佐の娘の腕をとつて、五體の大きいメリケン兵が、扉を押しのけて歩きだした。十六歳になつたばかりの娘は、せいも、身體のはゞも、メリケン兵の半分くらゐしかなかつた。太い、しつかりした腕に、娘はぶら下つて、ちよか〳〵早足に踵の高い靴をかはした。

「馭者！　馭者！」

ころげさうになる娘を支へて、アメリカ兵は靴のつまさきに注意を集中して丘を下つた。娘の外套は、メリケン兵の膝頭でひら〳〵ひるがへつた。街へあひゞきに出かけてゐるのだ。娘は、三ヶ月ほど、日本兵が手をつけやうと骨を折つた。それを、あとからきたアメリカ兵に横取りされてしまつた。リーザといふ名だつた。

「馭者！」

「馭者！」

麓の方で、なほ、辻待の橇を呼ぶロシア語が繰りかへされた。

凍つた空氣を呼吸するたびに、鼻に疼痛を感じながら栗本は、三和土にきしる病室の扉の前にきた。扉を押すと、不意に、温かい空氣にもつれあつて、クレゾールや、膿や、便器の臭が、まだ痛みの去らない鼻に襲ひかゝつた。

踵を失つた大西は、丸くなるほど繃帶を卷きつけた足を腰掛けに投げ出して、二重硝子の窓から丘を下つて行くアメリカ兵を見てゐた。負傷者らしい疲れと、不潔さがその顏にあつた。

「ヘッ、まるでもぐらが頸を動かしたくても動かせねえといふやうな恰好をせやがつて！」

「何だ、君はこつから見てゐるんか。」

「メリケンの野郎がやつて來たら窓から離れないんだよ。」

大西と並んでゐる、色の白い看護卒が栗本を振りかへつた。

「癪に障るからなあ、——一寸ましな娘はみんなモグラの奴が引つかけて行つちまひやがるんだ。」

大西は窓から眼をはなさなかつた。

「あいつらが僞札を摑ましてるんが、露助に分らんのかな。」

「俺等にや、その摑ます僞札も有れやしないや。」

「僞札なんど有つたつて、俺等は使はんさ。」

彼等と、アメリカ兵との間には、ロシアの娘に對する魅力の上で、かく段の差があつた。彼等は、誰も彼れも、枯枝のやうに武骨で、話しかけられると、耳の根まで紅くした。彼等には輕蔑してゐるその僞札もなかつた。椅子のある客間に坐りこむ、その禮儀も知らなかつた。

二

病室には、汚れたキタならしい病衣の兵士たちが、窓の方に頭を向け、白い繃帶を卷いた四肢を毛布からはみ出して、ロシア兵が使つてゐた鐵のベッドに横たはつてゐた。凍傷で足の趾が腐つて落ち

た者がある。上唇を彈丸で横にかすり取られた者がある。頭に十文字に繃帶をして片方のちぎれかけた耳朶をとめてゐる者がある。

唇をやられた男は、冷えた煉乳と、ゆるい七分粥を火でも呑むやうに、おず〳〵口を動かさずに、食道へ流しこんでゐた。皆と年は同じに違ひないが、十八歳位に見える男だ。その男はいつも、大腿骨を彈丸にうちぬかれた者よりも、むしろ、ひどく堪え難さうな顏をしてゐた。

彼等は、人が這入つて來るたびに、痩せた蒼い顏を持ち上げて、期待の表情を浮べ、這入つてきた者をぢつと見た。むつくり半身を起して、物ほしげな顏をするのは凍傷の伍長だつた。長く風呂に這入らない不潔な體臭がその伍長は特別にひどかつた。

栗本は、負傷した同年兵たちを氣の毒がる、さういふ時期をいつか通りすぎてしまつた。反對に、負傷した者を羨んだ。負傷者は、あと一ヶ月もたゝないうちに內地へ速りかへされ、××な軍隊の勤務から退いてしまへるのだ。彼は、內地から着いた手紙や、慰問袋を兵營から病院へ持つてきた。シベリアに居る者には、內地からの切手を貼つた手紙を見るだけでもたのしみである。

一時間ばかり後、それを戰友に渡すと彼はアメリカ兵のやうに靴さきに氣をつけながら、氷の丘を下つて行つた。

「俺もひとつ、××××やるかな。」彼は心に呟いた。「丈夫でゐるのこそ、クソ××××！」

負傷者の傷には、各々、戰鬪の片影が殘されてゐた。森をくゞりぬけて奧へ赤衞軍を追つかけたことがある。列車を顚覆され、おまけに、パルチザンの襲擊を受けて、あはくつて逃げだしたこともある。傷は、武器と戰鬪の狀況によつて異るのだ。鐵砂の破片が、顏一面に、そばかすのやうに這まりこんだ者は爆彈戰にやられのだ。挫折や、打撲傷は、顚覆された列車と共に起つたものだ。

負傷者は、肉體にむすびつけられた不自由と苦痛にそれほど强い憤激を持つてゐなかつた。

「俺ら、もう十三寢たら浦潮へ出て行けるんだ。」大西は、それを云ふ時、嬉しさをかくすことが出來なかつた。

「さうかね。」

栗本は、ほゝゑんで見せた。彼は內地へ歸れることを羨んだ。その羨しさをかくさうとすると、微笑が、張り合ひのぬけた淋しいものになる。それが不愉快なほど自分によく分つた。

「なんか、ことづけはないかい？」

「ないやうだ。」

「一と足さきに失敬できると思ふたら、愉快でたまらんよ。」

そこにゐる者は、もはや、除隊後のことを考へてゐた。彼等の胸にあるものは、内地の生活ばかりであつた。いつか、持つて來た慰問袋を開けてゐると、看護長がぶら〳〵病室へ這入つてきたことがある。慰問袋には一ッ〳〵何か異つたものが入れてあつた。寒いところで着るための眞綿がある。石鹸、手拭、カキモチが這入つてゐる。高野山の繪葉書に十錢札を挾んである。……それが悉く内地の匂ひに滿ちてゐた。手拭には、どつかの村の肥料問屋のシルシが染めこまれてある。しかし、それはシベリヤで樂しむ内地の匂ひにすぎなかつた。戰友は、這入つてきた看護長を見ると、いきなり、その慰問袋から興味をなげ棄てた。

「看護長殿、福地、なんぼ恩給がつきます？」

栗本には思ひがけないことだつた。彼は開けさしの袋をベッドにおいたまゝボンやりしてゐた。

「お前階級は何だい？」

恩給が××××、××××××××××××××。そんな看護長だつた。恩給のことなら百科辭典以上に知りぬいてゐた。

「一等卒。」

「ま、五項症に相當するとして……增加がついて二百二十圓か。」

足のさきから腰まで樋のやうな副木にからみつけられてゐる、多分その片脚は切斷しなければなるまい、それが福地だつた。大腿の貫通銃創だ。

「看護長殿、大西、なんぼ貰へます？」

「踵を一寸やられた位で呉れるもんか。」

「貰はにや引き合ひません。」

負傷者は、それ〴〵、自分が何項症に屬するか、看護長に訊ねるのであつた。何項症であるか、それによつて恩給の額がきまるのだ。そんな場合、栗本には、彼等が既に國家に對して債權者となつてゐるやうに見えてきた。

「何だい！　跛や、手なしや、片輪者にせられて、代りに目くされ××××××××××んだ！」彼は何故となく反感を持つた。

しかし、これから、さき、なほどれだけ××××××××××××××××××自分にはうんざりせずにゐられなかつた。××××××××××、いつまでシベリアにゐなければならないか、そのきりが分らないのだ。

「俺もひとつ、輕い負傷をしてやるかな。」

彼は、ひそかに考へた。彼はシベリアにあきてしまつた。×××と鐵砲で撃ち合ひをやり、×××、×××××××、×××××××、さういふことにあきてしまつた。白軍の頭領の×××××は、引渡された過激派の捕虜を×××××た。森の中には×××××××××××××××××雪を靴で蹴散らしてあつた。その附近には、大きいのや、小さいのや、いろ〳〵な靴のあとが雪の上に無數に入り亂れて印されてゐた。森をなほ、奥の方へ二つの靴が、全力をあげて馳せ逃げたあともあつた。だら〳〵流れ出た×が所々途絶え、また、所々、點々や、太い線をなして、靴あとに添ふて走つてゐた。恐らく×××××捕虜が必死に逃げのびたのだらう。足あとは×××××、一町ばかり行つて、そこで樹々の間を右に折れ、左に曲り、うねりうねつてある白樺の下で全く途絶えてゐた。そこの雪は、さん〳〵に蹴ちらされ、踏みにじられ汚されてゐた。凍つたかち〳〵の雪に、×××××××××××××。捕虜は生きのがれやうとあるだけの力を搾つて抵抗したのだらう。森のまた、歸る方の道には、×××××××××××××、白い雪の上に不用意に落されてあつた。手や足は、靴と共にかたく、大理石の模型のやうに白く凍つてゐた。

×××××××××××××××××××××××。×××××××××××××、×××××××××××××。

三

寒暖計の水銀が收縮してきた。氷點以下七度、十一度、十五度、そして、つひに二十度以下にさがつてしまつた。

×××××××××バルチザンの襲擊は鋭利になりだした。××の兵士は、寒氣のために動作の敏活を失つた。むく〳〵した毛皮の外套を豪猪のやうにまんまるくなるまで着こまなければならない。左右の手袋は分厚く重く、紐をつけた財布のやうに頸から吊るしてゐなければならない。銃は、その手袋の指の間から蠟をなすりつけたやうにつる〳〵滑り落ちた。バルチザンはそこへつけこんできた。

兵士達は、始終過激派を追つかけ、家宅捜索をしたり、武器を押收したり、夜半に叩き起され、やにはに武裝を整へて應援に出かけたりしなければならなかつた。鐵道沿線へは多くに分れて小部隊が警戒に出かける命令を受けた。汽車には背のうちから糧秣や彈藥や防寒具が積込まれた。夕闇が迫つて來るのは早く、夜明けはおそかつた。

栗本は、長い夜を町はづれの線路の傍で、幾回となく交代しつゝ列車の歩哨に立つた。朝が來るのを待つて兵士達は、それに乘りこんで出發するのだ。寒氣は疼痛をもつて人に迫つてきた。警戒所でとつた煖爐の溫度は、扉から出て二分間も歩かないうちに、黑龍江の下流から吹き上げて來る嵐に奪はれてしまつた。防寒靴は雪の中へずりこみ、歩くたびに春のやうにがく〳〵動いた。それでも足は、立止つてゐる時にでも常に動かしてゐなければならない。靜止してゐると、そこが凍傷にかゝるからだ。

夜がふけるに從つて、頭の上では、星が切れるやうに牙えかへつた。酒場のある向うの丘からこちらの丘へ燈火をつけない橇が凍つた雪に滑桁をきし〳〵鳴らせ、線路に添ふて走せてきた。蹄鐵のひびきと、滑桁の軋音の間から英語のアクセントかゝつたロシア語が栗本の耳にきた。

「止まれッ！」

ロシアの娘を連れ出したメリケン兵が酒場から歸つて來る時分だ。

「止まれッ！」

馭者のチョッ〳〵といふ舌打ちがして、橇は速力をゆるめた。

「誰だ？」

「心配すんねえ！……えらさうに！」

聲で、アメリカ兵であることが知れた。と同時に、別の憚力性のある若い女の聲が闇の中にひゞいた。聲の調子が、何か當然だといふやうに横柄にきこえた。瞬間、栗本はいつもからの癇癪を破裂させた。暗い闇が好機だといふ意識が彼にあつた。振り上げられた銃が馬の脊に力いつぱいに落ちて行つた。いつ彈丸の餌食となるか分らない危險な仕事は、すべて××××××××××。××××と云つてゐる癖に、アメリカ兵は、たゞ町の兵營でペーチカに溫まり、午後には若い女をあさりにロシア人の家へ出かけて行く。そこで××××××××撒きちらす。それが仕事だつた。而もその札は、××××そつくりそのまゝのものだつた。出兵が始まると同時に、アメリカは、××××、××を浦潮へ積みこんできた。それを見たといふ者があつた。

「何で化の皮を引きむいてやらんのだ！」

兵士達は、××××××××、×××××××××××××××××。メリケン兵は忌々しく憎かつた。彼等は、ひまをぬすんで寝がへりを打つた娘のところへのこ〱やつて行つて××××××。

「何故？」

肌自慢の鼻の高いロシアの娘は反問した。

「ぢや、これと較べて見ろ！」

一ケ月の俸給に受取つた五圓いくらかのその五圓札を出して見せた。

「アメリカ人がどうして、×××××××××？　×、×××××××？」娘は、紅を塗つたやうな紅い健康さうな唇を舌でなめながら眞顔になつた。ロシアの娘にはメリケン兵の不正が理解せられないところだつた。「これが××なら、あんた方がこしらへたんでせう。さうにきまつてる！　どうしてアメリカ人に××××××××××？」

「馬鹿云へ、俺等が俺等の×××××！」彼等は裏から敵を落すことを知らなかつた。

「アメリカ人はずるいんだ。だから××××××××××、×××××××××。××××××××！」

娘は、十五でもう一人前の女になつてゐた。脚の丈夫な、かゝとの高い女靴をはいて歩く時の恰好が、活潑で氣色がよかつた。日本の女には見られない生々さがあつた。

彼等は、ロシア人の家へ遊びに行くひまが、偸まなければできなかつた。勿論偽札はなかつた。し××、××、×××××××××××××××××！　××××××××××××××××××××××××！　××××、××××××××××××××××××。彼は、アメリカ兵が忌々しく、むづ〱した。アメリカは、××××××××××出兵してゐるのだ。××××××、××××××××××××「××××！」×××××××××××××。

栗本は闇を喜んだ。毆られた馬は驚いてはね上つた。橇がひつくりかへりさうに、一瞬に五六間もさきへ宙を辷つた。アメリカ兵は橇の上から懷中電燈でうしろを照した。電氣の光りで大きい手を右のポケットに突つこんで拳銃を握るのがちらつと栗本に見えた。

「畜生！　擊つんだな。」

彼は立つたまゝ銃をかまへた。その時、橇の上から轟然たるピストルのひゞきが起つた。彼は、引金を握りしめた。が引金は輕く、すかくらつて辷つてきた。安全装置を直すのを忘れてゐたのだ。

「どうした、どうした？」

ピストルに吃驚した竹内が歩哨小屋から靴をゴト〳〵云はして走せて來た。

栗本は默つて安全裝置を戻し、銃をかまへた。橇は滑桁の軋音を殘して闇にまぎれこんだ。馬の尻をしぶく鞭の音が凍る嵐にもつれて響いてきた。

「どうした、どうした？」

「逃がしたよ。」

「怪我しやしなかつたかい？」

「あゝ、逃がしちやつたよ。」

栗本の笑ふ白い齒が闇の中にあつた。

四

馬が苦しげに氷上蹄鐵を打ちつけられた脚をふんばつて丘を登つてきた。岩に乘り上げた舟のやうに傾いた橇の底では兵士が、でこぼこのはげしい道に動搖するたび、傷を抑へて齒を喰ひしばつた。

「おや、また入院があるぞ。ウェヘヘ。」

觀音經を唱へてゐた神經衰弱の伍長が、ふと、湯呑をチン〳〵叩くのをやめた。

負傷者は、傷をかばひながら、頭を擡げて窓口へ顏を集めた。五六臺の橇が院庭へ近づいてきた。

橇は、逆に馬をうしろへ引きずつて丘を辷り落ちさうに見えた。馭者臺からおりた馭者は、しきりに馬の尻を鞭でひつぱたいてゐた。

「×××へ行つた中隊がやられたんだ。ウェヘヘッヘ。」

伍長は嬉しげに頓狂に笑つた。

「何がおかしいんだ！　氣狂ひ！」

やかましく騷ぐ音が廊下にして、もう血のしみ通つた三角巾で思ひ〳〵にやられた箇所を無細工に引つく〵つた者が這入つてきた。どの顏も蒼く憔悴してゐた。

脚や內臟をやられて歩けない者は、あとから擔架で運ばれてきた。

「あら、君もやられたんか。」大西は、意外げに、皮肉に笑つた。「わざと、ちよつぴり怪我をしたんぢやないか？」

「……。」

腕を頸に吊らくつた相手は腹立たしげに顏をしかめた。

「なか〳〵内地へ歸りたうて仕樣がなかつたんだからな。」

それにも相手は取り合はなかつた。そして釦をはづした軍衣を、傷が痛くてぬげないから看護卒にぬがして貰れるやうに云つた。痛がつて、やつと服を取ると、血で糊づけになつてゐる襦袢が現れた。それは、蒼白に、がく〳〵顫を慄はしてゐる栗本だつた。

看護卒は、負傷者にベッドを指定すると、あとの者を連れに、又、院庭へ出て行つた。

さま〴〵の溜息、呻き、訴へる聲、堪え難いしかめッ面などが、うつしこまれたやうに、一瞬に、病室に瀰漫した。血なまぐさい軍服や、襦袢は、そこら中へ放り出された。擔架にのせられたまゝ床の上に放つておかれた、大腿骨の折れた上等兵は、間歇的に割れるやうな鋭い號叫を發した。と、ほかの者までが、錐で突かれるやうにぶる〳〵ッと慄へ上つた。

「こんなに多くのものが悉く内地へ歸されるだらうか。そんなことをすれば一年内に、一個聯隊の兵士がみんな内地へ歸つてしまはなければならないだらう。だが、そんなことはさせまい。――このうちから幾人かはシベリアに殘されるんだ。」さきから這入つてゐる者はさういふことを考へた。

輕い負傷者は、

「俺や、シベリアに殘される、その一人に入れられやしないかな？」心でそれを案じた。そして、なま〳〵しい傷を持つて新しく這入つて來た者に、知らず識らず競爭と反感の爪をといだ。

「どこをやられたんだ？　どんなんだ？」

頭を十文字に繃帶してゐる三中隊の男が、疚しさを持つた眼で、まだ軍醫の手あてを受けない傷をのぞきこみにきた。

「骨をやられてやしないんだな？」

栗本は、何を意味するともなく、たゞうなづいた。

「さうかい。」

と、疚しさを持つた眼は、ほッとしたやうに、他のベッドに向いた。そこで、又何か訊ねた。隣の病室でも、やかましく呻きわめく聲が上りだした。

栗本は、何か重要なことを忘れてきたやうで、焦點のきまらない方に注意を奪はれがちだつた。すべてが紙一重を距てた向うで行はれてゐるやうな氣がした。顚覆した列車の窓からとび出た時の、石のやうな雪の感觸や、パルチザンの小銃とこんがらがつた、メリケン兵のピストルの轟然たる音響が、まだ彼の皷膜にひゞいてゐた。

腕はしびれて重かつた。それは、始め火をつけたやうにくわッ〳〵と燃え立つてゐたが、今では反

對に冷え切つて義足のやうに感覺も溫度もなかつた。出血を止めるため傷の上方をかたく紐で縛りつけた。それで手の方へは殆んど血が通はなくなつてゐるのだつた。腕は鉛の分銅でも吊るしてゐるやうに重かつた。

「あゝ、たまらん。早よ軍醫殿にさう云つて呉れろ！」

着かへたばかりの病衣に血がにじみだした。

「辛抱しろ！」通りかゝつた看護卒がちよつと眼をくれた。と、その眼が急に怖く光つてきた。そして血に染まつた病衣をぢつと見つめた。「何だ、仕樣がないぢやないか！　早や洗濯したての病衣を汚しくさつて！」

「あゝ、たまらん！　あゝ、たまらん！　おゝい！おゝい！」

呻きはつゞいて出てきた。

栗本は負傷することを××××。××××××、すぐ內地へ歸れると思つてゐた。そこには、母や、妹や、鬚むしやの親爺が、彼の歸りを待つてゐる。が、その母や妹や親爺は、今、どうしても手が屆かない、遙かな彼方に彼とは無關係に生きてゐるのだ。誰れも彼に憐れみの眼光を投げて呉れる者はなかつた。看護卒は、たゞ忙しさうに、忙しいのが癪に障るらしく、ふくれッ面をして無慈悲にがた〳〵やつてゐた。昨日まで同じ兵卒だつたのが、急に、さながら少尉にでもなつたやうに威張つてゐた。

「誰れも俺等のためなんど思つて呉れる者は一人も有りやしないんだ。」栗本はベッドの上で考へた。

「みんな、自分勝手なことばかりしか考へてやしないんだ！」

——彼は、內地の茅葺きの家を思ひ浮べた。そこは、外には、骨を削るやうな勞働が控へてゐる。が、家の中には、溫かい圍爐裏、ふかしたての芋、家族の愛情、骨を惜まない心づかひなどがある。地酒がある。彼は、さういふものを思ひ浮べた。——俺だつて誰れも省みて呉れん孤兒ぢやないんだ！　それを、どうしてこんな冷たいシベリアへやつて來たんだ！　どうして！……彼は嘆息した。

と、それと一緒に、又哀れげな呻きが出てきた。

「どいつも、こいつも弱みその露助みたいに呻きやがつて！」見廻りに來た、恩給に精通してゐる看護長が苦々しく笑つた。「痛いくらゐが何だい！　日本の男子ぢやないか！　死んどる者ぢやつてあるんだぞ。」

右を見ると、よく酒保の酒をおごつて呉れた上等兵が毛布の下に脚を立て、齒を喰ひしばりぢつと天井を見つめてゐた。その齒の隙間から唸る聲が漏れてゐた。看護長の苦々しげな笑ひに氣がつく餘

裕さへ上等兵には無いようだつた。

「自分がうるさいから叱つてゐるんだ。」と栗本は考へた。「俺等のためなんど思つても呉れやせんのだ！　どうしてこんなところへやつてきたんだ！　どうして、あんな引つくりかへされる列車に乗つて行つたんだ！」

と、又溜息が出て、呻かずにはゐられなくなつた。

――遠いはてのない嘶野を雪の下から、僅かに頭をのぞかした二本のレールが黒い線を引いて走つてゐる。武装を整へた中隊が乗りこんだ大きい列車は、ゆる〳〵左右に眼をくばりつゝ進んで行つた。線路に添ふて向うの方まで警戒隊が出されてあつた。線路は完全に、どこまでも眞直に二本が並んで走つてゐる。町は、まもなく見えなくなり、列車は速力が加はつてきた。線路は谷間にかゝり、やがてそこを通りぬけて、また嘶野へ出た。

雪は深く、線路も、草原も、道もすべてが掃きならされたやうだつた。そこらの林や、立木が遠い山を中心に車窓の前をキリ〳〵廻轉して行つた。いつか、列車は速力をゆるめた。と、雪をかむつた鐵橋が目前に現れてきた。

「異狀無アし！」

鐵橋の警戒隊は列車の窓を見上げて叫んだ。

「よろしい！　前進。」

そして、列車は轟然たる車輪の響きを高めつゝ橋にさしかゝつた。速力は加はつたやうだつた。線路はどこまでも二本が平行して完全だつた。ところが、中ほどへ行くと不意にドカンとして機關車は脚を踏みはづした挽馬のやうに、鐵橋から奔放にはね出してしまつた。

四角の箱は、それにつゞいてねぢれながら雪の河をめがけて顚覆した。

と、待ちかまへてゐたパルチザンの小銃と機關銃が谷の上からはげしく鳴りだした。……

×××の警戒が嚴重になればなる程、パルチザンの怨恨は鋭利になつた。そして、それを慰むべき手段は次第に潜行的に、意表に出てくるのだつた。

線路には、爆破裝置が施されてゐるのではなかつた。破壞されてゐるのでもなかつた。たゞ、パルチザンは、枕木の下へ油のついた火種を入れておくだけだつた。ところが、枕木は炭燒竈の生木のやうに、雪の中で點火されぶす〳〵燻りながら炭になつてしまふのだつた。雪の中で燻る枕木は、外へは火も煙も立てなかつた。上から見れば、それは一分の故障もない完全な線路であつた。歩哨にも警戒隊にも分らなかつた。而も、そこへ列車が通りかゝると、綿を踏んだやうに線路はドカンと落ちこ

み、必然脚を踏み外すのであつた。

五

十三寢ると病院列車に乘つて浦潮へ出て行ける。

それが、今度はアルファベットになつた。なほ十三日延ばされたのだ。十三日に十三日を加へてABCの數だけねなければ浦潮へ出て行かれない。

その理由は何か？　――××××××××××××××。××××××××××××××××××××。

負傷者は、Aの日が暮れるとBの日を待つた。Bの日が暮れるとCの日を待つた。それからD、E、F……。

ゼットが來なければ、彼等は完全にいのちを拾つたとは云へないのだ。

衞兵にまもられた橇が黑龍江を横切つて靜かに對岸の林へ辷つて行く。それが丘の上の病院の眼に映つた。黑龍江は氷の丘陵をきづいてゐた。

橇は、向うの林の方へ、二三枚の木葉舟のやうに小さく、遠くなつて行つた。列車の顚覆と同時に、彈丸の餌食になつた兵士が運ばれて行つたのだ。

觀音經をやりながら、ちよい〳〵頓狂笑ふ伍長をのけると、みんな憂鬱にベッドから頭上げなかつた。

「まだ、俺等は運がよかつたか！」

栗本は考へた。ベッドには、一人の患者がゐなくなると、また別の傷病者がそのあとへやつて來る。それがゐなくなると、又次の者がやつてくる。蔓蒲團も毛布も幾人かの血や膿や汗で汚されてゐた。

彼ほ、それをかむつて、ひそかに自分を慰めた。

負傷者は、死ぬまで不自由と苦痛を持つてまわらなければならない、不具者だ。

彼等は、××××、もとの通りの生きてゐる手や足や耳を辨償して貰ひたかつた。一度切り取られた脚は、それを生れたまゝのもとの通りにつけ直すことは出來ない。それは相談にかゝらない。でも、出來ても出來なくても無理やりに辨償を强要したかつた。不服でむか〳〵してやりきれなかつた。さういふ激しい感情を林へ引いて行かれる橇を見て自ら慰めるよりほか、彼等には道がなかつた。彼等と一緒に兵タイに取られ、入營の小豆飯を食ひ、二年兵になるのを待ち、それから歸休の日を待つた者が、今は、幾人骨になつてゐるか知れない。

ある者は戰場から直ぐ、ある者は繃帶所から、ある者は擔架で病院までやつてきて、而も、病院の

入口で見込がないことを云ひ渡されて林へ運ばれて行つた。中には、まだぬくい血が傷口から流れ出てゐる者があつた。自分たちが、負傷から意識を失つた、若し、それを××××××××××××××××……。彼等は、それを思ふとぞッとした。さういふ者がないとは斷言出來ないのだ。

「煙が上りだしたぞ。ウエヘ、ッヘ。」

伍長が病的に笑つて、湯呑みをチン〳〵叩きだした。

「やめろ！」

彼等は、髪や爪が燒ける惡臭を思ひ浮べた。雪に包まれた江の向うの林に薄い紫色の煙が上りだした。

「誰れやこしだつたんだ？」

腰に彈丸がはまつてゐる初田がきいた。

「六人ぢやといふこつちや。」

「六人？」

六人の兵士は、みな名前を知つてゐた。顏を知つてゐた。一緒に、あの朝、プラットフォームのない停車場から重い背嚢を背負つて、やつと列車に這ひ上り、イイシへ出かけたのだ。イイシにはメリケン兵がゐない。ロシアの娘がまだメリケン兵に穢されてゐない。それをたのしみにしてゐた仲間だ。ある時は、赤い貨車の中でストーブを焚き、一緒に顫へながら夜を明かしたこともあつた。

彼等は、誰も、ものを云はなかつた。毛布をかむつて寢臺からペンキの剝げたきたない天井を見た。戰死者があると、いつも、もと坊主だつた一人の兵卒が誦經をした。その兵卒は林の中へもやつて行つた。

林の中に嗄れた誦經の聲がひゞき渡ると、薪は點火せられ、戰死者は、煙に化して行くのだつた。薪が燃える周圍の雪が少しばかり解けかける。……

自分の意志を刈りこまれ、たゞ一つの××××××××××彼等は、すべての希望を×××××××××された後にかけてゐる。彼等はまだ若いのだ。しかし、そのすべての希望も、あの煙と共に消えなければならない。兵士達には、林の中の火葬の記憶が一番堪えがたかつた。

急ごしらへの坊主の誦經が、いかに聲高く樹々の間にひゞき渡らうとも、それによつて自ら望まない死者が安らかに成佛しようと信じられるか！　そのあとに、もろい白骨以外何が殘るか！

「まだ、俺等は、いゝくぢを引きあてたんか！」彼等はまた考へた。

いのちが有るだけでも感謝しなければならない。

そして、又、

「アルファベット數えてしまへば、親爺や、お袋がゐるところへ歸つて行けるんかな。」そんなことを考へた。「俺等にも本當に恩給を呉れるんかな？」

そこで、一本の脚を失つた者に二百二十圓かそこらの恩給が、×××××××××××××××××××××××××××××××××××××××。

六

病室は、どの部屋も滿員になつた。

胸膜炎で、たき出した番茶のやうな水を、胸へ針を突つこんで汲み取る患者も、トラホーム・パンヌスも、脚のない男も一つの病室にごた／＼入りまじつた。

「軍醫殿、栗本も內地へ歸れますか？」

彼は、自分から癪に障るくらゐ哀れみを乞ふやうな聲を出してきいた。

「あゝ。」

栗本の腕は、傷が癒えても、肉が剝り取られたあとの窪んだ醜い禿は消す譯に行かなさうだつた。

「福島はどうでせうか、軍醫殿。」

「歸すさ。こんな骨膜炎をいつまでも置いといちや場所をとつて仕樣がない。」

あと一週間になつた。と、彼等は、月火水木……と繰り方を換へた。

今は、不潔で臭い病室や、時々夜半にひよいて來るどつかの銃聲や、叫喚が面白く名殘惜しいものに思はれてきた。それらのものを、間もなくうしろに殘して內地へ歸つてしまへるのだ。

「××××××××××××××××××。×××××××××××、××××××××。」

聲が室外へ漏れんやうに小さく囁き合つた。

「××××、××××××××××××××。」

「××××、×××××××××××××××××？」大西は無遠慮に寢臺を見まわした。「さういふ奴は三等症だぞ。」

「三等症どころか、懲罰だ。」

どう見ても、わざとの負傷と思はれる心配がない、腰に彈丸が這まつてゐる初田が毛布からむくむ

く頭を持ち上げた。

「馬鹿云へ、誰れが好んで痛い怪我をする奴があるか！」

彼等は平和だつた。希望に輝いてきた。

また、繰り方を換へた。あした、あさつて、しあさつて、と。もうあと三日だ。と、新しい傷病者が、追ひつかうとするかのやうに、又どか〳〵這入つてきた。その中にアメリカ兵と喧嘩をして、アメリカ兵を軍刀で斬りつけた勇士があつた。

それは彼等をひどく喜ばした。砲兵の××だつた。

肩のさきをピストルでやられてゐたが、彼は、それよりさきに、大男のメリケン兵を三人ぶち斬つてゐた。

××は、下顎骨の張つた、獰猛な、癇癪持ちらしい顔をしてゐた。傷口が痛さうな振りもせず、とつておきの壁の青い別室に坐りこんでゐた。その眼は、頭蓋骨の眞中へ向けられ、何か一つの事にすべての注意を奪はれてゐる恰好だつた。

やつたのは、ロシア人の客間だ。さういふ話だつた。そこで、アメリカ兵は、××より、もつと達者なロシア語を使つて、娘と家族の會話を彼の方から横取りした。××は、癇癪玉をちく〳〵刺戟さ

れた。が、メリケン兵をやつゝけるとあとからもんちやくが起る。アメリカ兵は、やつけられて泣き寢入りに怯へるロシア人や支那人のやうな奴ではない。それを知つてゐた。で、そのまゝ何氣なく歸らうとして、外套に手を通しながら、ちよつとテーブルの方を見た。と、そこに、新しい手の切れるやうな札束があつた。競爭に負けたジャップには鐚一文だつて有れやしないんだらう。——テーブルに向つて腰かけたメリケン兵の眼には彼への輕蔑があつた。

「それや、どこの札だね？」

彼は、片方の袖を通しさしで、手を天井に突き上げたまゝ、テーブルに近づいた。

「お前のもんぢやないよ。」

顏の細長いメリケン兵が横から英語で口を出した。も一人の方は、大きな手で束から二三枚を拔いてロシア人にやつてゐた。その手つきが、また見せつけんばかりに勿體振つてゐた。

「それや、××××ないか！」

彼は、劍吊りに軍刀をつらうとして、それを手に持つてゐた。

「でも、この通り、ちやんと通用するんだよ。」メリケン兵は、また札を二三枚拔いてパチパチ指ではぢいて見せた。

彼は背に火がついたやうな焦燥を感じた。そして、心で日本刀の味を知れ！　と呟いた。

——入院患者をつれてきた上等兵の話はさういふことだつた。

つひすると、ロシアの娘は、××がさきに手をつけてゐた、その女だつたかも知れなかつた。

「ほう、そいつは、俺も加勢するんだつた。いつかは、そんなことになると思ふとつたんだ。」橇の上からピストルを放したメリケン兵のロシア語は、まだ栗本の耳にまざ／＼と殘つてゐた。「眼のこ玉から火が出る程やつゝけてやるといゝんだ！」

けれども青い別室の××は、

「おれは×××。××××××！　将校だ！　××××××××××××××××××！　どうして分らんのだらう！」

と、こんなことを、まるで熱病患者のやうに發作的に聲に出して呟いてゐた。

彼はロシアの娘が自分を××××××××××××××××××、××××××××××××××××××××××××。　×××××××××××××、××××××、×××××××、××××××××××××。　×××××××××××××××××××××××××。

「××、××××××××××！　××××××××××××××××！」

それが不思議だつた。胸は鬱憤としていつぱいだつた。

「もつと思ふさまやつてやればよかつたんだ！　やつてやらなけやならんのだつた！」

彼は、頭蓋骨の眞中へ注意をむけるやうな眼つきをして衝動的に繰りかへした。××××××××、×××××××、×××××××××××××××××。　×××、　×××××、×××××××、××××××××××××××。

「××××、××××××××！　××××××××××××！　××××××××！」

×、××、××××××××、××××××××××、××××××××××××、×××××××××、×××××××××。……

七

鈴をつけた二十臺ばかりの馬橇が、院庭に横づけに並んでゐた。傷病者の携帶品は病室から橇へ運ばれた。銃も、背嚢も、實彈の這入つてゐる彈藥盒も浦潮まで持つて行くだけであとは必要がなくなるのだ。たうとう本當にいのちを拾つたのだ。

外は、砂のやうな雪が斜にさら〳〵とんでゐた。日曜日に働かなければならない不服を、のどの奥へ呑み下して、看護卒は、營内靴で廊下や病室をがた〳〵とびまわつた。「さあ、乘れ、乘れ！」護送に行く看護長が廊下から叫ぶと、防寒服で丸くなつた傷病者が病室からごろ〳〵靴を引きずつて出てきた。

橇には、五人づゝ、或は六人づゝ塒にかたまる鷄のやうに防寒服の毛で寒い隙間を埋めて乘りこんだ。歩けない者は、看護卒の肩にすがり、又は、擔架にのせられて運んで行かれた。久しい間の室氣のこもつた病室から院底へ出ると、壓縮された胸がすが〳〵しく擴がるやうだ。病院へつれて來られる時には、うつゝで、苦痛ばかりを意識しながら登つてきた丘に、今、さら〳〵と快よい雪が降つてゐる。

雪のかゝらない軒庇から負傷者が乘りこむのを見てゐた看護長は、

「何だ？　何だ？」

と、息せき〳〵這入つてきた聯隊の傳令に云つた。

「これであります。」

傳令は封筒を出した。

「どれ？」

看護長は右の手袋をぬいで、よほどそこで開けて見たさうに封を切りに二本の指を持つて行つたが、何か思ひかへして、廊下を奥へ早足に這入つて行つた。

傳令は嵩ばつた防寒具で分らなかつたが、二度見かへすと、栗本と同じ中隊の一等卒だつた。毛の房々しい帽子をぬいで手のひらで額の汗を拭いてゐた。栗本とは入營當座、同じ班の同じ分舍にゐた。卷脚胖を卷くのがおそく、整列におくれて、たび〳〵一緒に聯隊本部一週の早駈けをやらされたものだ。

「おい、おい！」

栗本は橇の上から呼びかけた。

田口は看護長の返事を待ちながら、傷病者がうまく橇に身を合はさうとがた〳〵やつてゐるのを見てゐた。

「おい、おい、田口！……俺だよ。」

痛くない方の手を振ると、傳令は、やう〳〵栗本に氣がついたらしかつた。が二人の間には、膝から下を切斷し、おまけに腹膜炎で海豚のやうに腹がふくれてゐる患者が擔架で運んで來られ、看護卒

がそれを橇へ移すのに聲を喧嘩腰にしてゐた。栗本は田口がやつて來さうにないのを見て、橇からおりて雪の中を馬の頭のさきを廻つて行つた。

「俺ら、今日歸るんだ。」彼は、歸れることに嬉しさを感じながら、「みんなによろしく云つて吳れ。」

田口は、何か譯の分らないことを呟いて、當惑さうな色を浮べた。そして、こゝから又セミヤノフカへ一個大隊分遣される、兵士が足らなくて困つてゐる、それに關する訓令を持つて來た、と云つた。一個大隊分遣される、それや、內地へ歸る傷病者の知つたことぢやない。が、田口のなんか事ありげな氣配で栗本は直ぐ不安にされた。

「また突發事件でもあつたんか？」

田口は、今、こゝへ來しなにメリケン兵の警戒隊に喧嘩を吹つかけられた、と告げた。二三日前、×××××××××××××、兩方が、いがみ合つてゐる。メリケン兵とも衝突するかもしれない。

そこへ軍醫が出て來た。あとから、看護長がついてきた。その顏に一種の物々しさがあつた。

「みんな一つぺん病室へ引つかへすんだ。」

軍醫の聲は、看護長の物々しさに似ず、悄然としてゐた。

負傷者は、一寸見當がつかなかつた。なんでもないことのやうでもあり、又、非常な突發事件のやうでもあつた。彼等は乘込んだ橇から暫らく立上らうとしなかつた。そこらにゐた看護卒も軍醫の言葉を疑ふものゝやうにぢいつとしてゐた。しばらく、さら〳〵と降る雪の音ばかりがあつた。

「一つぺん病院へ引つかへせ！」相變らず、軍醫の聲は悄然としてゐた。

「雪が降るからですか？」

誰れかゞきいた。

「うゝむ。」

「ぢや、雪がやんだら歸れるんですね？」

返事がなかつた。

軍醫の云つたことが間違ひでないのを確めた看護卒は、同じ言葉を附近の負傷者に同情を持たぬ聲で繰りかへした。

栗本は、脚がブル〳〵慄へだした。

「俺等をかへさんといふんぢやあるまいな？」

田口は、また困つたやうな顏をして答へなかつた。

栗本は、一本の欅にでもすがりたい氣持をかくして、殊更、氣輕く、

「こつちの××がメリケン兵を斬りつけたんが悪かつたんかい？」と重ねてきいた。

「あゝ。」田口は氣乘りのしない返事をした。「それで悶着がおこつてきたんだ。」

「だつて、あいつら、僞札を使つてたんぢやないか。」

田口は、メリケン兵を悪く云ふのには賛成しないらしく、鼻から眉の間に皺をよせ、不自然な苦い笑ひをした。栗本は、將校に落度があつたのか、きかうとした。が、丁度、橇からおりた者が、彼のうしろから怠氣さうにぞろ〳〵押しよせて來た。彼は、それをさきへやり過ごさうとした。みんな防寒具にかゝつた雪を拂ひ拂ひ彼につきあたつて通つた。ブル〳〵慄へてゐる脚はひよろ〳〵した。彼は、道の眞中にある石のやうに邪魔になつた。看護卒がやかましく呶鳴つた。

脇へよけやうと右へ向くと、軍醫が看護長に、小聲で、

「橇は、うまく云つてかへして呉れんか。」

さう云つてゐるのが聞えた。彼は、軍醫の顏を見つめた。そこに何か深い意味があるやうに感じた。軍醫は、白い顏を傷病者の視線から避け、わざと降る雪に眼を向けてゐた。

栗本は、ドキリとした。もう、如何に田口から委しいことをきいても、取りかへしはつかない、と感じた。

病室の入口では護送に行く筈だつた看護卒が防寒服をぬぎ、帶劍をはづして、二三人で、何かひそ〳〵話し合つてゐた。負傷者が行くと、不自然な笑ひ方をして、帶皮を輪にしてさげた一人は急いで編上靴を漆喰に鳴らして兵舍の方へ走せて行つた。

患者がゐなくなるので朝から焚かなかつた煖爐は、冷え切つてゐた。藁布團の上に疊んだ敷布と病衣は、身體に纏はれて出來た小皺と、垢や脂肪で、他人が着よごしたものゝやうにきたなかつた。

「あゝ、あゝ、××××××××××××××。××××××××××××！」

彼等は、すつかりおさらばを告げて出て行つた筈のベットへまた逆戻りした。大西は、いつもの元氣に似ず、がつかりして、ベッドに長くなつた。

「ほんまに家まで去んでみにや、どんなになるか分れやせん。」

あの封筒に這入つたもの一ッが、梶を反對の方向にねぢ向けてしまつた。彼等はそれを感じてゐた。梶は、又、彈丸が降つてくる方へ向けられた。アルファベットを繰る間絶えず胸に描いてゐた美しい、魅力のある內地が、あの封筒一ッに覆がへされてしまつた。

栗本は、ベッドに腰かけて、心の動搖と戰つた。茅葺きの家も、圍爐裏も、地酒も、髯みしやの親爺も、おふくろも——それらは安らかさと、輝かしさに滿ちてゐる——すべてが自分から背を向けて

遠くへ飛び去つてしまつた。内地へ歸りたさに、どれだけ目に見えぬ心を使つたか！　一寸した××のしわざが、俺等に祟つて來るのだ！　下らんことのために、こゝに居る者の願望が根こそぎ堀り取られてしまふのだ。これからさき、どうなることか！

二重硝子の窓を通して、空の橇が馭者だけを乘せて、丘の道を一列につゞいて下るのが見えた。馬は、人を乘せなかつたことが嬉しいかのやうに奔放にはねてゐた。粉雪は一層數を增して斜に、速いテンポでさら〳〵と落ちてゐた。

「さうだ、あたりまへなら、今頃、あの橇で辷つてゐる時分だ！」

彼は、ふと、こんなことを考へた。

伍長は、手箱の湯呑をいぢつてゐたが、觀音經は忘れたかのやうに口にしなかつた。

「俺や、また××××××××、どうしろ云ふたつて動けやせん！」骨折の上等兵は泣き顏をした。

八

錆のきた銃をかついだ者が、週番上等兵につれられて、新しい雪にぼこ〳〵落ちこみながら歩いて行つた。一群の退院者が丘を下つて谷あひの街へ小さくなつて行くと、またあとから別の群が病院の門をくゞりぬけて來た。防寒帽子の下から白い繃帶がはみ出てゐる者がある。ひよつく〳〵跛を引いてゐる者がある。どの顏にも久しく太陽の直射を受けない蒼白さと、病人らしいむくみがあつた。その顏に××と、××××と、××は、どう見ても似つかはしくなかつた。

珍らしく晴れ渡つた朝だ。しかし、下つて行く者は、それをたのしむ色はなく、顏は苦りきつてゐた。

中隊では、彼等が歸つて來るのを待つてゐた。××××××へ分遣する部隊に加へるか、××××兵に備へる部隊に加へるか、そのいづれかだ。××××の警戒隊は、大きい銃をかついで街をねり歩いてゐた。意地の惡い眼を光らせ、日本の兵營附近を何回となく行き來した。それは、キツカケが見つかり次第、衝突しようと待ちかまへてゐる見幕だつた。中隊では、おだやかに、おだやかにと、兵士達を抑制してゐた。しかし、兵員は充實して置かなければならなかつた。

二三人の小人數で、日本兵が街を歩いてゐると、武器を持つた××××兵は、挑戰的につめよつて來た。

兵士はヒヤ〳〵した。同時に、なんとも云へない不愉快な反撥したい感情を味つた。それは、朝鮮

人が×××に對して持つ感情だ。そんな氣がした。彼等は、わざと知らぬ振りをして、而も、×××兵が居る側へ神經を集中して通りぬけなければならなかつた。が、向うから、こつちを打つた場合、それでもおだやかにと心掛け、打たれてゐることが出來るか。いや、それは出來ない。で、兵士の數を負けないだけ無理やり、ふやしておかなければならなかつた。×××××へ一個隊行かなければならないことは、こゝで大きな打擊だつた。

聯隊の二階では、長靴に拍車をつけたエライ人が、その拍車をがち〳〵鳴らしながら、片隅の一室に集つて何か小聲で話し合つた。それから傳令が走らされたのだつた。……

大西も、栗本も、腰に彈丸がはまつた初田も週番上等兵につれられておりてきた。

「こんなに、さはつたらころびさうな連中を×××××××××××××××××××！」

その群の一人が云つた。

「數が足らんのだよ。」

「足らんだつて、×××××××××！」

彼等の胸は、强暴な思想と感情でいつぱいだつた。

彼等は、橇から引つかへした日に、一人一人、軍醫の診斷を受けた。それが最後の試驗だつた。それによつて、內地へ歸れるか、×××××××××××××××××××××××××××、いづれかに決定されるのだつた。

病氣を癒すことにかけては×××××、×××××××××××××××××××××、×××××。×××、×××××××××××××××××××。×××、×××××××××××××××××××。×××、×××××××××××××××××××、×××××××××××××××××××。×、×××、×××××××××××××××××××。

×××××、××、×××××××××××××××、×××××××××。——××

×××××、×××××、×××××××××××××××××××××××××

×××××。×××××××、×××××、×××××××××××××××××

×××××××××××××、×××××、×××××××××××××××

×××××××××××××××××××××××××××××××××××

×××××××××××××××××××××××××××××××××××

×××××××××××××××××××××××××××××××××××

×××××××××××××××××××××××××××××××××××

×××××××××××××××××××××××××××××××××××

軍醫は、診斷にやつて來る兵士が、どれもこれも衰れげな元氣のない顏をしてゐるのを見た。

「私は、內地へ歸らして下さい！」

その眼は、純粹な憐れみを乞ふてゐた。

「どうだ、もう並食を食ふとるんだらう？」
軍醫は、上唇を横にかすり取られた幼なげな男に、かうきいた。
「はい。」
「どれ、口を開けてごらん？」
この男は、アングリ口を開けて見せた。
「よし！　もうよくなつとるね。」
そして、彼は、診斷室を出て行くやうに、合圖に手を動かした。××××「××」××××××
×××××××××、
「××、××、××××××××××××××××××××××××××××××！」
と、子供らしい眼で訴へた。そして、そこら中を見まわした。軍醫の表情には冷たい、固いものがあるばかりだつた。
その少年は、もう一度、上唇のさきが無くなつた口を哀れげに擴げた、
「こんなにおとなしい無抵抗な者を××××××ですか！」と云ふやうな眼をした。
「この眼に負けちやいかん！」軍醫は自分を鞭打つた。

耳朶のちぎれかけた男も、踵をそがれた男も、腰に彈丸のはまつた男も、上膊骨を折つた男も、それ〴〵、憐れみと、懇願の混合した眼ざしを持つて弱々しげに這入つてきた。×××××××××××××××××××。
「どいつも、こいつも、×××××××××××！」軍醫は考へた。
栗本も同樣に、憐れみを乞ひ求める眼と、弱々しげな恰好をして、軍醫の前へやつた行つた。××、
×××××××××××××××××××××××××××××××××××。
「どうだな？」
「傷の下になんかこりのやうなものが出來とるんですが。」
「手は伸ばせるかい？」
「いゝえ、まだ伸びません。」
「これを握つてごらん。」
軍醫の態度には、どつか柔かい、溫かげなものがあつた。栗本は、出された甲のすべつこい、小さい手を最大限度に力を入れて××××××、××××××、××××××××××。××
×、××××××××××××××。

「傷はまだ痛いか。」

「はい。」

「よしッ！」

軍醫は出て行くやうに手を動かした。と溫かげなものが、急に、頑固な冷たいものに變つた。

「××××××××××××××！　この病院でもいゝ、こゝに置いて下さい！　いやだ！　××××××××××××××！」

栗本の眼はそれを訴へた。そして、軍醫の顏を、何か反抗するやうに見つめた。

「よしッ！」

「××××××××××××××！」

彼の眼はもう一度それを訴へた。

「よしッ！」

軍醫の頑固な冷たいものが、なほ倍加して峻嚴になつてきた。

ベッドに歸ると、ひとしほ彼の心は動搖した。まだ絕望したくはなかつた。窓外には、やはり粉雪がさら〳〵と速いテンポで斜にとんでゐた。――どつちへころぶことか！　今は、もうすべてが軍醫

の甲のすべつこい、光つてゐるあの手一つに握られてゐるのだ。

彼は診斷室の方の物音と、廊下を通る看護卒の營內靴に耳をすまして時を過ごした。甲のすべつこい、てら〳〵光つてゐる手は信賴できない性格の表象だ。どつかの本で見た記憶が彼を脅迫した。三時半を過ぎると、看護卒が卑屈な笑ひ方をして、靴音を忍ばし、裏門の方へ歩いて行つた。××××××、××××××××××××××××。××××××××××××××。栗本は夕飯がのどを通らなかつた。平氣でねてゐるのは、片脚を切斷した福島と、どうせ癒る見込みがない腹膜炎の患者だけであつた。

電燈がついてから、看護長が脇の下に帳簿をはさんで、にこ〳〵しながら這入つて來た。その笑ひ方は、ぴりッとこつちの直觀に觸れるものがあつた。看護長は、帳簿を擴げ、一人一人名前を區切つて呼びだした。空虛な返事がつゞいた。

「ハイ。」

「は。」

「は。」

呼ばれた顏は一ッ一ッ急にさッと蒼白になつた。そして頰の筋肉が痙攣を起した。

「ハイ。」

栗本はドキリとした。と、彼も頬がピク〳〵慄へ引きつりだした。

「×、××××××××、××××××××。×××！」

同じやうに、にこ〳〵しながら看護長は扉を押して次の病室へ出て行つた。

×××××××××××××××。×××、×××××××××××××××××××。

×××、×××××××××××××。×××××××××××××××。

×××××××××××××××。×××××××、×××××××××××××。

××、×××××、×××××。

一つの器械は、役に立たなくなるまで直して使はなければ損だ。それと同じだ。そのために病院の

×××××××××××××××！　×××××××××××××、×××××、××

×××××××××××××。

×××、×××××××××、×××××××××××××××××××が××。×××××

×××××××××××××。×××××××××××××××××××。

彼等は丘を下つて行つた。×××××××××××××××××××××××。足を引づゝてゐるものがある。ひよつく〳〵跛を引いてゐる者がある。防寒帽の下から白い繃帶がはみ出してゐる者がある。彼等は、銃をかつぎ、彈藥盒と劍を腰にまとつてゐた。どの顏からも、まだ、患者らしい疲勞がとれてゐなかつた。

すが〳〵しい朝だ。バイカル湖の方から來る風に、雪を含んだ雲が吹き拂はれて、太陽が遠い空に素裸體になつてゐた。彼等は、今、氣がねをすべき何者もなかつた。何者にもとらはれることはいらなかつた。×××××××××××××××××××××××××××××。

新しい雪は、彼等の靴の重みにボコ〳〵落ちこんだ。彼等は、それを蹴つて歩いて行つた。……

（一九二八、十一月）

春の一圓札事件

一

晩に眠ると、健二は、中學へ行つてゐて英語を教はつてゐることをよく夢に見た。また精巧な器械を使つて、人間の心の寸を取る方法を教はつてゐることがあつた。いつでも英語が非常にうまくつて、毛唐の先生を相手に喋べつたりしてゐた。單語や文句が、現では知りもしないのに、ひとりでに口の端に浮んで來た。朝になつて思ひかへすと自分ながら不思議でおかしかつた。

彼は、高等小學校二年生である。彼は熱心に中學へ行きたがつてゐることは、兩親もよく知つてゐた。

父は、養成所を出た先生だつた。自分の村の小學校で、六十に手が屆きさうになりながら十年一日の如く二學年と三學年を一年交代に受持つてゐた。儀式の時に坐る席順は、師範を出たての生若いへなへなの先生よりも下だつた。彼は薄くて白い口髭を貯へてゐた。「ひげのおぢイやん！」子供達は一方

では親しみを持ち、一方では輕蔑してさう呼んでゐた。彼は叱つても恐れる者は一人もなかつた。

母は三段歩ほどの畠を作り、その餘暇に山へ薪出しに行つてゐた。取込み仕付けの忙しい時分には學校が引けてから父が鍬をかついで畠へ行つたりした。

健二の村は、山村ではなかつたが、平野が盡きて、もう山にかゝる、その境界のところにあつた。山伐りをやつてゐる若者がだいぶあつた。

二學年を卒業すると、彼は十里ほど向うの海岸のある中學の編入試驗を受けに行くことになつた。田舍の三流中學だつたが、それでも健二には、侮り難い、いや、立派なあこがれの園だつた。三學年の缺員が二人しかないところへ、受驗者は十八人からあつた。英語、代數、東洋史が難關だつた。あとで考へると、自分で自分を侮りたいくらゐアヤフヤなことを答案に書いたが、幸、彼は、二名の中へ這入つてゐた。

試驗がすんで、山麓の村へ歸つて、猫車で薪出しの手傳をしてゐると、三日目に合格の通知が來た。彼は猫車から離れて、脚にバネがついてゐるやうに、そこらあたりをはねまわつた。胸がすッとして背が伸びるやうだつた。

入學すると、服、靴、帽子、教科書、夜具などが必要になつた。何れも金のかゝることで家ではひ

とモメだつた。

服と靴とは父が以前に使つてゐた古いのを持つて行くことにした。小倉の服に、ところどころツギがあたつてゐて、健二の身にきつちりそぐはなかつた。母が端を縫ひこんだりした。靴は永いこと靴墨を塗らないので、紐が切れて、ひゞが入り、それにほこりがしみこんでゐた。夜具は、家でお客がある時、物置から出して來て使ひ、その後は、またしまつておく、取つておきの一帳羅だつた。だが惜いことには、これにもほこりがしみ込んで、なかなかその臭が拔けさうでなかつた。

ある朝、ほの暗いうちから仕度をして、お堂の前から出る一番の乘合馬車で、健二は出發した。父は、必要品で胴をふくらませた古行李をかついで馬車が出る所まで送つて來た。

「折角たいそうをして學校へ行くんだから一生懸命に勉强をしてえらうならにやいかんぞ。」

「うむ。」

「俺等、金が無うて成規の學校を出なんだから、一生涯、頭が上らん。われや、どうしても卒業して免狀を取らにやいかん。中學を出たら、その上へもやつてやる。」

健二は默つてうなづいた。彼は木綿の袴の下へつゝましく、兩手を入れてゐた。彼は嬉しさをかくさうとしてゐたが、顏にはひとりでに、にこやかな笑ひが浮んで來た。

馬車屋は栗毛を厩から引つ張り出して來た。痩せてひよろ〳〵とした老馬だつた。毛色がひからび、色あせてゐた。古い箱馬車も風雨にさらされて、老馬と同じやうにひからび色あせてゐた。前の馭者臺の柱の一本は、ある時、馬車同志が衝突して折れ、副へ木を太い釘で打ちつけてゐた。それはまだ最近のことで、副木だけが新しく白くつて不調和に目だつた。

やがて、二三の客と、お堂の軒下に置いてあつたラムネ箱と、酒の空樽を積んで、馬車はがたゞ〳〵搖れながら、動きだした。車輪も心棒もすりちびて、惡くすると毀れさうだ。

「ぢや氣をつけて……」父は窓からのぞきこんで息子に云つた。

二

――お變りはないか。

西洋史と、地理附圖は家にある分を送る。

筆記帳も俺のが一册ある。それを送る。

晩には早く寢、朝早く起きて勉强せよ、毎週三十錢の小遣中、半額。十五錢は貯金せよ。（寄宿舍では舍監に學資を托しておいて、舍監から毎週小遣に三十錢づゝ渡されることになつてゐた。）

鉛筆とペンも家にあるのを送る。ペン軸は少し古いが辛抱せよ。健康に注意のこと。――

――俺の一生はもうこのまゝすんでしまふが、御身は不肖の轍を踏む勿れ。中學を卒業してなほその上に學ぶ心がけにて勉強すべし。他の下積となりて踏みにじらるゝは苦しきものぞ。

飯を食ひすぎてはいけない。みだりに海岸の生水を飲むべからず。昨日は四月八日。寄宿舍でも花團子があつたか。團子のやうなものは用心して食へ。家では粟團子をこしらへた。お前にもかげ膳をした。

鞄の代りに風呂敷を、古いのだが洗つて糊をつけて送る。物は丁寧に使へ。――

息子が出發して暫らくたつと、父の健吉はかういふ風な手紙をたび〳〵書いた。

三

寄宿舍には五年生、四年生、三年生……と、一年生まで嚴とした階級制度があつた。朝は、四五年生に挨拶をしなければならない。行き違ふ時には、帽子を取つて禮をしなければならない。掃除、雜用、靴磨きまでさせられる。しない者には鐵拳制裁がある。軍隊よりもつとひどいかもしれない。學校ではあまり出來ないらしい、ズボラで、一寸馬鹿のやうな五年生が、ドテラを着て、頭にタオルを卷き、下駄のまゝで下級生のアラを拾つて各室を歩きまわつたりしてゐる。

一體に、生徒達は裕福な家庭の子弟だつた。苦勞を知らないお坊ちやんだつた。一二流の中學で入學試驗にスベつてからやつて來た連中だつた。外から菓子賣りがやつて來ると毎日、何かつまんで、たあいもない話をしながら食つてゐた。

身體に合はない、つぎのあたつた小倉服にボロ靴をはいてゐる健二は、彼等と一列に並ぶと、どう見ても、貧相で、見すぼらしかつた。いかにも家でがつ〳〵に育つて來た、彼等の中間に這入る柄でない者のやうに見えた。學級こそ三年ではあるが、寄宿舍では新米だつた。三年生はもとより、二年生も先輩ぶつて、彼を眈目にかけた。服裝が見すぼらしいので、一層彼等は輕蔑して相手にしなかつた。

健二はいつものけ者にされ勝で、一人ぽつちだつた。

日課がすむと彼は、本を懷にして、海岸へ出て行つた。白砂の濱、松原、藍色の海、風をはらんで一ぱいにふくらんだ白帆、地引き網など何れも彼には珍らしくつて、見ても見てもあきなかつた。海の彼方には霞に包まれて島が横たはつてゐた。小豆島である。汽船が靜かに海の上をすべつて行つた。山麓の村よりはよほど明るくつて、晴々としてゐた。彼は、きれいな砂の上に坐つたり、寢ころんだ

りして本を讀んだ。手に握ると、砂は指の間から拔け落ちてしまふ程、細かゝつた。讀むことに疲れると、砂をいぢつたり、裾をまくつて海の中を歩いたりした。

ある日、彼は、いつものやうに夕方まで白砂の上で本を讀んだ。夕食時刻頃になつて、帶を解いて、着物の砂を振ひ落してから、寄宿舍へ歸つた。

「栗本、五年生が第三室へ來ろつて呼んでるよ。もうづゝと前から君を探してたんだ。」同室の一人が何か不服があるやうにさう云つた。

「さうかい。」

一、二、三年生は、部屋の隅に集つて、非常なことがあつたやうに顏色をかへて、何か囁き交してゐる。健二が自分の机へ本を置きに行くと、本立がめちやくにされてゐた。誰れかゞ、本の間に何か挾まつてゐないか探しまわつたものらしい。

「どこにかくれてゐたんだ。早く行かないと駄目だよ！」

夕飯がすんで、そのあとの口をもぐ〳〵さしながら、四年生が棘のある眼つきをして這入つて來た。

健二は腹がへつてゐたけれど、食堂へ行くよりさきに、第三室へ行つた。

五年生が、六七人椅子に腰かけて、えらさうにふんぞりかへつてゐた。下駄や靴をはひたまゝで、

ドテラを着たり、鉢卷をしたりしてゐた。

「どこへ行つてたんだ！」一人だけ、制服を着け、帽子をかむつてゐる第五室の室長がきいた。

「濱へ行つとりました。」

「濱で何をしてゐた。」

「本を讀んどりました。」

「本を——本を濱へ行かなくたつて、ちやんと寄宿舍で勉强出來るやうになつて居るぢやないか！」

「……」

「おい、お前、金をいくら持つとるか？」だしぬけに、どてらを着てゐる男がきいた。

「は、七十錢ほど持つとります。」

「七十錢ほど、……確にさうだな。ぢや出して見ろ。この机の上で勘定して見ろ！」

健二はポケットから財布を出した。

健二と一緒に第七室へ初めて這入つた一年生のHが、筆立ての中に入れてあつた一圓紙幣をなくしたのであつた。一昨日の朝筆立ての中に入れて、今朝、學校へ行くまでやはり這入つてゐた。とHは云ふのだつた。Hは、紺絣の上下揃つた袷をきちんと着て、いかにも良家に育つた少年らしく、おと

なしくつて、風雨にもまれてゐない軟かい顏つきをしてゐた。そして彼は金を失つたことでショゲこんでゐた。上級生達はHに同情した。彼等は先づ下級生を一人づゝ呼んで取調べた。何か事件があるごとに寄宿舍では全部の者を一と通り調べる習慣になつてゐる。それをこゝでは「お說教」と云つてゐた。上級生は全部を調べながら、最初から健二に目ぼしをつけて疑念を深くしてゐた。見すぼらしくつて、貧乏くさい者はあらゆる場合に損である。健二はやつて來やうがおそく、探しても寄宿舍にゐなかつたことでなほ深く彼等から睨まれた。彼は、財布をさかさまにして金を机の上に出した。上級生が四方から眼を注いで見はつてゐる前で、それを數へた。間の悪い時には仕樣がないものだ。たしか七十錢と思つてゐた金が一圓三十錢あつた。

「それが七十錢か、……嘘を云つてやがる！」

言葉が終らぬうちに、ドテラの男の拳が頰をめがけてとんで來た。

左側の頰から頭が、痛く、熱くほてつてざく〳〵疼き出した。健二は思はずそこへ手を持つて行つた。

「嘘を云つてやがる！」

ドテラは繰りかへした。健二は強い壓迫を感じた。

「お前はHの筆立ての中に一圓入つとつたのを知つとるだらう？」

左側の疼痛はやがて、頭ぢゆうに擴がつて、わく〳〵、そしてまたざく〳〵してのぼせたやうに頭が濁つて來た。彼は泣いちやいられない、と思つてゐるのに、ひとりで涙が出て來た。

「お前はHの筆立てに一圓札が入つとつたのを知つとるだらう？」

「いゝえ。」彼は頸を左右に振つて言葉を強めるやうにした。

「お前がHの筆立てをごそ〳〵のぞきこんでゐるところを見た者があるんだ。」

「……」

「嘘を云つても駄目だぞ！」

健二は、自分がほんとうに悪いことをした者のやうに身體がほてつて來た。彼は、今日、自分がしたことを思ひかへしてみた。或は、Hの机の方へ無意識に歩いて行つたかもしれなかつた。何氣なく筆立を見たかも知れなかつた。それを傍から、邪推深く注視した者があつたかと思ふと、氣味が悪くて、恐ろしい氣がした。しかし、一圓札はどこまでも知らないことだつた。で、彼は、どこまでも知らない、しないを繰りかへした。

——昨日と、今日、いくら金を使つたか、何を買つたか、家から金を送つて來たか、そんなことま

で彼は細かく訊ねられた。

上級生は、これに間違ひはないと目ぼしをつけてゐる健二が、どうしても自白しないので、つひには、服のポケットから、机の抽出しの隅々まで詮索した。何もかもが徒勞に歸すると、最後に勝手に開けて見ることが出來ない手紙を健二のところへ持つて來て開けさした。父から來たものだ。

「この中に、札を挾んでかくしとるかも知れん、開けて見ろ！」

「いえ、何も入つとりません。」

「ぢやなほ開けていゝ筈だ。——開けて見ろ！」

健二は棒のやうに動かずに突つ立つてゐた。開けるのがいやだつた。あまりにケチくさくつて貧乏たらしいことが書かれてゐるからだ。

「おい開けて見ろ！」

彼は、ついに中の卷紙を引き出した。すると上級生はそれを引つたくつて、卷いた紙をばら〳〵空中で振り擴げた。封筒の中にも、卷紙の芯にも求めるものは入つてゐない。すると彼等は、手紙を讀み出した。

今まで無理につくろつてゐた彼等の威嚴が急にくづれてしまつた。手紙が彼等から取つてつけの怒

りを奪つてしまつた。金の値打も苦勞も知らない彼等には、三十錢の小遣の中十五錢は貯金せよ、とか、栗團子をこしらへてかげ膳をした。といふことが、おかしく面白いのだ。

「ふむ、お前の親爺さんは、南瓜に味噌でもつけて食つてるんか！」

ドテラが輕蔑したやうにこんなことを云つた。

自分の室にかへると、健二は押入れの中へ這ひ込んで、一人で、ほこり臭い蒲團に顏を埋めて泣いた。父も自分もこんなに侮蔑されたことはなかつた。村で人から馬鹿にせられながら先生をしてゐる父も、その子の自分も、母も、三人揃つて人間の仲間からはづされたやうに哀れでかなしかつた。涙がいくらでもこみ上げて來て止まらなかつた。

「くそッ！　見てやがれ！　いつぞかたきをうつてやるんだ！　見てやがれ、かたきをうつてやるんだ！」

四

事件は、上級生で調べがつかなくつて、舍監の手に移された。頭が馬鹿に大きい舍監で、ヘッドといふ綽名がついてゐる男だ。舍監は、一週間ほど、その大きな頭を惱ましたが、彼には金の行くえは

分らなかつた。Hが筆立てに札を入れてゐるところを見た者は勿論一人もなかつた。筆立てから出してゐるところを見た者が誰もなかつた。

結局、誰れが盗んだか分らずしまひだつた。しかし、生徒達は、殆んど健二が盗んだことにしてしまつて、いつまでもそれを忘れなかつた。何か事があると指を鉤の恰好に曲げて、にゆつと健二の眼のさきへ突き出したり、傍で何か囁いて、健二に變な視線を投げかけたり……

五

一學期も半ばすぎた六月の或日、田舍から通じてゐる一本筋の街道を一臺の古馬車が、がた〳〵ゆれながら、S町へ這入つて來た。例の色あせた栗毛の老馬が、白い副木を打ちつけた馬車を引いてゐる。山麓の村から來たのだ。

馬車はS町に入つてやがて行くと、中學へ行く横町のところで止まつた。中から、サージのひにやけて赭くなつた詰襟を着た、白い口髭の老人が降りて來た。

「また歸りに乘せて貰ふせに……」

老人は、馬丁に云つて、横丁へ消えて行つた。健二の父である。

三十分ほどたつと、彼は、胴のふくらんだ古行李をかついで横丁を馬車から降りた方へひよく〳〵引つかへして來た。彼のあとから、健二が、袴をはき、帽子をかむつて、悄々とついて來た。古馬車は、もう二人を待つてゐた。

「おや、お歸りかな。」

馬丁がいぶかしさうに健二を見てこんなことを云つた。

六

一週間ほど後に、健二は、猟車を押して山へ薪出しに行つてゐた。彼の手足は次第に大きく、掌の皮は厚く剛くなつていつた。晩になると、やはり學校のことを夢に見た。だが、再び學校へ行く機會はやつて來なかつた。

いかにも良家に育つたらしいHは二學期になつて突然退校になつた。傳票に他人の名前を買いて販賣部から物を取つてゐたのが發覺したのである。春の一圓札事件も或はHが捏造してウソをついてゐたのではないか。Hが見かけによらぬ不良少年であることを知つた頭の大きい舍監は、ひそかにさう考へてゐた。——第一、あの時、筆立てに入れたのを見た者がなかつたぢやないか！

舍監は暫らく考へこんでゐた。――あの見すぼらしい風をした生徒はどうなつたことか！

以上は、十年ばかり前の話である。

健二は今、農民組合で働いてゐる。

（一九二六、十月）

海の第十一工場

一

滿潮時には、工場は海に浮いた。

三ツ又の避雷針が尖つてゐる高い煙突がさかさまに水に映つて、波の動搖に應じて、ぬる〳〵とのへりを打つ。

その埋立地の工場は、三方にコンクリートの墻壁をめぐらしてゐた。墻壁は、監獄の墻壁のやうだ。がつしりと陰鬱に聳えてゐた――それも、影が海に映つて、波にちら〳〵と碎けた。

三方の門を閉すと、そこは、村とは全然交渉が遮斷されるやうになつてゐた。デモンストレーションや、勢ひよくばら撒かられるビラや、飢餓のうめきから、そこは全然絶縁されて、別の世界を作つてゐた。糧食も、原料も、人間も、發動機船が海から持ちこんだ。

そこは組合の手が伸びることに對して、病的な神經過敏症を誇つてゐた。

薄い、しつとりとした朝霧を、發動機船が、けたゝましい爆音で破りながら棧橋へやつて行く。

半田は、對岸の本部から、腹がペコ〳〵になつて眼がさめて、それを見た。

發動機船の甲板には、勞働者が、蟻のやうにいつぱいたかつてゐた。それが、すぐ手が屆きさうなところに見える。海に浮いてゐる第十一工場へ通つてゐる者達だ。

半田は空腹から、胃囊が疼いた。そして、口の中が苦い味がした。部屋には、垢によごれた男の臭ひと、醬油くさい、いきれがこもつてゐた、ピケットに疲れ切つた連中が破れ蒲團にはたかり合つて、鼾いつぱいにぐつたり眠入つてゐた。半田は握り飯のある飯櫃の方へにじりよつた。

「それや、ゆふべ、動員から戻つた者が食つちやつたよ。」

飯櫃をのぞきこんだ氣配に感づいた沖は、向うをむいたまゝ蚤に喰はれたあとを快げにごし〳〵搔いてゐた。

「さうか。茶は、あるかしらん？」

「あるだらう。」

半田は、琺瑯引きの藥罐を取つて、ぢかに口に持つて行つた。茶は、茶の味がせずに、錆びくさかつた。彼は、それを、藥罐が空になるまで、指で蓋をおさえてごく〳〵とのどを鳴らした。

罷業開始と同時に、十三ある工場のうち、十二までが完全に息の根をとめてしまつた。たゞ一ツ、最も大きい、最も完全な最新式の設備を有する第十一工場だけが作業をつゞけてゐた。はじめは、通勤する者が陸を歩いてやつて來た。半田らは、そいつを途中に待ちかまへて喰ひ止めた。爭議團に引つぱりこんだ。來ない奴は、毆りつけて追つぱらつた。すると會社は、舟で、隣村の波止場からこつちの棧橋へ「安全」にのせてきて、晩には、又、舟で送りかへしだしたのだ。波止場には、暴力團が石のやうにねぢ坐つてゐた。急に釀造工に早變りした百姓や、漁夫も舟に乘つてきた。それらは、農閑期に臨時に傭はれると、素人だといふんで一人前以下、「〇・七」か、「〇・六」しか賃銀が貰へなかつた。それが今は、一人前以上、二割から三割五分の割增しを貰つてゐる。

さきの船が棧橋に横づけになると、百姓どもは蟻のやうに、歩み板を傳つて這ひおりた。女工も、事務員も、夜番もその他あるだけの職工を船にのせて、一人でも多く勞働者がゐるやうに、示威的に見せつけてゐた。それは、分りきつてゐた。

「何だい、あんだけ居つたつて、正味働く人間は、八十人有れやせん。」

こつちでは、冷笑した。一人々々働ける身體の恰好をしてゐる者を遠目に數えると、六十五人しかない。

「なあに、八十人も居るもんか、――たつたあれつぽちで、諸味をまぜるんが、せい、いつぱいだよ。」

「うむ、うむ、さうだ。」

が、こつちが過勞に弱つて來るに從つて、勞働者の數はふえて來だした。八十人が百人になり、百人が百二十人になつた。二三日前から二艘の發動機船がまわされだした。

百姓は、彼等が撒いたビラにも、戸別訪問にもテンデ應じもしなければ、耳も貸さなかつた。ビラはいきなり尻ふきになつた。朝から晩まで休むひまなしに働いて、而も、地子と肥料代を稼ぐのがやつとで、直接金を握つたためしがない百姓は、一日稼いで二圓あまり貰へる醬油屋仕事が有難くて仕樣がないのだ。

「畫出て來る幽靈といふやつはないもんかな。」

蚤に喰はれた手や脚や、背などを、なほごし〳〵掻きつゞけてゐる沖が云つた。

「どうだか？」

「こんな具合ぢや、幽靈にでも出て來て貰はにや、勝味はないや。」

「誰だ、誰だ？」東京から應援に來てゐる町田がひよいと頸を擡げた。「そんな神祕主義者みたいなことを云つてるんは誰れだい！」

沖は、剽輕に頸をすくめた。

「なんだ、きいてたんか。ぢや、云ふぢやなかつたよ。」

そして、半田を見て笑つた。

第十一工場は、會社が組合を破壞する目的で、計畫的に大規模に建築したのだ。ほかの工場が全部火をつけて燒き拂はれても、十一工場だけあれば、會社はビクともしない。さういふ工場だつた。勞働者はすべて、その計畫で「危險思想を持つとらん」校長が保證をつけた健實な百姓の息子ばかりを傭入れた。その十一工場の基礎工事中に、朝鮮人の池雲が生埋めにされてしまつた。いかにも鮮人らしい眉と鼻を持つた若者だつたが、日本語は一寸區別がつかん程うまい男だつた。それが、コンクリートの中に化石のやうにかたまつてゐた。池雲は、樋から流れ下つて來るドロ〳〵のコンクリートに足を辷らして溺れた。溺れながら、むちやくちやに脚を踏んばり、泳ぐやうに兩手で空氣をかいた。が、脚は、ます〳〵深く沼地のやうなコンクリートにずりこんだ。請負師がセメントの割合を胡魔化したコンクリートは、一度足を辷らしこむと、底なしの沼のやうに、どこまでもずる〳〵とずりこまずにはゐなかつた。

二三歩ばた〳〵するうちに、池雲は、腹から乳まではまつてしまつた。助けに行くと、その者も溺

れなけやならなかつた。池雲は、頓狂な朝鮮語で、(突嗟の場合、いくら日本語がうまくても、日本語は出ないものらしかつた。)昔、埴輪以前の殉死に生埋めにされた、從者のやうに、齒くそによごれた口をいつぱいにあけて、わめき散らした。手と脚は、無二無三にあがきもがく。が、全力を打ちこんでゐるのに、身體の位置は殆んど動かなかつた。ます〳〵セメントに自由を奪はれて行くばかりだつた。

そこにゐた者は、思はず、自分の四肢が剛ばつて動かなくなつたやうに感じた。一人が突嗟に、セメントが流れて來る樋を外さうとした。

「こらッ！　一升のセメントだつて只ぢやねえんだぞ！」池雲と痴情沙汰を持つてゐる現場監督が光つた眼を投げつけた。

上へ〳〵突きあげやうとあせつてゐる頭が、あせれば、あせる程、底の方へずりこんでたうとう×××なつてしまつた。それは、ホンの一分三十秒ばかりの出來事だつた。そこに立つてゐた者は、池雲がなほ、コンクリートの中で必死にもがいてゐると感じた。

その上に、第十一工場は建つてゐた。

丑の刻が來ると、池雲のわめきが、毎晩、コンクリートにこだまして無氣味なひゞきを傳へて來る。

それで、十一工場の寄宿舍には、誰れも泊り手がなかつた。泊つた者は、亡靈に襲はれて、四肢がかたく剛ばつてしまふといふのだ。一年あまり經つたあとから坊主や巫女を呼んできて、御祈禱をした。が、亡靈は、御祈禱なんかで承知しなかつた。晩になると勞働者を工場から追つぱらつた。沖は、その亡靈が、晝間も出てきて、裏切者どもを、十一工場から追つぱらつて呉れるこたないもんか、と、考へてゐた。

それは、有り得ることぢやなかつた。爭議の助太刀に亡靈など出て來る幕ぢやない。町田は、俺等の力で勝たにやならんと考へてゐた。それ以外、協調會へ調停を頼んだり、亡靈の力でけりがついたりするのは、唾棄すべきことだ。しかし、沖や半田らは、どつちにしても、醬油屋で働かなけや食つて行く道がないつぶしのきかん勞働者だつた。彼等は、どんなきつかけからでもいゝ、早く解決がつくことを切望してゐた。折角こしらへた組合がぶッつぶされるよりは、その方がよつぽどいゝ。が、やりこめられるのを恐れて、それを口に出さなかつた。

二

村の平かな部分には、隅から隅まで、すゞ黑い屋根の醬油倉が、黑箱を並べたやうに、並んでゐた。

幾本も、幾本もの煙突は、棒杭のやうだつた。そこからは煙が上らなかつた。一ヶ月も一ヶ月半もまぜない諸味がぶつ〳〵湧く。その工場と工場の間に、「五平」の家が挾まれてゐた。握り飯はそこで炊いた。

竈が足りなかつた。茅葺きの家の前に、土の火床を作り、二ツの釜を並べて露天で飯を炊いた。雨が降りだすと、栗の立木から立木に二本の竿を渡し、その上に、はづした戸板をのせて屋根の代りにした。一日々々、十三俵の米俵がからッぽになつてしまつた。それでも、みんなに、握り飯が二ツづゝしか行き渡らなかつた。

腹がへつてたまらない連中は、番にあたつた者が、分配された握り飯を箱にかついで運んで來るのを待たずに、炊事場へ出かけて行つた。そこで、「おこげ」や、「湯のこ」を貰つて腹を滿した。頰冠りをした老人も、若い者も、傳令の少年も、のどをぐッ〳〵とならしながら湯のこをのんだ。彼等には握り飯が一ッでもよけいに食へることが幸福だつた。それで得をしたやうな快い氣持になつた。握り飯を盗まれた炊事係は、あとから、數を數へ直してまご〳〵した。

半田も腹がへると炊事場へやつて來た。町田は、彼について來た。ひもじげな、がつ〳〵の子供をつれて、女房や、娘が手傳ひに來てゐた。一人が茶碗で飯の量をはかつて、握る者の手に渡すと、それに鹽をつけてかたく握りしめる。ベチヤクチヤ喋るたびに唇からとび出す唾液は、飯粒と一緒にかたく握りしめられた。頰に涙をなすりつけた子供が、傍から指をくわへて、ほしげに立つて見てゐる。——町田は、そんな光景を珍らしがつた。

五平は、薪に、板切れや、落葉を拾つて來た。倒れた工場の柵を盗んで來て鉈でこつぱに叩き割つた。「植松」のものなんぞ、なんでも取れるだけ取つて來て使つてやれ、五平はそんな氣だつた。町田はさういふことにも同感した。

「あの立つてるやつも引き倒して薪にしたれい！」町田は云つた。「かまふもんか。」

實がはぢけたあとの栗の毬が竈の下でちら〳〵燃えてゐた。

町田は、醬油屋男の不潔と、汚れた醬油くさい中で生きて行く無感覺さに興味を持つた。忍耐强さ、物をチビリ〳〵出來るだけ細く長く使つて行く習癖、それも面白かつた。彼は、そんなこた知らなかつた。知らないことが面白かつた。彼は、無意識のうちに、さういふ空氣の中へ這入つて行かうと努力してゐた。よごれたボロ〳〵の服で、不潔や粗食に平然として、勞働者と一緒にやつて行くことが、なんとなく、輝かしく、愉快だつた。

子供時代から、醬油漬になつて育つてきた五平は、町田に、親しみにくげな、かたい顏をしてゐた。

「あの、Ⓑの手拭をかむつてる娘はどこの子だね？」

「なにだ？」

五平は、薪割りをやめて腰を伸し、娘を一瞥した。それは、握り飯を握つてゐる娘の一人だつた。

と、彼は、不服げに、むッつり默りこんでしまつた。

町田は、上り框のさきにつき立つて握り飯を食つてゐる半田のところへやつて來た。娘がすぐにそこに坐つてゐるので半田の耳もとへ口を持つて來て、小聲にきいた。

「どこの子だね。――なか〳〵美人ぢやないか。」

「あれが、そら、樽屋の仁右衞門の娘だよ。」

「美人だね。」

娘には、彼女の噂をしたことが分つたらしかつた。わざとこちらを見ない顏つきでそれが分つた。

半田は無遠慮に視線を流しかけてゐる町田の肘を突ッついた。

それは、さう美しい娘ではなかつた。鼻が高い、形の整つた娘だが、營養不良だつた。親爺の職業の樽の臭ひが、娘の體臭にまでしみこんでゐるやうだ。彼女は、自分の家から、「五平」に來てねとまりしてゐた。

罷業が始まると、威勢をあげるために、すべての者が、隊伍を組んで異常な亢奮にかられながら工場を引きあげて來た。煙を吐かない靜まりかへつた煙突を見ると、彼等は、自分の力を感じた。俺達が働かなけや、煙一ッ出すことも、樽一挺動かすことも出來やしないんだ。それを彼等は、自分の眼のさきに見た。體內で熱い血潮が踊るやうな氣がした。しかし家では、女房が親爺に裏切りをすゝめた。女は、自分に來る飢餓の心配をした。子供が飯がなくつて、空腹からぐずり出す、その心配をした。そればかりぢやない。白粉と、紅を買ふ小遣錢がなくなることを心配した。

新聞には、ほかの爭議にもよくあるやうに、女房を離緣してまで戰ふ、といふ、悲壯な記事がのせられた。しかし、彼等は、裏切をすゝめられても、女房や子供を振り捨てる譯にや行かなかつた。十五六歲から、女房がほしいと思ひつめて、而も、女房を養ふだけの賃銀が取れんのと、輕蔑され勝ちな醬油屋男の地位のため、幾年も幾年も、晩にねると、想像をたくましくするばかりで、貰ふことが出來なかつた。十年も、十五年も苦勞をして、僅かづゝ金をため、やつと貰へた女房だ。子供だつて、爭議團員が放り捨てた子供を、誰れが拾つて養つて呉れるか！　どつちへ行つてもいゝことはなかつた。が、仁右衞門には、女房だけぢやなかつた。彼には海へも山へも持つて行つて捨てる、捨て場がない爺さんと、婆さんがついてゐた。それがストライキに反對した。婆さんは、きん〳〵身に突きさ

ゝる聲で、爭議を始めた幹部を糞の粕に罵つた。産んで育てた親を干し殺すんかと、がなりちらした。仁右衞門はおろ〳〵した。その婆さんをやりこめて、一言のぐうの音も出さなくさしたのが娘だつた。

「なか〳〵えらい奴だね。」

あとで、そのことを知ると、町田は感心した。「あんなにおとなしげな顏をしとつて、勇敢な奴だね。」

「演說だつて出來るんだぞ。——一寸うまいんだ。」

「さうか、さうだらう。——僕はさうかしら一寸見て、ほれこんでしまつたよ。」

「どこが、そんなに美人だい？」

「どこがつて！——どこもかも美人ぢやないか。俺や、あんな勞働者の娘が好きなんだ。」

半田は、爭議が、——たいていの爭議が男女の戀の取持ちをすることを知つてゐた。だが、娘は、既に山口といふ男を好いてゐる。彼はそれを知つてゐた。だがそれは、町田には內所にしといた。戀は、またどんないたづらをやらかすかもしれないものだ。

三

晩になると、發動機船は、五目飯や、饂飩の御馳走で氣嫌を取つた百姓を、隣村の波止場まで送り

屆けて、棧橋へ引きかへしてきた。そこで、錨をおろして夢をむさぼつた。

委員の氷室は、本部の薄暗い電燈の下で、攻擊の打合せをした。百姓を追つぱらふには、池雲の亡靈を頼みにするよりも、乘せて來る船を叩き沈めてしまふ方が最も手取り早い、確實な方法だ。溫健主義を自慢にしてゐる氷室も、これぢや駄目だと氣づいたらしかつた。

勇氣のある者は、自分から申出ることになつた。

大して危險のある仕事ぢやなかつた。それだけに、誰も彼も手を擧げた。

星が、キラ〳〵瞬いてゐる、暗いまゝに澄みきつた晩だつた。村の背後の圍栗山から洗れおりて來る風に、秋の聲が囁いてゐた。半田は着物が潮にぬれてもいゝ準備をした。鑿も、槌もねぢまわしも揃つた。

「よしか。」

「うむ、いゞ、いゝ。」

櫂を握つて、傳馬を岸から突きはなさうとしてゐると、町田が一緒に行くために、石ごらの波止場につまづき乍ら、走つて來た。

「君は、艪もよう押さんぢやないか。」もと船に乘つてゐた山口がぶつきら棒に突つぱなした。

「艪ぐらゐ押せるよ。押せるよ。」

「あんまり數が多いと邪魔ンなるばつかしだ。——傳馬がひつくりかへる。」

町田は、それを聞かずに、傳馬をドキンと搖がして、艫からとびこんだ。

「こらッ！　ちき生！」

小波が、舷側で、パチヤ〳〵囁く以外、魚がはねる音一ッしなかつた。灯を消してしまつた發動機船が、鯨のやうに棧橋の沖に横たはつてゐる。それが、闇をすかしてボンヤリ見えた。

艪べそが乾いて、艪がギイ〳〵鳴つた。が、潮をかけると、靜かになつた。傳馬は、船に近づいて行つた。

町田は、興奮のために、わく〳〵した。彼は本當を云ふと、艪が押せなかつた。こんな小さい傳馬に乘つたのは生れて始めてだ。舟が搖れるたびに、足をさらはれさうになりながら、彼は素人らしいそ振りを見せまいと努力した。

「ひよつと、暴力團が出て來たら、俺や柔道の手で、海ン中へ投げこんでやるよ。二人だつて、三人だつて……」

「大けな聲を出しちやいかん！」

山口が叱りつけた。

陸からトラックの爆音が、冷たい空氣を破つてひゞいてきた。村の灯は、一ッも殘らずすつかり消されて、沖からはまつ暗だつた。暗闇の中を、トラックは、ピケットに立つてゐる爭議團員をさらひにやつて來る。

「また、誰かゞ引つぱつて行かれるぞ。」半田は艪を押しながら呟いた。「無理やりに工場に監禁するんだ。」

五六人も一緒にゐると、トラックは、知らん顏をして素通りしてしまふ。が、一人ッきりであるのを見つけると、急にストップして、箱の上から暴漢がひらりと飛びおりて來る。そして、無二無三に、左右の手頸を掴んで、車の上に引きずり上げる。箱の板金で、向うずねが、すりむけたつて、血が流れたつてかまやしなかつた。來なければ×を貰ふ、といふ見幕だ。

陸の家並の向うで、悲鳴がした。「やられたッ！」と叫んだやうな氣がした。

「又、やつて居るぞ。」

「これだから、守勢一方で、おとなしくしとれや、しとるだけ、こつちがしめられるばつかしだ。」

彼等は傳馬に搖れながら囁いた。町田は、冷たさと興奮から、肩と腕がぶる〳〵顫へて努力しても

止めることが出來なかつた。

「ひかえ！　ひかえ！」

舳に立つてゐる一人が、力を入れて低く囁いた。

發動機船の横ッ腹に傳馬がドシンとぶつかりさうになつたのだ。半田は、艪を引く方に力を入れた。傳馬は、發動機船とすれ〳〵に左へ廻つて、荷揚口の下へ横づけになつた。

舟方は眠入つてゐるらしかつた。高い工場に遮られて、そこへは風も流れ落ちて來なかつた。山口は、せい伸びをして、手すりの鐵の棒を摑むと、機械體操のやうに、身輕くする〳〵と船に這ひ上つた。そして、甲板から傳馬を振りかへつて、何か合圖をした。町田には何が何だか分らなかつた。―彼は反感のやうなものを感じた。が、ほかの者は、合點の行つたうなづき方をした。

半田は早速、×と×を取つて發動機船の×××に×を、あけた。〃は、水に沈んでゐる赤ペンキから五寸程ほど下に向つて打ちこまれた。

×で、×の柄頭を叩く音が、七百石くらゐの船全體にコッ〳〵ひゞき渡る。そのたびに町田はびく〳〵した。今にも、舟方と暴力團が起きて來さうな氣がした。半田は、しつかり舷側を摑まえてゐるやうに、ほかの者を叱り乍ら、かまはずに大きく振り上げた×に力をこめた。

雜音が絶えた夜の海の上を、槌の音だけが遠くまでコッ〳〵ひゞいた。それは、海岸から村の中ほどにまで達するやうに感じられた。町田は、暴力團の出現を待ちかまへてゐた。出て來たくらゐにや、俺の力を皆に見せてやるんだ。半田は何回も何回も×をコッ〳〵やつた。まだ×が十分あき切らないうちに、發動機の燒き玉をはづしに乘りこんでゐた山口が突然、甲板をドシンと鳴らしてとび出て來た。

「よし、よし。逃げろ、逃げろ！」

船頭が起きて、鉈を握つて出て來たのだ。山口は、機械室へ這入りしなに、眠入つてゐる艫の樣子を伺つた。ランプが消されてそこはまッ暗だつた。しかし寢息の具合で、船頭が、かなりよく眠入つてゐることが感じられた。山口は、會社が組合員の働いてゐる船に荷物をよこさなくなるまで運送船に乘つてゐた。で、船の中の勝手は手に取るやうに、のみこんでゐた。會社は、組合をぶつ潰す手始めに、船から荷物を取り上げて、組合員を失業さしたのだ。山口は、眞暗の中を手でさぐり〳〵發動機のところへしのびよつた。外でコッ〳〵やつてゐるのが、その機械室にまでひゞいて來る――もつと靜かにやれい！　彼は、ひや〳〵するよりも、外にゐる奴等の無神經さに、いら〳〵した。自分では、なるべく物音を立てんやうにと心がけながら、冷やかに、ねぢまわしに力を入れた。艫の部屋で

寢息がやんで、咳拂ひがした。

彼は、甲板にとび出た。しかし、そこから傳馬へとびこむ譯にや行かなかつた。小さい傳馬には、すきがない程、黑い影がいつぱいになつてゐた。が、まご〳〵してゐる譯にや行かなかつた。彼は、いきなり、甲板から海の中へドブンと飛びこんだ。潮のしぶきが四方に散つた。町田はハッとした。次の瞬間には、山口の頭は、水面に浮び出た。

「逃げろ！　逃げろ！」

半田は、もう少しだ、もう少しだ！　と頑張つた。が、ほかの者があわて〻舷側を突きはなしてしまつた。

工場の蔭をはなれると、山から流れおりて來る冷たい風が感じられた。いつのまにか汗ばんでゐる肌が、ひや〳〵した。彼等の背後には、罵りわめく船頭の聲が、海から工場の家並の方へひゞいてゐた。

山口は、ずぶぬれになつて手を取つて貰つて、傳馬に這ひ上つた。「うまくやつちやつた。うまくやつちやつた！」彼は亢奮して一人で繰りかへしてゐた。

けれども、あくる朝になつて、半田は、いつもの爆音で眠りを破られた。パッパッパパと靜寂を破つて發動機がひゞいて來る。

「や、や、やつばし駄目だ。」彼は、びつくりしてはねおきた。「動いとる。やつばし動いとる！」

「そんなこたない筈だぞ。どうしたつてそんなこたない筈だぞ。」山口は、眼をこすり〳〵不思議がつた。「俺や×××をはづして來たんだ。あいつがなけれや、どうしたつて、機械が動かん筈なんだ。」

半田は、十二分ぢやないにしても、仕事は大丈夫成功したと思つてゐた。それで安心して眠つた。何しろ懸命にやつたことだ。それがうまく行つてゐないとは、失敗を大仰に叫びでもして心の空虛を胡魔化さんけれや、ゐたゝまらない氣がした。あたりまへにしてゐたんでは平氣でゐられなかつた。

霧を通してよく見ると、××の船は、死んだ鯨のやうに、水船になつて、背の一部を水面に浮べながら、ぢつとしてゐた。

動いてゐるのは別の船だ。

船は、一ッ×××ても、又、別の船があつた。それが×××ても、又、もう一ッ別の船があつた。

恐らく「植松」は、船が一ッもなくなれば、また直して百姓をのせて來るだらう。

彼等が執拗な「植松」に叩きつけられるのは、今に始まつたことぢやなかつた。

半田は、頭蓋骨が四角になつて平つたい、だから、水を入れた茶碗を頭のてつぺんにのつけて走つ

たりするのに丁度い〻植松の旦那を子供の時からよく知つてゐた。朝、必ず、誰も起きないさきに、工場の隅々まで見廻つて來る癖があつた。どの工場では繩を粗末にしてゐる。どこの道には大豆が二十粒ほどこぼしてあつた。そんな細かいことを克明に見屆けて來てやかましく云つた。で、皆なから恐がられてゐた。

その頭の大きい旦那のために畠を失ひ、田を失ひ、祖父から受けついだ家も屋敷も失つてしまつた百姓が四人や五人ではきかなかつた。

昔は、村の誰も彼もが、「植松」の歡心を買はうとペコ〳〵してゐた。

半田は、幼年時代に、どれだけ「植松」の坊つちやんのやうになりたいと熱望したかしれない。洋服を着て、町の學校へ行きたい。毎日々々、とびまわつて遊びたい！　と。

が今は、學校へ行けなかつたことを誇りに思つてゐた。

諸味をまぜながら唄ふ、單調で物悲しげな唄、樽屋が輪をしめる木槌のひゞき、嘔吐を催す麴の臭ひ、幼年時代のそれらの記憶が、まだ、半田の腦底にまざ〳〵と殘つてゐる。村の者は、希望のない、卑屈で陰慘な生活をしてゐた。父親は朝、夜があけるとすぐから、晩は暗くなるまで働き通して、なほ一家の者を食はすことが出來なかつた。そこで旦那の眼をぬすんで手早くお櫃から飯をすくひ出して手拭にくるんで持つて歸つた。それを母も姉も祖母も、最後の麥粒の一ッまで、がつ〳〵拾ひ食つた。

醬油倉の敷地になつてゐない空地は、田か畠だつた。醬油屋へ稼ぎに行けない女や老人がそれを耕した。そこは、醬油倉の蔭になつて日あたりが惡く、鹽氣がさし、麥も米も丈が伸びず、葉がよれよれになつて、半作しか取れなかつた。大豆は毒のある煤煙をあびて全然育たなくなつてゐた。

それでも百姓は、祖先から受け繼いだ僅かな土地を失ふまいと洗みかけたボロ船にかぢりつくやうにかぢりついてゐた。

しかし、工場がふえるに從つて、土地は、百姓の執着を無慘に踏みにじつて、その下敷となつた。百姓は、醬油屋と同じやうに金持ちにならうと思つた。そして働いた。ヨボ〳〵の老人や子供も畠のあひを打ちに出た。

「植松」が名前を會社に書き直して、增資すると、ついでに百姓も株を持つことをすゝめられた。彼等は、五株か七株を持つて、自分も醬油屋の仲間入りが出來たやうに喜んだ。拂込みの金を作るのに田や畠を抵當に書きこんで。

彼等は株券を盜まれんやうに、古壜の下にかくしておいた。そして昨日と同じやうに、來る日も來

る日もボロ着物で働き働いた。「植松」は金を貸して置けば、そいつが放つておいても、ひとりでに稼いで呉れる。――百姓は、株に配當がつくのをたのしみに考へつくだけの手段を盡して、何回かの拂込を切りぬけた。

一株五十圓が全額拂込になつた。その次は配當だ。

だが、その次はどうなつたか？――盜まれんやうにかくしてあつた株券は、知らんまに、田や畠と一緒に取り上げられることになつてゐた。

「これやいかん！」彼等はすつからかんにされてしまつた。「あゝ、惜しいことをした！」

それでも彼等は、「植松」に反抗する、すべを知らなかつた。

勞働者團結せよ！　蜂起せよ！　それは、彼等にとつて猫に小判だつた。

だが、今は、×××ことはない。

醬油屋男は、――下つぱの奴ほど、ツン〳〵して「植松」に頭を下げなかつた。彼等は取られたものを奪ひかへすことを考へてゐた。半田は飯を懷に取つて歸らなけやならなかつた父親のためだけにでも、叩きつけられてぢつと忍んでゐる譯にや行かない氣がした。

四

十月、十三日、こんなビラが、電柱や、壁や、圍ひ板に、ベタ〳〵貼りさがされた。

「諸君！　諸君が、爭議團幹部に提出したる誓約書、――若し裏切りたる場合は、罰金として金五百圓也辨償可仕候也――なる一札は、法律的に全然無效です。諸君は絶對に自由です。五百圓の罰金を取るなどゝいふことは、問題になりません。萬が一にも、そんなことを云ひ出せば、會社で引受けて裁判手續をしてあげます。諸君は絶對に自由です。諸君は、諸君の自由意志によつて行動せらるべし！」

誓約書の內容が會社に知れる筈がなかつた。それが知れてゐる。スパイが這入つてゐやしないか、問題になり出した。

誰がスパイか？

ほゞ、目星はついた。しかし、斷定するのは危險だつた。

山口は、組合が出來た當初から、伯父や從兄と喧嘩ばかりやつて來た。

「植松」から、副支配人とか杜氏とか、そんな地位を與へられたのに名譽を感じて、從兄も伯父も「植

松」の方についてゐた。山口は、親戚ぢゆうから、よつてかゝつてボロクソにこきおろされた。

「畜生！　なんと云はれたつてやめるもんか！」

彼は、泣き出したい孤獨や、よるべなさと戰ひながら、「植松」への牙をといできた。

「なんと云はれたつてやめるもんか！」

親戚は、彼には、鬼齒のやうなものだつた。邪魔になつて、邪魔になつて、仕樣がない。が、引きぬくのはなか〳〵痛かつた。

母親はとつくに死んでなかつた。白髪を染めて殘つてゐる親爺は、親戚から云ひ含められても、すぐそれで息子にあたる性質ぢやなかつた。が、「主義者」の息子が哭れるものは、銅貨一枚さえ受取らなかつた。それで、息子の主義に絶對反對を表明した。年、一割二分五厘の配當がつく二十株の株券は、息子よりも大事がつてしまつてあつた。

親爺は、山口が組合へ行くのをごつ〳〵云つた。

「不用ごろめが、一寸なんぞしたら、すぐ船を休みくさつて！」彼は、棒切れを投げつけるやうに叱つた。

「俺らが死んだつて、この株券は、われにや、やれやせん。村へ寄附するか、得二郎にやるかするんぢや。」

「そんなもんはいらん。」

「阿呆めが！　馬鹿野郎！」親爺は呶なりちらした。「阿呆めが！　そんなことをぬかせ！　そんなことを云ふ精神がいかん！」

しかし、死んだあとで見ると、株券は息子にやるやうに、ちやんと名前を書きかへてあつた。山口は、それを即座に賣ッ拂つた。これは、二ヶ月ばかり前のことだ。

從兄の得二郎は、第八工場の杜氏だつた。罷工が始まつて工場の職工がゐなくなると、本社の工場課へ詰め切つてゐた。山口は、必要な時にだけ從兄を利用した。ところが、從兄も必要な時にだけ山口を利用した。それ以外には、道で出會しても會釋一ッしなかつた。

山口は、誰がスパイか、それをさぐるつもりで得二郎に會つてみた。

「喧嘩を賣つたんはお前等ぢやないか。」

得二郎は、始終、會社が受身でやむを得ずやつたと云ひ廻すのに努力した。山口は、すぐ、「植松」からの命令によるのだと見てとつた。「……だが、一度買つて出た限り、トコトンまでやるんが男だ。——勝つか、負けるか、死ぬか、生きるか。」

得二郎は、組合を叩きつぶさずにおかん「植松」の意氣込を暗示した。まるで、泥棒のくせに、威たけ高になつてゐる調子だ。

「やるがえゝ、なんぼでもやるがえゝ。しかし、今もこの機會をのがしやせんだらうからな。」山口は笑つて見せた。

今は㊤に對する競爭會社だ。それがストライキを機會に市場から㊤を驅逐しようとするのは、誰でも想像し得ることだつた。

彼は、得二郎と喧嘩をしたり、口ぎたなく嘲り合つたりするのが癖になつてゐた。相手によつて、そいつの顏を見ると喧嘩を吹きかけずにゐられない、むづ〳〵するものを感じる奴があるもんだが、彼と、得二郎は、お互にそれだつた。

「お主等は、最初、十三ヶ條の要求條項を出しとつて、そいつを二た月もせんうちに、七ヶ條に割引しようと云ふとるさうぢやないか。もう二た月もすれや、又、五ッ六ッ割引する氣かい。」

山口は、ぎくッとした。が、問題にしなかつた。

「ヶ條をへらすつて、誰が……」と、彼は云ひかけた。

が、得二郎は遮つた。從兄は、我がまゝな、相手を呆けの皮にした調子を聲にひゞかした。

「それや分つとる。ヶ條はへらしても、重要な要求は讓歩せん——それや分つとる。(再び山口はギクッとした。云ひ方までが、いつか幹事會で打合はしたこと、そのまゝだからだ。)だが、お主等は、爭議をおつぱじめて、却つて、取れるものさへ取らずにしまつたんだぞ。つひ、四年前までは、一年に六十圓しか貰へなんだが、今は、一と月に四十圓も取れるやうになつとるぢやないか、それを……」

「誰から讓歩するなんてきいたい？」

得二郎は、さう驚くなよ、こんなこたもうとつくに知りぬいとるんだ、といふ態度を見せた。

「ほんまに、誰から讓歩するなんてきいたい？」

得二郎は得意げに笑つた。

氷室が新地の藝妓に通つてゐることや、半田の憤慨癖や、學生上りの物好きな町田、別品の妻君の氣嫌を損じないやうにびく〳〵してゐる家原、眞劍に物事を考へてゐる五平の意見がいつも容れられない幹事會、——得二郎は、こんな爭議團內部のいきさつをべら〳〵喋り出した。

「お前のことだつて、お前よれや、俺の方がよう知つとるんだぞ。」彼は、にや〳〵笑つて、山口をいら〳〵ささうとした。

「お前がなんぼえらさうに云ふたつて、お前の方は、こつちの從業員を切崩すどころか、あつちや、

こつちやにダラけ切つて崩れかけとるんだ。」そこで得二郎は急に態度をかへて、「さうだらう？」と、輕蔑するやうにペコッと頸をすくめた。

山口は、誰がスパイだかさぐるのはどうでもいゝ、意地にでも得二郎の言葉を一ッ〳〵やりこめたくなつた。組合の悪口に對して、義務としてゞも、反駁する必要があつた。が得二郎は遮つた。山口は、のどもとまで言葉がこみ上げて來た。得二郎は從弟が、ものを云ひたげな身振をするのを見ると、すぐうは手に出て押さへつけた。

「裏切つた奴等がなんだい。あいつらは、石についとつた砂が風でころげ落ちたやうなもんぢやないか。」山口は、それを云はうと用意した。

が、それさえ、何故か、肉體的疲勞が加はつて元氣に云ふことが出來なかつた。それにつけても、彼は、ものを云ふのは口さきぢやない。背後に控えてゐる實力だと、そんなことを考へた。彼は、このまゝ、ぢつとしとれば、爭議團はしめられてしまふ氣がした。×××もなんでもいゝ、×××なけや駄目だと思つた。

彼は、話を半ばにして外へ出た。不愉快で仕樣がなかつた。「きつとあいつがスパイだ。」彼は心でそのスパイに目星をつけた。それは有能視されてゐる幹部の一人だつた。「きつとあいつだ。でなければ、こつちの內幕をあゝなにもかも得二郎が知つとる筈がない！」

眩きながら、彼は、諸味をまぜる櫂の音がコボン〳〵とひゞいて來る諸味倉の間を本部の方へ歩いた。

五

樽詰部の前に、洗はれた樽の群の絹壁が聳えてゐた。「かゞみ」を叩く込み槌が引つきりなしに濁音を立てゝ響く。大桶の呑口からは生揚の醬油がすさまじい勢ひで迸る。木栓を打たれた㊤印の九升樽は一列に蓆の上をころがつて行つた。第十一工場の職工達はその中で作業をつゞけた。そして夜業に這入つた。

火入れ釜は、朝ッからの酷使に堪え切れなくつて、呻り出してゐた。

杜氏は、やう〳〵しつかり締ることになりだした百姓の「樽からげ」競爭を、能率增進に利用した。からげ繩は、むやみにたぐられて、一挺の樽を中心に、電燈のかげで、蛇のやうにうね〳〵とうねりを打つた。

遠くでタンクの諸味が壓搾空氣にガバ〳〵涌きかへる。トロッコは、レッテルを張つた樽を滿載して

棧橋へ、洞窟のやうなコンクリートに車輪をこだましつゝ全速力を出した。

池雲の亡靈は引つこんでしまつた。會社は今に對抗するため、逆立ちしても注文に應じ切る必要があつた。秋は、醬油の書き入れ時だ。夜業に特別割增しをつけた。寄宿舍に泊ることになる者には賞金を出した。

ほかの工場では、男衆は、工場の男部屋に雜居させられてゐた。五十疊の男部屋には百五十人が雜居した。疊一枚に三人の割だ。布團は綿が切れ、脂肪でぬる〳〵してゐた。枕は木枕だ。飯もお菜もまるで豚のやうだつた。安價に飼つておかれた。「植松」はそれを當然と思つてゐた。けれどもそれが、×××には、もつけの幸だつた。一ツの部屋に大勢がかたまつてゐるおかげて、彼等は本能的に團結することを覺えてしまつた。一つの思想も、一つの感情も、見るまに、××に燃え擴がつて行つた。それで、「豚ども」が手におへなくなつてしまつたのだ。

「植松」はそのことを考へた。そこで、新しい第十一工場には、男衆を雜居させないことにした。校長の保證つきばかりを傭入れた。そして、すべてを、バラ〳〵に通勤さした。

しかし、船が襲撃されだすと、男衆を村へかへすのが危險になつて來た。勞働者を團結させない、うまい方法だつた通勤制度が、今は、却つて、男衆を引こぬかれる心配になつてきた。そこで寄宿舍に泊ることになる者には賞金を出した。池雲の話は、喋べることさえ、絕對禁止にした。

搾り槽から、諸味にふくらんだ袋が、かさだかくはみ出てゐた。仕上部の大桶は、整列した軍艦のやうだ。巡査上りの警戒係は樫の棒を杖にしてのそ〳〵大桶のうしろを影のやうに通りすぎた。

「明日か、あさつてが、どうもあぶない。奴等は亂暴をやり出しさうですぞ。」彼は、杜氏の肩を引つぱつて囁いた。「皆に氣をつけさしといて下さい。」

「奴等になにが出來るもんですか。」

「もしもの場合に電話線が切斷されやせんですかなあ。」

裏切者は、支配人の云ふがまゝに、一日十六時間の勞働をした。――「今、稼ぎためとかにや、爭議がすんだら十六時間も稼がれやせんのだ。」（！）袋をなでる指の先は、皮膚が磨滅して血がにじみ出た。立ちづめの脚は棒になつた。晝間はまださうでもない。が、薄暗い電燈がちらつきだしてから終業までが、晝間以上に長い。彼等は十時半の鐘を待ち焦れた。寄宿舍の他人の垢でつめたい布團の中で取る睡眠は、とても、筋肉の疲勞を恢復するどころぢやなかつた。「袋はぎ」が立つたまゝ居眠りをした。桃桶を使つてゐる少年は、眼がかすんで、諸味を移す袋の的を外した。そこら中が諸味の泥濘となつた。

若し彼等が、こんな過激な勞働をしなかつたら！――規定の八時間だけしか働かなかつたら！――その足らずは誰が働くか？　うめいてゐる爭議團だ。爭議團が×つのだ。會社は×れて出なけやならなくなるのだ。

彼等は自分一人の利益を守つて爭議團に尻を向けた。今は、自己の安定と利益を守りつゞけるために、どこまでも支配人の云ふがまゝに十六時間でも十七時間でも働きつゞけなけやならなくなつた。一歩、讓歩し始めると、勞働者は鼻の先に重い石を吊るされた牛のやうに、動けなくなるもんだ。」

よつちゆう頭を下げなけやならない。

事務所から十時の時計がひゞいて來た。最後のひゞきがぢいんと皷膜に殘つた。その時、閉された北側の門にあたつてすさまじい××が起つた。彼等は、ハッとして棒立ちになつた。

つゞいて、遠い闇の中に火花が散つた。第二、第三の××と、積重ねた古樽が崩れ落る音響が連續した。

「爭議團だ！」

誰かゞ遠くで叫びながら逃げて來た。

醬油袋や、叭や、桶が飛んだ。彼等は仕事を放り出して、反對側の室屋からの出口へ押しよせた。

命がけの爭議團は、裏切つた彼等への怨恨晴しにやつて來たのだ。と、咄嗟に考へた。樽詰部からも、搾り場からも、諸味倉からも、職工が諸味だらけの顏をして南口へ殺倒した。㊤印の樽の絶壁は崩壞した。無數の空樽は、うごめく彼等の頭上をはねまわつた。

「騷ぐな、騷ぐな！」

彼等の群は、室屋からの出口へ突きあたつた。ところがそこは、警戒係に遮斷されてゐた。人間の奔流は、そこで堰止められて、左右へ雪崩れだした。扉の外には、××を摑んだ、腕ッ節の强げな男が控えてゐた。

いつのまに用意したのか、××××の警戒係は、蓆の下から、棍棒や、××や、××を引き出して來た。皆に一つ宛持たすためだ。

職工達は、それを見ると、拔身で躍りかゝられる冷たさを感じた。

山口は、高い墻壁を乘り越して、裏切者に撒いてやるビラを持ちこんだ。

彼は、細梯子に石をつけて墻壁に打ちかけた。それをよぢ登つた。電流の來てゐる針金が張られてゐやしないか、墻壁の上にしやがんで彼はたしかめた。

眼の下に、それ〴〵、繩梯子を懸命に放り上げる、ほかの者の姿が、闇の中にうごめいた。幹事會できめた以外の者までが來てゐる。石は、そこでも、こゝでも、コンクリートの墻壁にはねかへされて、鋭い音を立て、うしろへとびかへつた。落ちた石を又下から放り上げる。山口は、これぢやすぐ發覺すると思つた。が、もつとこつそりやれ、と聲を出す譯には行かなかつた。聲を出せば、なほ、より早く發覺するだらう。

はげしい興奮が、下に動く彼等の動作に現れてゐた。彼等は、のるか、そるかの覺悟をしてやつて來た。おとなしくしてゐれば植松からメられるばかりだ。「植松」には多くの味方が、狼の一族のやうに、一匹が吠ると、皆がごら〳〵押しよせて來る。網の目をめぐらしてゐる。山口は、それを、たび〳〵の經驗で知つてゐた。彼等の味方は、たゞ彼等だけだ。しかし彼等は、屠殺場の豚のやうに、唸いて、脚で宙を蹴るだけでメられたくなかつた。狼の頭を一ツでもどやしつけてやりたかつた。

山口は、墻壁に手をついて、そこから内側へ、なるべく身輕くと心がけながら、飛びおりた。

それでも、土の上に着くと、全身の體重が、頭の芯にずきんと來た。彼のあとから、すぐ横へ老人がころげ落ちた。老人は石炭粕を敷いた墻壁の下で蟬の抜け殻のやうに丸くなつた。山口は、自分も飛びおりた瞬間、丸くなつたやうな氣が一寸した。

「大丈夫かい？」

彼は、老人の方へ手をやつた。

老人は、唾を呑みこんで、丸くなつた脊を伸ばした。それは仁右衞門だつた。

「お互に今夜限りかも知れんて。」捨てるに捨て場がない爺さんと婆さんを持つてゐる仁右衞門は囁いて立上つた。「氣をつけてやらんことにゃ。」

山口は、あの娘の親爺までが、覺悟をきめてゐるのを感じて筋肉が引きしまる氣がした。昔の、懷へ飯をぬすんで來なければ、老いた親や幼い子供達に食はすことが出來ない陰慘な時代へ押しかへされるか。そいつを突き破るか。

彼は、今夜こそ、どうしたつて、うまくやらなけやならんと思つた。そのためなら、彼自身は×んだつていゝ。

裏切者は、波が一度引くと、暫らく勢ひづく用意をして、それから再びはげしくもれ上つて來る、その波のやうに押しかへして來た。こちらからも、負けない數の人間が、向うの群集の正面に狂亂しつゝなだれかゝつた。町田が先頭に立つてこぶ〳〵の×を×りまわした。波と波は、樽詰部の前の空地でぶつかり合つた。山口も仁右衞門も群衆と群衆に押しつぶされさうになりながら、渦卷く勢ひに、

足が宙に浮き上つてしまつた。六尺や、桶や、棍棒が×つた。崩れ殘つてゐる樽の絶壁は、亂舞する人の頭上に顚覆した。惡罵と、悲鳴と咆哮の中に、群衆は、手と云はず、顏と云はず、胸と云はず、どこもかもを引つ掻き合つた。格闘する頭から頭に、空樽が高い音を立てゝとびまわつた。山口はビラを撒くどころぢやなかつた。

ビラを撒いたところで、群衆にそれを拾つて讀む餘裕はない。彼は、皆をとめやうとした。が、とめるどころぢやなかつた。彼のびんたは、頭がねぢれる程、したゝかに何者かにガンとやられた。懷と脇の下にかさばつてゐる四角のビラは邪魔になつた。彼はそれを何度かに鷲掴みにして、うごめく群集の頭をめがけて投げつけた。バシ〳〵のザラ紙は、群衆の頭上でパッと散亂してひら〳〵とびまわつた。

ふと、彼は、咄嗟に左へ押しころばされさうになつた。「糞ッ！」踏み堪えて押した方に視線をやつた。と、×××を振りかざしてやつて來る壯漢が暗い電燈のかげに見えた。人々はうしろへ身を引いた。道があいた。町田がふいに横からとび出て、その壯漢にとびついた。

「あぶないッ！」

山口はうしろから叫んだ。が、町田の耳には何も這入らなかつた。彼は、壯漢にからみつくと、團子になつて、人の肩と肩との間に、横倒しに倒れた。群衆は、その二人をめがけて、むさんこに四方から押しよせた。樽や、桶や、礫が兩方から風を切つて集中した。湯氣が立つてゐる頭の上で、ぶつかり合つた桶が、かゞみのある樽に負けて、ばら〳〵にくづれた。

山口は、汗と諸味の臭で犇めく渦に押されて、樽詰部の中へ押しつけられた。彼等は、裏切者どもに壓迫された。大桶と大桶の狹間で人間と人間がもみ合つた。天井からぶら下つてゐる電球は、笠と共に、長い竹の棒で叩き割られた。

そこは、まッ暗になつた。

そのとき、山口は、匂ひ高い生揚がプンと鼻に來たと思ふと、同時に、何か、はげしく横なでに來るものに突きとばされた。

「呑口がとんだぞ！」

彼は、ひよいと氣づいた。――大桶の下腹部からポンプのやうに迸る醬油にねらはれてづぶぬれになつてゐるのだ。濃厚な醬油が全身からしたゝつた。足もとは、見る〳〵醬油の海が溢れた。

鹽分が這入つて眼がはしりだした。思はず手の甲で拭くと、そこにも醬油がついてゐたと見えて、なほ、ひどくぴり〳〵した。暫らくばし〳〵やつてゐる眼に、向うの搾り場の五十燭光を遮つて、半

田や氷室の應援隊が、やつて來るのが映つた。

町田は、自分の前が、輝かしい活氣に滿ちてゐる氣がしだした。彼は、自分が何をしてゐるか、殆んどそれを感じなかつた。たゞ、卑怯らしく皆からおくれないやうに！　それだけが頭に閃めいた。

割つた竹が足にひつかゝつて、上半身だけ前にのめりさうになる樽工場から、細長い漆喰の廊下を ぬけて、彼は室屋の前へ來た。裾が、汗と醬油でべと〳〵脚に吸ひついた。彼は尻をからげた。廊下に、蜘蛛の巣がついた薄暗い十燭の電燈が屋根裏からぶらさがつてゐた。その下で、誰れかゞ彼に、はねとばされた。それは「來て呉れッ！」と叫んだ。彼は、すぐそこを馳せぬけた。

室屋の前には、一群の暴漢が何か身がまへてゐた。

恐ろしい叫びと銃聲がひゞいて來る。仲間は、漆喰の廊下と、樽詰部の前の廣場からひた押しに押してゐた。××は室屋からひゞく××だ。

町田は、右手の闇の中に、二ツに折つた蓆を楯にして、少し腰をかゞめて何か叫んでゐる半田の蒼白い顏を見つけた。

「氣をつけろ！　あぶない、あぶない！」彼が追ひつくと半田はかう叫んだ。

「何だ。こんな時におぢ〳〵して居れるかい！」

町田は思つた。そしてわざと身を反らして室屋の方へ突き進んだ。××が連續した。それがどつかの樽にあたつて、ぱす〳〵くれを打拔く氣配がした。半田は、ほかの者と一緒に町田のあとにつゞいた。室屋の前の人のかたまりは、濃い闇と煙のかげで動搖した。町田は、奪ひ取つた六尺を素早く振り立てゝ馳せだした。が、ころがつてゐる四斗樽の手前で、急に石にでもつまづいたものゝやうに全身から力を失つて横にばたりと倒れた。半田は、神經が通つてゐない、丸太が倒れるやうな倒れ方だと思つた。あとにつゞいてゐる者達は、町田がうなるのを聞いたが、その手足が、再びはね起きようと努力しないのを見た。××が××を打ちぬいたのだ。

半田は蹲んで町田を抱き上げた。

「どうした、どうした？」

彼は呼んでみた。返事はなかつた。

「どうした、どうした？　おい！」

彼は、町田の手と脚がびり〳〵×へてゐるのに氣づいた。眼も、頸も力がなかつた。×はだらりと垂れた。

「どうした、どうした？　おい！」

傍を走りすぎる者達の中から生揚くさいぬれ鼠の山口が何か叫んだ。

「やられたんだ！」半田は答へた。

大桶の間から出てきた山口は、町田の顔の方へ蹲みかけた。が、ふと崩れだした暴漢の群が眼に這入ると、せわしげに、そのあとを追ひかけた。しかし、三四歩も行かないうちに、彼も、樽のところで「呀ッ」とひつくりかへつた。

半田は、血でべと〳〵に染まつた手を山口の方へ持つて行つた。彼は、山口も町田も、仁右衛門の娘が好きだつたことを思ひ出した。

「どこもかも美人ぢやないか、俺や、あんな労働者の臭がする娘が好きなんだ！」

ふと、それを思ひ出した。

六

彼等は、命がけだつた。

どんなことをしても××を××して見せる。さういふ意氣込だつた。彼等は、有るだけの力も根も使ひつくした。

しかし、「植松」の方に持つてゐる力は、もつと〳〵彼等よりは強かつた。「ブリキの尻尾」や、蟇のやうな靴にゲートルを卷いた一群がやつて來た。

そして、彼等は、ペシヤンコに××××されてしまつた。

七

二ヶ年が經過した。

煤煙に縺れ合つて、騒然たる樽屋の木槌のひゞきが引つきりなしに空へ立ち上つた。荷揚の掛聲がひゞく。發動機の爆音、トロッコの轟きなどが連續する。

すゞ黑い屋根の醬油倉は、その黑さを一層黑くしてゐた。それは一日でも休めば損のやうに、毎日毎日大豆の蒸せる湯氣を吐く。火を入れる醬油の臭をまき散らす。人家は、山の麓と、段々になつた丘の傾斜地へ追ひやられてゐた。半田は刑務所を出て、村へかへり、そこのバラック建ての一つの住んでゐた。煤煙が、風に吹きつけられてそのバラックへやつて來る。

「植松」の四角の頭は、周圍が二三寸も大きくなつたやうに見えた。もう六十歳を過ぎてゐるだらう。

しかし、元氣は、若い時分と異らなかつた。工場を見廻る癖は、雨が降つても火が降つてもやめられなかつた。

專門の說教坊主が工場に這入つてゐた。毎月一回づゝ浪花節と活動寫眞をやつた。見に來た者には、折詰をやつた。㊤印を染めぬいた手拭を只で呉れてやつた。

塵が積ると富士山のやうになる。同樣に、百萬圓も一錢銅貨を一枚づゝ集めたものである。浪花節語りは、それに節をつけて呻つた。

金の成る木——こんな映畫が白い幕に映つた。おとぎ話のやうに桃か林檎になつた果實が黃金でもあるのかと思ふと、さうぢやなかつた。「辛抱强き(木)」「小言を云はなき(木)」「働きずき(木)」そんな木に金がなるといふのだ。

しかし、工場の仕事はひどく苦しくなつてゐた。男衆は失業しなくつてよかつた。爭議に加はつた者のやうに、麥飯一粒さへなくなつて村を立退かなくてもよかつた。

刑務所に這入らなくつてもよかつた。

しかし、工場では、作業分量がふやされた。一日十六石の諸味取りが二十石に、古樽胴洗ひ千五百本が二千本に。

そして暮しは昔に逆戻りした。女房や子供が石炭の燃し粕の中から、灰と塵埃に鼻の孔を黑くしてコークスを拾つて來なければ、焚きものがなかつた。割增しは、半田や、仁右衞門や、氷室などが警察へ引つぱつて行かれると共に徹廢されてしまつた。暫らくすると「しろと」「くろと」の區別がついた。五ヶ年以上工場で働いた者でなければ「くろと」ぢやないことになつた。すると、「くろと」の部類に這入る者は、全勞働者の四分の一にも足りなかつた。「しろと」の百姓上りや漁夫上りは、昔の、「〇・七」に賃銀を引下げられてしまつた。これや、一杯喰はされた！

始めて彼等は、背骨をどやされて、ゴクッとした。

「阿呆喰つた。すつかり旦那のうまげな口車にだまされとつた！」

彼等は、足を踏んで口惜しがつた。

「こんなに二割も三割も賃を下げるんなら、あの時爭議團に肩を持つて一緒に××××をやつたるんぢやつた！　馬鹿々々しい！」

半田は、物悲しげな淋しい顏で、廢墟でも見るやうに、傾斜地のバラックから、村を見おろしてゐた。彼には口がなかつた。以前、一緒に働いた者達は、殆んど殘つてゐなかつた。音信も絕えた。どこでどうしてゐるか、それさえ分らなかつた。食ふものもなかつた。しかし彼は村を去りたくなかつ

た。どこまでも踏みとゞまつてゐたかつた。

彼の目の下には、巨大な工場が增築されてゐた。十一工場は、それと較べると、古くすゝけて小さくなつたやうだ。

海岸には新しい埋立地があつた。東側の丘は、そのために、半分掘りこがされ脊中から眞二ツにずさりと切取られてゐた。

半身の丘と、新しい赭土の埋立地は、村の感じをすつかり新開地のやうにかへてしまつた。垢に染まつた黄色い着物の女房や子供の群が、そこの捨てられた石炭粕にたかつて、かきさがし、つゝいて何か手籠へ拾ひこんでゐた。コークスをあさつてゐるのだ。それらは石炭粕を捨てる荷車がやつて來ると、直ちに方々から雀のやうに集まつて來た。そして囀つたりわめいたり、コークスを奪ひあつたりした。毎日、それがつゞいた。一時、散つたかと思ふと、又荷車がやつて來る。すると、又、彼等はどつからか雀のやうに集まつて來た。

植松は、「ならず者」どもが刑を云ひ渡された時、雅量を見せるつもりで氣の毒げな顏をした。なるべく輕くしてやりたい、そんなことも云つた。――しかし、「ならず者」が村を去つて行くと胸がすつとした、くつろいだ。それで、再び、自分の意のまゝに何でも出來るやうになつた。一人も文句を言ふ奴はなくなつてしまつたのだ。

あの朝、彼は、工場を見廻つた。男衆が石炭がまだ燃え切らないうちに、竈から掻き出して、わざとコークスばかりを拵へてゐるのを埋立地で發見した。

見る〳〵彼の顏面の筋肉は引き締つて來た。眼が險しくなつた。右の手に握つてゐる櫻の杖で石炭粕をはねかへし、つゝきだした。彼は、男衆どもが自分の眼を胡麻化さうとしてゐると取つた。そして、ひどく、自分の誇りを踏みにじられた。

「おい、誰が、これを拾ふてもえいと云ふた？」

太い、はゞのある聲で、彼は、そこでごそ〳〵してゐる女房を呶鳴りつけた。

「皆な、誰でも拾ひよるんで――」一人の女房は、たぢ〳〵した。

「誰が拾ふてもえいと云ふたんだ？」

「かうして皆が拾ひよるからにや、お上から許しがあつたんでがせう。」ほかの女房が云つた。

「うそ云へ！　貴樣ら、親爺とぐるになつてガラばかし拵へとるんだ。さうぢやらう。」

「いゝえ。」

「うそ云へ！　わしをだまさうとしたつて、この眼はだまされやせんぞ。ぐるになつて石炭をごま化

しとるんぢやらう。」

女房達は、一つところにかたまつて評定を始めだした。彼女等には、おびえた表情もなかつた。驚いた表情もなかつた。むしろ、反抗的な毒々しい表情が現れてゐた。籠に拾ひこんだガラを、埋立地へ、腹立たしげに放り出す者もあつた。「わしをだまさうとした、だつて、――へゝ、こつちをだました人は旦那ぢやねえか！」そんな聲が彼女達の中からもれてきた。

それからまもなく騒動が持上つた。

彼等は、焚きものにコークスを拾はないといふのは我慢した。しかし、親爺と女房が共謀してコークスばかしを拵へてゐるといふのに、我慢がならなかつた。まるで彼等を泥棒扱ひにしてゐるとしか取りやうがないぢやないか！

彼等は、旦那から油を搾つてやらねばならんと、いきまきだした。

「また、ストライキをやらうつてんだな。――なんとかならんか。なんとか、うまくならんかな。」些細なことから思ひがけぬ騒動が持上つたのにびつくりした植松は、身内がぞつとして、重いものがのしかゝつて來たやうに腕がぶる〳〵顫へだした。

「なんとかならんか。なんとか、うまくならんかな。――何べん叩きつけたつて、こりることを知らんひつこい奴等だなア！」

彼の戰慄へは、次第に、肩から脚の方にまで擴がつた。

氾濫

一

晩に人々は、寺の廣場へ出かけて行つた。手拭を繼ぎ合して縫つた派手な浴衣を着て、老婆が扇を持つてゐた。娘達が四五人づゝ群がつて、輕く笑ひながら、小さい櫂をかついで、田の中を急いで行つた。手には綠色の手甲をはいてゐた。

「おい、八重ちやん。今夜は俺と踊らうや。——安ッさんは待つても來やせんぞ。」

「いやだよ。」

「何だつて……いやなら、むがむぢに腕力で行くぞ。」

娘達のあとから、鉢卷をした肌ぬぎの若衆が追ひかけるやうにつゞいて來た。

「いやな奴！——十の阿呆。」

娘は、うしろへ振りかへつて、十吉に云ひかへした。一番うしろの小娘は、不意に、一人の青年に

くすぐられて、故意に、仰山な悲鳴をあげた。

「どうしたんだい？」くすぐつた青年は白ッぱくれてゐた。

うしろの方で、誰れかゞ突然、おかしさうに高く笑ひだした。八月の夜は、さわやかに、透明に、落ちついて黑ずんで行つた。遠く山際で稻妻がきらめいた。寺の廣場には赤い提灯が群がり、篝火が燃えてゐた。火の粉がパチ〳〵飛んだ。そこの廣場の一角だけは、空が赤く火事のやうに照りはえてゐた。

人々は、草履を引きずつて、廣場やその附近にぞよめいた。土ほこりが、篝火にすけて、眼に見えて、黃粉のやうに立上つた。荷桶を擔つた、寺男が亂暴に水を打つてまわつた。女達は、キヤア〳〵叫びながら、水の飛沫をさけて一方へ密集した。

「なんて勿體ないことをするんだ。」隅の方で、ある爺さんがぶつ〳〵云つてゐた。「一荷の水だつて、田へ汲んでやれや、よれかけとる稻が息づくんだ。」

提灯をつるした四本の柱に支へられてゐる櫓へ、太鼓や三味線が持ち運ばれた。囃方が、水瓶をさげて梯子を上つた。

雜然と群がつてゐた男女は、互に組みあつて、櫓の周圍に輪を作つた。

海に沿うて、長く一列にのびてゐる松原のかげに墓場があつた。そこには、燈火が點々と靜かに、ねむるやうにともされてゐた。啓助が燈火をともし、墓前に線香を立てゝ田の畦道を引つかへしてゐると、いくえに出會した。青い稻の香はしい匂ひがたゞよつてゐた。

「私も、あんたに出會すやうな氣がしてゐたの。」いくえは、白い反ッ齒をあらはして笑つた。

「俺もなんだか、そんな氣がしとつた。」

啓助は、いくえについて、また墓場の方へ下つた。波の音が稻田の上を傳つてきた。海岸は、人影が少くひんやりしてゐた。松原の沖に、八月の波が、夜光蟲で青くきら〳〵光つた。

いくえが、燈火をともし、線香を立てゝ墓石の間をくゞりぬけて來ると、二人は、別の道を川傳ひに寺の方へ上つて行つた。稻田の夜は、暗く靜かであつた。

「お月さんが出なけや、お盆のやうな氣がせんわのう。」いくえが云つた。

「十二時すぎなけや、新だから、月は出ないんだ。」

啓助は、闇の中に、嬉しさうないくえの横顏を見ながら、二人が初めて手をつないで一晩中躍りぬいた夜のことを思つた。まだその時は、舊歷でお盆をしてゐた。大きな月が踊つてゐるうちにいつか山の峽から出て來たものだ。櫓から手を伸ばせば屆く位に、それは地上に接近して見えた。あれから何年たつだらう。——その時、彼は二十才になつたばかりであつた。いくえは四ッ少なかつた。

彼女は、町の莫大小工場へ年期で稼ぎに出てゐた。盆と正月とには、ひまを貰つて村へ歸つて來る。啓助は、いくえが次第に年を取り、やつれてくるのを見た。初め、彼と手をつないで踊つた時には、彼女はまだ、内に充實した處女の生氣を持つてゐた。

「いつ年期があくんだつたかな？」

「この十月いつぱい。」彼女は、頰に血潮をみなぎらせ華やかになつた。中から嬉しさがこみ上げて來るのであつた。「でも、今年中は、居らなけやならんかも知れんわ。」

「どうして？」

「私、モスの羽織くらゐ一枚稼いでこしらへたいと思ふの……」

大きな樟が、杜の上にぬきん出て、傘のやうに擴がつてゐる、その杜かげに彼女の家があつた。踊があると毎晩、彼は、そこの納屋かげにかくれて、彼女が扇を持つて出て來るのを待つたものだ。彼は、すつかり暗くなるのが待ちきれなかつた。夕方、たそがれだすと、そこへ行つて立つてゐた。蚊がやかましく、物置きからうなり出てきた。

「だいぶ待つた？」いくえは、白い反ッ歯を見せながら、土藏の細あひから、そつと忍び出て來た。

「いや。」

「あの林のかげから廻つて行かない。」

二人は、家人に氣づかれないやうに、草履の音をしのばせて、家の裏から人通りの少ない林の方へ行つた。その家は抵當に這入つてゐた。貸主は、家を取り上げやうとしてゐた。いくえが莫大小工場へ行くことになつたのは、その借金が主な原因だつた。

啓助は、盆がすむと、あくる年の盆が來るのを待つた。そして翌年の盆がすむと、またその次の盆が來て、いくえが町から歸つて來るのを待つた。彼は、幾年盆を待つたであらう。彼は二十七才になつてゐた。いくえは二十三だつた。

彼は、小作料を三年分滯納してゐることを思つた。まだ西瓜が出だしたばかりの夏である。だが百姓達は、既に、食ふべき米を殆んど持つてゐなかつた。二人が結婚するには、米がとれなければならなかつた。

二

薪を加へられて、篝火は、花火のやうにパチ／＼火の粉を散らした。

踊子が輪を作つてゐる外側に、踊に加はらない老人や中年者が、蓆を敷いて見物してゐた。太鼓が調子をとつて鳴り始めた。おぼつかなげな三味線がそれに和した。踊子は、日の丸の扇を擴げて振つた。派手な水色の中柄や、花模樣の長襦袢が彼等が手足を動かすにつれて、提灯と篝火の光りの下にひら／＼ひるがへつた。

「いくちやん踊れよ。」

「手拭をくれるまで踊つてやらうかしら。」いくえは、啓助を見て微笑した。「あんた踊らない？」

「俺や、今年はやめとく。——誰れかい、相手はないかな。」

いくえは、見物人の間をかき分けて、相手をさがして歩いた。彼女がほかの男と踊つても啓助は嫉妬する男ではなかつた。しかし彼女は、意識して相手を選んだ。啓助と同年輩の者と手をつなぎたくなかつた。

太鼓の音は、廣場の空氣を震動させた。連日の野良仕事に、日に焦げ、汗に汚れた音頭取りの聲にも張氣があつた。盆の休日を、彼等は、夕方まで寢て暮し、休養したのだ。踊子は、輕く見物人の前を舞ひながら通りすぎて行つた。

いくえは、十一になる彼女の從弟をつれて來た。彼女は、細紐でたすきをかけ、長い着物の裾を引き上げた。

「仙ちやん、さ、とびこむのよ。」

潮風で皮膚を焦がした、肉づきのいゝ仙吉は、いくえに手を引かれて、見物の間から早足に走り出た。彼女は、踊子の輪の切れ目を探した。そして、そこへ、投げられた石のやうに全速力でとび込んだ。

啓助の前を幾組もの男女が、扇を振り、分れては、また手をつなぎながら、キリ〳〵廻つて行きすぎた。バネ仕掛で、規則的に、はねてゐる人形のやうだ。バネが狂つて、音頭の調子にはづれた踊り方をしてゐる組もやつて來た。わざと滑稽なしぐさをして見せる老婆も交つてゐた。老人は、踊りながら、傍の若い男女にわるさをしかけた。啓助はそこに、町へ稼ぎに出てゐる澤山の若い男女を見た。紡績工場へ行つてゐる者があつた。女中奉公から歸つてゐる者もあつた。石鹸工場から歸つてゐる者もあつた。また、啓助は萬問屋の息子の喜作を見た。彼は、ふと嫌惡と不快から顏をそむけた。女の服裝をしてよろ〳〵戯れ半分にやつて來る、それが喜作だつた。喜作は鶴龜算さへ完全に解けない癖に親爺の威力で小學校を常に首席で通した。次には、金の威力で町の學校を卒業した。啓助は、羨望と反感をいまだに忘れることが出來なかつた。しかし、彼が顏をそむけたのは、それにのみ起因してゐるのではなかつた。

喜作は、踊りつゝ衆目を憚らず、薄い浴衣を通して、肉體の溫度や、柔かい皮膚の感觸が殆んど直接的に感じられる、發育しきつた匂ひ高い女の腰に抱きついた。相手は、憐憫を求める捨てられた戀人のやうに、喜作に反抗しなかつた。その女は、健かな、汚れない血を持つてゐた。籌火のかげに、彼女は紅みを帶びて昂奮し、かゞやいてゐた。彈力ある二つの腕は、強い速力で、磁石のやうに、相手の肉體を引きつけた。二人は一つになつた。そしてバネのやうに脚をはね上げながら見物人の前を廻つた。喜作は故意によろ〳〵した。女は、倒れさうになる彼を支へた。それが妹のお清だつた。

「何てことをしやがるんだ！」啓助は、齒痙ゆさと同時に、腹立たしさを感じた。

二人は、離れて扇を振つた。そして幾秒かの後、再び手をつなぎ合つて、尾のあるアミーバのやうにむすばれ、一つにとけ合つた。啓助は、お清を引きずり出しに、とびこみたくなつた。彼は、自分の顏がほてつて來るのを感じた。妹の醜い、ふしだらな恰好は、多くの踊子の中で特別に目立ち、見物人に對して、彼自身が羞恥を感じた。喜作は、親からして、小作人との結婚を眞面目に考へる男ではなかつた。それだのに、お清は、一圖に、喜作の云ふがまゝに、柔順になつてゐるのだ。

太鼓が不意に鳴りやんだ。夢中に廻つてゐた踊子は、號令でもかゝつたやうに、立止まつた。坐つてゐた見物人の中から五六人の老婆が立上つて、踊子の方へ早足にやつて行つた。

寺の廊下へテーブルにのせて、紅木綿の手拭が持運ばれて來たのだ。皆、その紅い手拭に眼をつけた。見物席から、また、五六人立上つた。踊子は列を亂して、廊下の紅木棉の方へなだれよつた。

「待て、待て！　順を作つて來い。慌てゝでも、皆に一つ宛やるんだ。」

テーブルの傍には、萬問屋の下男と、お作とが立つてゐた。お作は、にこ〳〵笑つた。彼女は、五十才をすぎたばかりだが、髪は眞白になつてゐた。下男は、さきに、紅い手拭を一筋取つて、鉢卷をして人々に叫んでゐた。

「おい、おい。順を作つて來い。順を！　皆に一と筋づつ、誰れにでもやるんだ。」

廣場からは黄色の土煙が、篝火にすけて、再び、ひどく立上つた。

村の中ほどに、新しくつけられた道路に面して、新しい二階建がある。村に使ふ必要な品々を、なんでも殘らず並べたて〻賣つてゐる。菓子、荒物、雜貨、酒、醤油、鍬、肥料、それから風藥、肝油。これが、萬問屋の牛次郎の店だ。

そこには、主人の姪の新子が店番に坐つて、酸つぱい聲で笑ひ喋づてゐた。新子は三十をすぎてゐた。が獨身だつた。口の惡い青年は猥褻な表現で――その表現を自ら喜びつ〻――彼女に生れつきの性的缺陷があると云つてゐた。

牛次郎は、小作地の差配をも兼ねてゐた。地主の節田組は村の近くに事務所がなかつた。彼は、節田組の手代の仕事をやつてゐた。小作料の籾粒を口に入れて、乾燥の程度を嚙んで試すことを忘れない男だつた。掌に籾粒をのせ、口を細くしてそれを吹くと、空殼が呼氣の力でとび落ちたりする。彼はさういふ籾を見つけると、籾俵を秤にかけることを要求した。節田組の社長はF男爵である。その男爵に、忠義立てをすることを名譽と心得てゐるのだ。

その外、金貸し、穀物問屋、木問屋など、儲かる商賣なら何にでも牛次郎は手を出した。

店の品物は、粗惡で高かつた。醤油は鹽水のやうだつた。酒には藥や、水がまざつてゐた。彼が貸した金は、まるで高利貸のやうな利子を取つた。百姓達の苦情は、絶えなかつた。だが、牛次郎は、

「これで氣に入らなければ店へ厄介をかけに來るな。」と叱るやうにがみ〳〵云つた。

新子は、村に一軒しか雜貨店がないのにつけこんで、小作人を見くびり、自分の好惡に從つて賣値に高低をつけたりした。

彼女は、金をよこす男には、いくらでも水の混つた酒を押し賣りした。金のない男には、コップ一杯の酒をさへ渡さなかつた。節季に、掛が拂へない家からは、穀物でも、薪でも、鍬でもそこらにあるものをなんでも金の代りに取り上げた。

半次郎の妻は、信心ばかりに凝りかたまり、商賣には、全然かゝずらはなかつた。彼女は――名前はお作と云つた――近所の老人達をさそひ合して、よく隣村の眞言宗の寺へ參つた。どこかへ參る時、お作は、店へ這入つて、駄菓子と一緒に向うへ供へるものを持出した。

新子は、腹立たしげにふくれ面をして、何にも、ものを云はず、叔母の行爲を睨むやうに見てゐた。

「あとをちやんと閉めといて頂だい！」

新子の物惜みと不服は、かういふ表現をとつた。そして、叔母が閉めたばかりの障子を彼女は、手荒く開けたて、梯子段をきし〳〵踏みならして、二階へ馳せ登つた。

「また叔母さんが店のものを持ち出したぞな！」

半次郎は二階で帳面を繰り、利子の勘定をしてゐた。

「ふむ。」彼は眼鏡を外して考へこんだ。

「煎餅を二十五枚に、線香を三束……」

「ま、えゝよ。持つて行かせ。」

「なんぼ持ち出したつて切りがあれせん！」新子の癇高い聲は、近くの田で草を取つてゐる百姓にまで聞えた。

「えゝよ。信心ごとに使ふたものは、また御利役で、ひとりでに戻つて來るもんぢや。えゝよ、えゝよ。」そん時、半次郎は、滿ち足りた者の微笑を浮べた。

お參りごとの行きかへりに、お作は、何かむしやく〳〵食つた。老人達に煎餅を分けてやつた。

彼女の信心とお供へものは、村人の心を和げた。半次郎と新子に深く反感を抱き憤つてゐる者も、同じ家に信心深いお作が住んでゐることを思ふと、まだしも許せるやうな心持になつた。宗教が民衆の鬪爭力を鈍らせるやうに、彼女の信心と施し物は、百姓達の燃え上る反抗心に安全瓣の役目をした。

彼女は、毎年、お盆には、手拭をやることにしてゐた。百姓は、何ケ月かの勞力を積んで作つた穀物を賣らなければ、一錢の金さへ得られなかつた。また、彼等は、その金を出さなければ、一枚の紙だつて只では得られなかつた。お作の手拭は、彼等を喜ばせ、彼等の憤怒を解いた。人々は只で貰へる手拭をあてに廣場へ集つて來た。

小娘達は、貰つた手拭を早速擴げて頭にねえさん冠りをした。娘はそれで、頭や顏をかくして踊る

のだつた。お作は、提灯の光の下に喜ぶ婆さんや若者や娘達を見て、自分までが嬉しさうにほく〳〵した。

下男は、脇からひよいとテーブルのさきへ現れた者を突きのけ、順を作つて來るやうに力いつぱいに繰りかへし叫んだ。

踊子は、褒美を貰ひに行く生徒のやうであつた。櫓に上つてゐた太鼓方も、三味線方もおりてきた。見物人は廊から立上つた。彼等も踊子のうしろに列を作つて押しかけた。

「何だい！　こんな安物の手拭をくれたつて！」誰かゞ列の中で腹立たしげに叫んだ。

「水のやうな酒を賣りやがつて、こんな手拭でごま化さうたつて、ごま化されやせんぞ。」

「さうだ。その通りだ！」ほかの聲が應じた。

お作は、嬉しげに笑ふことをやめなかつた。

「定五郎！」彼女は下男に云つた。「あの庄さんにも一つやつておくれ。」

定五郎は、文句を云つた男の方へ別な手拭を投げた。人々はどよめき、手拭を受取ることを急いだ。

定五郎に突きのけられた男が、反動的に強く押しかけた。

廊下の柱の提灯は、ぼんやり周圍を明るくしてゐた。奥の佛壇には、かすかな燈明がふるへてゐた。

そこは、暗く、無氣味で、抹香の匂ひがたゞよつてゐた。喜作が突然その闇の中から折り疊んだ手拭を腕一杯にかゝへてむつくり廊下へ現れた。彼は、だらしなく笑ひ、依然としてよろ〳〵した足どりだつた。廊下に出ると彼は、腕から急に力を抜いた。かかへられてゐた手拭は、一時に、廊下へ崩れ落ちた。

「そらッ、行くぞ！」

不意に彼は、のど一杯の聲を出した。人々は彼に眼を注いだ。喜作は手拭を掴み上げた。そしてつづけさまに、群集の頭をめがけて、疊んだ手拭を投げた。手拭はさう遠くへはとばなかつた。

人々はどよめき、列が亂れた。喜作は出たらめに、大聲で叫びながら、手あたり次第に手拭をまるめて、廣場の方へ投げた。

篝火のあかるみは裏へ、提灯はゆらめいた。群集は、闇を通してとんで來る手拭を眺め、その方へ殺到し、互に手をかきむしり合つた。

三

太陽が登り始めた。白い、爽かな夜明けが、いつか、灼熱燒くやうな日中に變つて行つた。夜半す

ぎまで踊りくたびれた人々は、泥臭い溝の水が煮えかへり、悪臭を放つてゐる稻田へ水を取りに出かけた。

旱天つゞきに、田の水は涸れ、所々、龜裂を生じてゐた。盆の休みに水を汲まなかつたことは、直ちに稻の發育に影響した。葉末のよれ方が一層ひどくなつた。海岸近くの田には、鹽氣がさした。青い眞直な稻葉が、銹鐵色に變りだした。

啓助は、父親の啓太郎と二人で池の水を汲んだ。彼等はいつも、休日の後では、休んだ分をも取かへすために、二倍も三倍も働かねばならなかつた。百姓が休んでも、太陽は、水分を蒸發させ、稻を枯らすことをやめはしなかつた。雜草は、根をからませはびこることを中止はしなかつた。

太陽は、薄い襦袢を透して燒きつけるやうに肌を射た。何百回となく重い釣瓶を引き上げると、腰が筋ばり痛んだ。啓助は、百姓がつくゞくいやになつた。稻はこのまゝ四五日も放つて置けば、枯れてしまふだらう。すると、春以來の勞力や、肥料や、種苗がなんにもならなくなつてしまふのだ。

出稼ぎから歸つてゐる者達は、正月以來、着汚し、着破つた着物を洗ひつゞくつて、行李につめ、村の背後の丘を登つて、再び町へ稼ぎに出かけた。いくえもそこを登つた。それから、與吉も、浪次も、てい子も。

啓助は、撥釣瓶を引き上げながら、それを見送つた。彼も二十才以前に、醬油工場で働いたことがあつた。工場の勞働の方が野良仕事よりも遙かに容易だつた。勞働時間が、十時間働くとしても限られてゐる。それだけでもよはどましだ。野良仕事はさうは行かない。彼は今、十三時間も、十五時間も働いてゐるのだ。さうして、仕事はなほあとからいくらでも追つかけて來る。

丘の上には、松林があつた。松林を登りきると、道は平坦になつて、細く眞直につゞいてゐた。若者達は、そこを行つてゐた。一里半歩いて停車場へ着くのだ。

彼等は、町でいくらかの金を稼いできた。そして、それを、家の生活費や借金の利子にあてた。が、それだけでは、半次郎への節季の支拂に足りなかつた。不足分だけ金の代りに麥を渡さなければならなかつた。それは、啓助の家でさうするばかりではなかつた。百姓達は、それ〴〵、息子や娘を稼ぎに出し、儲けてきた金は、すつかりそのまゝ半次郎へ拂つてしまつた。その不足は、食糧とする麥を節約して金の代りに渡すのだ。

彼等は、理由なしに、只で大豆一粒さへ半次郎へやりはしなかつた。半次郎へ渡すものは、小作料だつた。肥料代だつた。酒、醬油、その他の日用品を買つた代價としてゞあつた。ところが要求されるまゝに、それ等を渡してゐると、一年中、家族の者全部が町と、村で汗を流し、骨身を削つて稼ぎ

得たものを悉くやつてしまはなければならないソロバンになつた。

彼等は、自分の空腹を幾分か満たし、餓死すまいとすれば、それだけ小作料が拂へなくなつた。そこで、一年分滞納した。彼等は小作料一石六斗を一石一斗に負けることを要求した。要求は容れられなかつた。二ヶ年分滞納した。

百姓は、酒を二合のむところを一合に節約した。團子の砂糖餡を鹽餡にかへた。ある者は、欲しい酒をやめてしまつた。またある者は、茶碗に五杯の麥飯を、四杯で我慢した。……

四十人ばかりの若者が町へ行つてしまふと、村は急に空ッぽになつたやうに目立つて淋しくなつた。ひよろ〳〵して手脚のきかない老人が殘されてゐた。あとをついで百姓をすべく習慣づけられてゐる長男が殘されてゐた。殘された者の前に希望はなかつた。飢餓と過勞があるばかりだ。

一反歩ばかりに、正午からかゝつて汲んだ水が、まだ夕方になつても、田の隅々に行き渡らなかつた。

「また蟹が孔をあけとるんやらしれんぞ。」啓太郎は、薄暗くなつた田を足先でさぐりさぐり見まわつた。

海岸から上つてきた、大きな黒い强盜蟹が澤山住んでゐる。それが田の底や、畦の端へ深い孔を掘つた。蟹は稻の葉や雜草をついばみ、肥料を孔の中へ引つぱりこんだ。百姓は、見つけ次第、その甲羅を叩き潰した。その蟹の孔が、鰌のやうにぐい〳〵水を呑みほしてしまふのだ。

「畜生！　また孔を開けとるわい！」向うの畦の近くで啓太郎が腹立たしげに云つた。

啓助は、がつかりした。急に疲勞が增して來た。

あたりは次第に暗くなつた。人家では老人が蚊遣火を焚き始めた。蓬の煙が稻の上を靜かに流れ匂つて來た。

啓助は、ふと、手に持つてゐる釣瓶の竿が見えなくなつたことに氣づいた。汲み上げられて底深くなつた水面に釣瓶があたるのが手に感じられる。が、池の石崖が見えない。稻も、畔も見えない。汚れた指を單衣の袖で拭いて眼をさぐつてみた。潰れてゐるのではない。開いてゐる。それだのに眼が見えない。

「お父う。俺ら、鳥眼にやられたやうぢや。」彼は悲しげに泣き出しさうな聲を發した。「眼が見えん。」

「どうした？」

「俺ら、鳥眼にやられたやうぢや。眼が見えん。」

「半次郎の二階に電氣がついとるだらう。——あれが分るか？」

「いゝや、分らん。」

彼は、父親に手を引いて貰つた、そして、畦を踏外さないやうにさぐり〳〵細道に出た。

どつか遠くから、御詠歌と鐘の音がなごやかに傳はつて來た。

「あれはどこ？」

「あれか、あれが半次郎の二階ぢや。お作が人を集めて御詠歌をあげとるんぢや。」

「あゝ、成程。」

「あの電氣が見えんかい？」啓太郎は口惜しさうに繰かへした。「五十燭が光つとるんぢやが。」

父子は、細道をさぐりながら、ぼつ〳〵家路をたどつた。

啓太郎は、寸時、立止つてなごやかな御詠歌に耳を傾けた。彼は、悲しい、濕つた心持になつた。

「盆も、とう〳〵去んでしまふたか！」

四

九月がすぎ、十月が來た。軟い北風が陸から海へ毎日稻穗をそよがせて通つた。蝗が葉から葉へ、はねとんだ。鳴子の桟が立てられた。

「半次郎から苅入れまでに昨年の地子を納めろちうつてやつて來たが。」

或る夕方、晩飯を食はうとしてゐると、誰れかゞ戸口で云つた。そして、なほ、何か小聲で喋べつて、聲の持主は向うへ消へてしまつた。

啓太郎が蒼くなつて這入つて來た。その唇がぴく〳〵慄へてゐた。

「今のは誰れぢや？」勝手元で鍋を洗つてゐたお鹿がきいた。「ぢやら〴〵したことを云ふてくれな。苅入れまでに地子を納めろたつて、米も籾も有れやせんが、苅入れてから始めて籾が取れるんぢやないか！」

箸を持つてゐた小さい榮枝の手がぶる〳〵慄へた。

「なんでも、地子を納めなんだら、半次郎はお上に賴んで、今年の稻を苅らさんといふ算段を立てとるらしい。」

啓太郎の聲は慄へた。何か目に見えない惡靈が家の上から襲ひかゝつてきたやうだつた。

「何ぢやつて？」婆さんは、二本の前齒を露はした。「そんなことになつたら、うら等、どないしたらえゝんぢや。地子に納める米は一升もないのに。」

「立毛差押へをやらうといふんぢやな。」鎌の柄をすげかへてゐた啓助が云つた。

「うら等、昔人間にや、今の者のすることが譯が分らんわ。」お鹿は泣き出しさうな顏をした。「こっちに、汗水たらして休みもせずに作つたものを、むざ〳〵と取り上げて、饉ゑさゝうとは譯が分らんわ。」

土間の隅でミノルカが、何かに驚いて、けたゝましく騷ぎだした。

「どうしたんぞいの？」

病氣で寢てゐる千代が納戸から這ひ出て來た。榮枝を產んで三十日も經たないうちに、田植に這入り、それがもとで血の道が出た。彼女はそれから始終健康がすぐれなかつた。ひどく黑血がおりて、身體を引き締めてゐる筋が狂つてしまつたやうな氣がする、彼女はそんなことを繰りかへしてゐた。彼女の病氣は七八年もつゞいてゐた。

「なアに、なんでもない。俺がたしかめて來てやる。」啓助が茶漬をかきこんで外へ出た。

家の中には、薄暗い豆ランプが一ツともつてゐるきりだつた。ホヤには黑い煤がこげついてゐた。ホヤの上邊のふちはかけてゐた。油壺にはほこりが積んでゐた。芯がヂヂヂヂイと不吉な音をたてた。

「苗一本も植付けん者が苅らさんやこし、そんなぢやら〳〵したことがようも云へたこつちや！」お鹿は繰かへした。「誰が川普請をしたり、溝をつけたりしたと思うて、苅らさんやこし云ふんぢや。……砂のやうな田だけ有つたつて何が作れるもんか！」

「今年や、もう麥も賣つてしまふたし、」啓太郎は嘆息した。「稻が苅れなんだら何を食うて暮すか……芋や大根でもかぢるか。」

ランプの芯がつゞけて、ヂイヂイヂヂと音をたてた。そしてどうしたのか、暫らくヂイヂイヂがつゞいて、急にポッと消えてしまつた。

家の中がまつ暗闇になつた。

「石油はないかな？」母の千代がきいた。

「もう德利に一としづくも入つとらん。」榮枝が答へた。

「ごそ〳〵してランプを割るとまた錢がいるぞ！」お鹿は孫を叱りつけた。「われ、ぢつとしとれい！」

病氣の母親は溜息をついた。

動いてゐた子供は、身體を小さくちゞめて、手を兩脇につけた。誰れも微動だもしなかつた。やがて、榮枝は、祖母の耳に入らないやうに、ひそかに敷き流しの寢床の方へぼそ〳〵這つて行つた。

五

スコップのやうな大きな手を持つてゐる啓太郎は、一度に二株づゝ握つて鎌に引つかけた。榮枝が

それを眞似て、手頸を曲げて二株を一緒に無理に掘りこまうとした。稻は彼女の手にあまつた。そして、濕つた粘土の上へバラ〳〵に倒れ倒れた。

「てんごをするな！」お鹿は、黑く煤けた手拭を冠り、孫と並んで稻を刈つてゐた。稻のもとにしやがみつゞけて、彼女の腰は痛み疼いた。それを無理やりに我慢した。「倒れたやつを拾うて、ちやんと揃へとけ！」

千代も姑と並んで刈つてゐた。彼女は、血の道の頭痛を無理やり押し怺へてゐた。彼女はおくれ勝ちになつた。

「お母あ、これや、まだ靑いことないん？」榮枝は倒れた稻を揃へながら、籾を指先でひねりつぶしてみた。がさ〳〵、はしつかい感觸の籾の中から白い乳のやうな汁が出た。「まだ米になつとらんのが有らあ。」

「だいぶ靑いなあ。」千代も腰の痛みを怺へかねてゐた。彼女の腰は、狂つた筋が引きつつた。一と握り刈つて、娘に答へる間、彼女は姑の樣子に氣を配りつゝ背後へ反るやうに腰を伸した。

「靑いとてだんない。しやん〳〵刈れい！」すぐお鹿が腹立たしげに二本の前齒をむき出した。「逆さにして、なるに掛けとけや、實は入つて來るんぢや。」

祖母は、心で豫算を立てゝゐた。今日のうちには、この一枚だけは刈つてしまへる。明日は、朝からほかの田を刈る。お晝からは、刈つたのを束ねて家へ取りこむ。なんでも刈取ることが急ぐのだ。

千代は姑に負けないやうにした。お鹿は嫁と孫とが腰を伸すために、ぼんやり立たないやうに、自分からさきになつて追ひたてた。

雀が、彼女等の附近で戲れ、穗をついばみ、囀つてゐた。未熟な、白い汁の出る籾が雀にとつてはうまいのだ。人間が、捕へたり、擊つたりするひまがないのを見ぬいて、雀は、大膽に揃へた稻穗をかきさがしつゝいた。やかましく囀りながら角力をとつたりした。

「シッ！　シイッ！　こらッ！」榮枝が手を振り上げて追うた。雀は子供を見くびつて知らぬ顏をしてゐる。

榮枝はまた手を振り上げた。祖母と母とは、互に刈りまけないことにばかり心を奪はれてゐた。常常の、ひそかないがみ合ひが、こんな時にまで現れた。二人は早く刈る競爭を始めた。

「シイッ！　シイッ！」

榮枝は土塊を拾ひ上げて、雀に投げつけやうとした。その時、彼女は急に狼狽したやうに口を噤んで棒立ちになつた。

向うの畦の近くまで苅り進んでゐた父親も、稲を置いて突ッ立つてゐた。執達吏が、四五人の警官と、役場の書記と、人夫をつれて、松林の方から坂道を下つて、田の畦へやつて來たからだつた。

「こら、苅るでない。やめろ！　苅つちやいかん！」

執達吏は、四分の一ばかり苅り倒されてゐる田を見渡しながら、太い、精力的な聲を傳へた。

「こらッ、苅るでない。畦へ出ろ！」

お鹿と千代は、苅ることに夢中になつて、その聲に氣づかなかつた。執達吏は、精力的な聲を再三繰りかへした。身體の締つてゐる警官が、故意に高く劍を鳴らして、田の中へ這入つて來た。

「こらッ！　こらッ！」警官は、靴を粘土にぬめりこまさないやうに、苅株の上を選つて踏んで行きながら、なほきつく劍を鳴らした。百姓の暴力に備へてついて來たのだ。だが、百姓や、勞働者を×する平生の習慣が、無意識に婆さんを引きずり出しに行かせた。

お鹿は、ひよいと突立つた。彼女は、何事が起つたのか理解できないやうな顏をして、まばゆげな眼で、畦の方を眺めた。

「なんでございますか？」

「畦へ出ろ！」

「稲を苅るのが惡いんでございますか？」

「早く出ろ！——苅つちやいかんのだ！」

「この稲は、わし等が作つたのでございますが、それを苅らさんといふんでございますか。」

「早くこつちへ出ろ！」

千代はくたびれて、顏に血の氣がなくなつてゐた。彼女は、苦るしい競爭から救はれて、ほつとした。だが、裏に泥が粘着した重い草履を引きずつて畦へ出る時には、恐怖に、動悸がひどく高まつて來るのを感じた。たうとう豫期したものがやつて來たのだ！

「この稲を苅つて米にせんと、家にやもう食ふものがないんでございますが。」婆さんは繰りかへした。

「芋がちつとあるばかりで、麥もないし、六人の家内が食ふものが無うて饉ゑにやならんのでございますが。」

「早く出ろつて云つてるんだ！」

お鹿は警官に襟頸を摑まれた。せいの高い警官の肩は、彼女の黑い手拭をかむつた頭の上にあつた。襟頸は、力强い手でぐさりと摑まれた。お鹿は、びつくりして泣くやうな、また反抗するやうな、恐怖に滿ちた叫聲を發した。泥のついた骨ばかりの兩手を後頭部にまはして、警官の手を握り、力い

つぱいに、それをのけやうとした。が、肉づきのいゝ一本の手は襟頸から離れなかつた。彼女は、畔まで引きずり出された。お鹿は尻に力を入れて、反抗的に田の中にへたばりつかうとしながら、必死に呪ふやうな言葉を發して呻いた。帶がゆるみ、着物がぬげさうになつた。

執達吏は、人夫に、將棋の駒のやうな立札を打ちこませた。田の四隅へは杭を打ち、畦に添うて、携へて來た繩を張りめぐらした。人夫は卷いてある繩の端をほぐして、畔を走つた。繩の輪が一方の杭の下で、敏速に、たぐり出された。畔に穗をもたせかけて並べてあつた苅つた稻は、無關心にびしやびしや人夫に踏みにじられた。

「苗一本植ゑるでなし、水一杓汲みこまん者が、こつちの稻を苅らさんやこし、ようも云へたこつちや！」お鹿は、髪が亂れ、襟頸からぬげさうになつた着物をそのまゝ、つくらはうともせずに、そこらにゐる人間に呪咀をあびせかけた。「お前さん方、誰れの作つた米を食うてそんなことが出來るんぢや！　覺えとるがえゝ。今にそのむくひが來るんぢや！」

彼女は執達吏と警官を睨みまはした。

「覺えとるがえゝ。」

だいぶ離れて立つてゐる警官の方で、誰れかゞ婆さんの言葉を眞似て笑つた。

「お前等、苗一本さへ植ゑん者が……畜生！　罰があたるんぢや！」

「覺えとるがえゝ。」

今度は人夫が笑つた。

丘の下から海岸まで、一面に蓆を敷き擴げたやうに、稻田は遠く伸び擴がつてゐる。そこには百姓達が、人家や杜かげに、見えつかくれつ、こぞつて、忙しさうに稻を苅り取つてゐた。

「來たぞを！」

そこで、誰れかが、猛獸に襲はれたやうに悲しみを帶びた聲で叫んだ。

「來たぞを！」

稻は、どの田にも、まだ十分實つてはゐなかつた。だが、彼等は、食ふだけの米を取入れることを急いでゐた。假差押へをされないうちに手を廻してゐたのだ、老人や子供達も緊張してゐた。

「來たぞを！」

急に百姓達が、戰爭のやうに田の中を走りまはりだした。稻束を、先の尖つた六尺棒に突きさして、若者が納屋へかついで走りだした。老人は苅つた稻を集めて束ねかけた。女は、稻束を輕子につけて畔をころびさうに走つた。

騷ぎは萬間屋へ響いて行つた。店から半次郎が、ひよろ〳〵道へころび出た。新子が、赤のゴム管を持つてとび出て來た。酒に水を割つてゐたところだ。彼女は、小作人が勝手に稻を刈取つてゐるのに腹立て、八升の水を割込むところへ、一斗五升を流し込んだ。

「まあ、氣味たいがいゝ。」彼女は蛇のやうにペロ〳〵舌を出して喜んだ。舌には酒の臭がしてゐた。

「たうとうお上に來てくれた。まあ、氣味たいがいゝ！」

「うむむ。」半次郎は一人でうなづいた。「これで助かつた。これで助かつた！」

嬉しさうに吐息をつきながら、半次郎は、執達吏が繩を張つてゐるところへ、ちよこまか走つて行つた。そしてペコ〳〵頭を下げた。

繩張り内の稻は、たとへ刈り倒したものでも、一切、手を觸れることは許さない。啓太郎は執達吏から云ひ渡された。彼は、きゝながら脚がぶる〳〵慄へた。若し觸れると罪になる。精力的な肉づきのいゝ執達吏は、おどかすことを忘れなかつた。

「どうも、御苦勞さまでございます。」半次郎は、眼の周圍に、いつぱい皺をよせて笑ひながら頭を下げた。「どうも御苦勞さまで……」

向うの田では、小作人が必死に働いてゐた。「早くしろ！」「路を踏み外すな！」「何ぐづ〳〵してるんだ！」口々に叱り罵る聲が傳はつてきた。

「お前さん、刈つとる分だけは、持つていんでもえゝんぢやらうが！」お鹿は云つた。

「いゝや、それやいかんのぢや。」半次郎が答へた。「この繩張り内の稻は、お上のものぢやせに、一本でもとるこたならんのぢや。」

「なんぬかすぞい！」婆さんは二本の前齒をむき出して、「お前等、苗一本さへ植ゑん物がへちやこちや云ふて呉れな。きゝたうもない！」

六

籾の腹がふくらんで、秋は深くなつて來た。

百姓達の前には、彼等が苗を作り、植付け、水を汲み、育てあげた稻が瑞々しく熟つて、穗を垂れてゐた。彼等は、目前にある、その稻を手を伸ばして刈取ることが出來なかつた。どの田にも、いかめしい公示札と、繩張りが、稻に手を觸れることを禁じてゐた。

彼等は落ちつかず、仕事がなく、何もせずにぶら〳〵日を過した。折角、春以來、あらゆる勞力と、よりすぐつた種苗や肥料をいれて、秋の收穫のためにのみ努めてきた。それがふいになつてしまつた

のだ。小作人は集會を開いた。憎惡と憤怒と反抗が、彼等の胸中に渦卷いた。彼等は、この稻を取入れなければ、一年間、食ふべき糧が得られないのだ。餓死しなければならないのだ。稻は、差押へられても、まだ完全に地主は取り上げられてはゐないことが明瞭になつた。差押へたものは、必ず競賣に附せなければならなかつた。

「この稻を二束三文に買ひ取つてみろ。その方が、よつぽどいゝ復讐ぢやないか。こつちが團結して競賣場へ押しかけさへすれや、うまくやれるんだ。」筆のやうに頭のさきが尖つてゐる、それで筆次といふ名がつけられてゐる細高い男が集會で云ひだした。

「どうするんだつて？」

「お寺で競賣をやる時にさ、誰れも彼れも、皆んなそこへ押しかけて、寺のぐるりを取卷くんだ。さうして地主や半次郎が入札にやつて來たら叩き返して這入らさんのだ。こつちだけで安く落札するんだ。」

「そんなことが出來るかのう？」

「出來るも出來んもない。無理やりにやるんだ。それをやらんけや俺等は餓死にするばかりぢやないか！」

彼等は、準備を整へて競賣日を待つた。競賣日は、木曜日だつた。彼等は、朝から寺の廣場へ押しかけた。十時がすぎ、十二時が來た。彼等は、執達吏がやつて來るのを待つた。二時がすぎ三時が來た。彼等は、寺の廊下の其處、此處に腰かけ、ボンヤリ待つた。本堂はがらんとして空虛だつた。廣場には、枯れ松葉が落ち松毬がころんでゐた。お盆に賑ひ騷いだ踊のあとは全然見られなかつた。村は鳴りを靜めて、ひつそりしてゐた。四時頃、誰れかゞ日延べされたことを半次郎からきいて來た。

「何だい。ぢやどうして前からそのことを知らせなかつたんだ！」彼等は知らして來た、小さい男が癪に障るかのやうに腹立てた。

「何で日延べをしたか、その理由を追及しやうぢやないか！　こつちを馬鹿にしてるんだ！」

彼等は、終日、全然働かなかつたのに、非常な疲勞を覺えた。ひどい損をしたやうな心持を抱いた。そして不服に分れ散つた。

稻は熟れすぎた。青くかり〳〵してゐた藁が枯れて灰色に變つた。穗の重みに壓されて、稈が折れだした。

一週間を經た、次の日曜日だつた。日曜日に、執達吏がやつて來る筈がなかつた。啓助は見るともなく自分の家の前から、石に腰かけて、松林の方を眺めやつた。三人、見覺えのある男が急ぎ足にお

りて來た。町へ出稼ぎに行つてゐる男だ。仲仕をしてゐる俊次と、仲さんと、福松だ。仲さんと福松は、鹽田稼ぎをやつてゐる。啓助は、さうきいてゐた。三人は村に這入ると、何事か、大聲に喋りだした。それは、すぐ、人々の注意を惹いた。

三人より、一と汽車おくれて、若者が群がつて、土埃を立てながら馳せつけて來た。工場へ出稼ぎに行つてゐる伴や、中年者の三男だ。娘が二三人、桃色の湯卷を露はに、裾をまくりあげて、若者にまじつてゐた。娘は、男達からおくれまいと息を切らしてゐた。

「俺ら、親方の目のこ玉を叩き潰して失業しとつたんだ。さうすると、俺等、失業者仲間の龜太といふ、こいつも眼かんちだがな、そいつが西條の半次郎へ稻苅に傭はれて行くちゆうぢやないか。」俊次は人々に取かこまれてゐた。彼は途中で誇らかに喋つて自分の家へ歸つてゐなかつた。「西條つたら俺等の村だらう。それで俺や、こいつはおかしい、と睨んだんだ。これにや、何か仔細がなけれやならん。そこで俺れや、播州の者だつて、だまして、傭ふてくれないかと、そこへ行てみたんだ。すぐ諾は分つたよ。半次郎は、差押へた稻の任意處分を受けてさ、一氣に苅るとて、澤山の人夫を募集しとつたんだ。」

「なんでも、この稻を殘らず、四百兩で買ふたちゆう話だ。」仲さんは鰻のやうな顏をして俊次の話を

補足した。彼は村に生れ、村に育つた男だつた。が、家は離散して落ちつくあてはなかつた。

「だが、稻は競賣に附せなけやならん筈だ。」誰れかゞ云つた。「いつたい、いつのまに、俺等に內所で賣つちまつたんだ。」

「そんなこた、どうやつたか、俺れや知らねえ。なんでも、この稻みんなで（仲さんはかきまはすやうに兩手を擴げた。）四百兩ちゆんだ。なんてベラ棒な値だ。まるで只ぢやないか。普通の相場にしてみろ、四千兩がところは鳴つとらあ。」

「お上も半次郎と、ぐるになつて、くそたれめが、惡いたくらみをして居つたな！」群集の中から溜息と同時に呟きが聞えた。「くそたれめが、俺等をひぼしにしようといふんぢや。覺えとるがえゝ！」

「俺れや、そこで、村から行とる物全部にふれてまはつたよ。」俊次はつゞけた。「町のことは放つとして去ね。去んで半次郎を叩き殺してしまへつて！」

人々は次第に多く集つて來た。最初の競賣が延期され、彼等の眼にふれないところでどんなからくりが遂行されたか、それはすぐ了解された。啓助のあとについて話をきゝにやつて來た榮枝は、譯が分らずにがちゝ慄へてゐた。正吉が速急に集會をふれてまはつた。

「くそッたれめが！　××も半次郎もぐるになつて、惡いたくらみをやりやがつたな！　もう承知が

ならねえ！」溜息が憤怒に變つた。「俺等を餓ゑささうといふんぢや。……ぢつと怺えて居るもんか、覺えとるがえゝ。やつてやる！」

隣村の安右衛門を集會に加へるために、一人が坂路を馳せ登つて使ひにたつた。

七

近道をして、啓助は蜜柑畑を横切つた。そして、山の方へ急いだ。山の中に壞れかけた祠がある。そこで會合をすることになつてゐるのだ。重ッ苦しい墨色の雲は、空一面に擴がつてゐた。彼が蜜柑畑を出はづれると、今さつき、通りかけに、半次郎の店の前に集つてゐた群集が、ドッと騒ぎだした。物を叩きつけ硝子が毀れる音がしだした。十五六の少年が畔から二階へ石を投げつけてゐるのが見えた。二階には手すりの内側に戸が閉めてあつた。石は戸にあたり、屋根瓦の上にころがり落ちた。店の前から湧きかへるやうな叫び聲がひゞいてきた。

そこに集つてゐるのは、主に、老人や、中年者だつた。

「半次郎を引つぱり出せ！」彼等は口々に叫んだ。「今こそ、長い間、むざ〳〵と俺等をいぢめやがつたカタキを取つて呉れる。引つぱり出せ！　引つ張り出せ！」

叩き破つた戸を押し開けて、鉢巻をしてゐる丑ッさんが、薄暗い店へ這入つた。あとにつゞいて三四人が押しこんだ。中でまた、硝子が鋭い音をたて、割れくづれた。

「半次郎出て來い――出て來い！」群集は叫んだ。「俺等が汗を流して作つた米をむざ〳〵と取りやがつて！　高利貸め！　出て來い！　出て來て話をしろッ！」

またつゞいて、人々は店の中へ押し入つた。若い一人が、土のついた手に駄菓子を摑んで頬張り乍ら、群集のために戸に押しつけられさうになつて出て來た。人々は、先を爭つて、そこらにある煎餅や、南京豆や、椎茸などを手あたり次第に摑み取つて、懷へねぢこんだ。酒樽の呑口が引きぬかれた。彼等は冷たい酒を貪りのんだ。瞬間、彼等は、平常ならば、新子がちやんと見はつてゐて、必ず金を出さなければ、煎餅一枚、酒一滴でさへ只では得られないことを思つた。長い間、何等の反抗もなし得ず、みす〳〵水の混つた酒をのまされ、高い菓子を買はされたことを思ひかへした。彼等は、よくもこれまで、忍びに忍んでゐられたものであつた。彼等にとつて、今こそその復×をしてやる好機だつた。遺×を晴すべき時だつた。

「何だ、けち臭いことをするな、やれッ！　かまふか、やれッ！　やつちまへ！」

戸棚や空樽が、×××××××、×××××さうにぶつかつた。

「なむあみだぶ。なむあみだぶ。」

二階では、お作が恐怖に慄へながら、一圖に、阿彌陀如來の救助を求めてゐた。戸を閉めきつて、そこは何も見分けがつかなかつた。

「なむあみだぶ！　なむあみだぶ！」

彼女は必死に救助を求めた。

ふと、全身がずぶぬれになつて、誰れかゞ、勝手元からの細い梯子を這ひ上つて來た。そしてお作の傍へしのびよつた。

「誰れッ！」

お作は、冷たさと恐怖にびつくりした。

「わたし。」それは新子であつた。寒さに齒をがたつかせてゐた。

「まあ、お前どうしたん？」

「覺えてろ！　ドン百姓が、ドン百姓が！」彼女はがた〳〵慄へた。

「私を河ン中へ突きこんだん。錢つたら一文もないくせに！」

不意に荒々しい聲を張り上げて、新子は泣きだした。激昂した群衆の罵聲は戸外で一層熱してきた。

×××××××××××××。×××　×××。

「喜作はどうした？」押入れの襖を細目に開けて、牛次郎が顎へ聲で囁いた。「喜作はどうした。警察へ走つてくれたかいなァ？」

「おそくなつちやつた。どうするかきまつたかな？」

祠の前の芝生には、庄作を中心に集つてゐる青年達が、それ〴〵好きな恰好をして坐つてゐた。鉢巻をして繃帶を締めてゐる老人もゐた。啓助は正吉の傍に坐つた。

「何もせずに、泣き寢りぢや！」

「何に？」

「安右衞門が暴力反對なんだ。」正吉が囁いた。

壞れ放題にされてゐる祠の下に、兩肩を持ち上げ、龜のやうに頸をすくめてゐる老人が坐つてゐた。それが、隣村から來た安右衞門だつた。彼は四十歲だつたが、六十に見えた。彼は暴力に訴へることに反對した。暴力を以てすれば結局負ける。

「競賣をやり直さすんが當然ぢやないか。」

團栗にもたれて立つてゐる良助が云つた。

「それや、出來んのぢや。」

「どうして出來んのですか？」

安右衞門は、一度賣られると、たとへそれが任意處分でも、あとへ引戻すことが出來ない。それには、損害賠償を要求する方法があるのみだ、さう說明した。

啓助は、聞いて、物足りなさと、いら〳〵しさを感じた。

「何だい、あんな爺さんに何が分るか！」傍で正吉が呟いた。

附近の農村で、一番早く、小作人の團結運動に氣づいた人だといふ、そのことが皆なをして、安右衞門に反對するのを遠慮させた。彼等は、落ちつかぬ眼で安右衞門の故意に持ち上げられた肩や、壞れかけた、祠の屋根を見上げた。彼等は退屈した。彼等の耳は何事をも聞かずに、腦髓はほかのことを考へてゐた。

啓助は、安右衞門に對する輕蔑を、皮肉を含んだ眼に表現しつゝ庄作に合圖を送つた。庄作は安右衞門の傍に坐つてゐた。庄作は、いつも彼等が思つてゐることをさきになつて表現してくれる男だ。ところが、彼は、故意か、偶然か、啓助の眼くばせをそらしてしまつた。

集會には、激しい討論もなければ、親しみのある空氣も出なかつた。決議はすんでしまつた。皆、山を下りかけた。各自、不滿と腹立たしさを怺へてゐた。彼等の體內には、熱い狂暴なものが渦卷いた。

「今夜こそ寢られるもんか！」啓助は、うしろにおくれながら、庄作に近づいた。「俺ら、やつてやる！やつてやるんだ！」

庄作は決議を守らなければならないことを考へてゐた。彼も、皆の胸中に醸成されてゐる狂暴な情熱を感じてゐた。それは、はげしく外へ迸り出ずにはやまないものだつた。このはりきつた感情は、青年達の胸中にあるばかりではなかつた。老人にも、中年者にも、女にも、子供にも、行き渡つてゐた。彼はそれを知つてゐた。

祠から下り、杉の谷を通りぬけると、村が一望の下に見おろされる團栗山に來た。田の面から、崖にぶつかる波のやうな群衆のどよめきと叫喚が傳はり上つて來た。つひ一時間ばかり前まで嚴めしく立つてゐた立札は粉碎され、繩はずたゞに切斷されてゐた。人々は暴々しく吠え叫びながら鎌を振り、穗を叩き落し、稻をなぎ倒してゐた。

山を歩いてきた青年達の體內に緊張し煮えかへつてゐた感情は、瞬間に、パツト破れ、迸り出だ

した。石ころの多い細道をさきに行つてゐた者は、急に歡喜に燃えるやうな叫び聲を上げて、一散に山を馳せ下つた。と、一列にあとからつゞいてゐた者も、同樣な叫び聲をあげて馳せだした。彼等の眼下には、妹や弟までが、鎌を持つて田に入り亂れてゐた。子供を背負つた母親が、稻穗をすごいて、籾を手籠に取つてゐた。

「結局かうやるつもりだつたんだ！　かうやるつもりだつたんだ！」

彼等は馳せ下りながらさう思つた。彼等は自分の周圍が輝かしく明るくなつたやうな氣がした。

「やれ、やれッ！　やつちまへ！」

安右衞門は、立ち止つて、自分の眼前をフィルムのやうに走り去る青年達をポカンと見てゐた。青年達は、猫背の爺さんに突きあたつた。安右衞門は突きとばされないやうに、道から山の中へ引つこんだ。彼は、眼で庄作を搜した。庄作は、彼を支持するだらうと思つてゐたのだ。

庄作は、うしろから皆におくれまいと歩度を伸して來た。

「君、君、どうしたこつたい！」安右衞門は自分の言葉が相手の耳からそれるのを恐れるやうに早口に云つた。

庄作は、何も聞えなかつたものゝやうに彼には眼もくれず、馳せすぎてしまつた。

青年達はつゞけて歡喜に滿ちた叫びを放ちながら、山を下つてゐた。彼等の間隔は次第に距たつてきた。

「何としたこつたい！　何としたこつたい！」

安右衞門は、山に立つて村を見下してゐた。彼は動かなかつた。村に下ると、青年は、火藥を撒くやうに田の中へばら〳〵に分れ散つた。

稻田に入り亂れ渦卷いてゐた百姓達のうごめきは、なほ一層はげしく怒濤のやうに強く熱してきた。罵り叫ぶ憎惡と憤激に滿ちた聲は、龍卷きのやうに上空へ捲き上つて來た。そこには、むがむぢに稻を刈取つてゐる老人があつた。穗をすごき取つてゐる娘があつた。運動帽子をかむつて、棒で稻をなぎ叩いてゐる少年があつた。その間を縫つて青年達が走つてゐた。

安右衞門はいつのまにか、知らず〳〵百姓達の動めきに引きつけられ、自分の心が熱してくるのを覺えた。

「これや、實に壯觀だ！　壯觀だ！」彼は、自分一人であることを忘れ、傍に誰れかゞ立つてゐるかのやうに、左右を顧みて云つた。そして彼も山を馳せ下つた。

八

けたゝましくベルを鳴らして、數十輛の自轉車が、一直線に突進して來た。それ等は、松林を突き切ると、坂道を、全速力で瀧のやうに流れ下つた。

それには、鼻の平つたい男がのつてゐた。ちよんびり髭をおいてゐる男が乘つてゐた。眼窩の奥に小さい眼が光つてゐる男が乘つてゐた。――いづれも戰爭に行く者のやうに、殺氣立ち、緊張してゐた。

警官隊が繰込んで來たのだ。

三十分ほどたつと、また、數十輛の自轉車が先を競つて突進して來た。それから二十分たつと、また〳〵やつて來た。彼等は、交通妨害になるのもかまはず、道路の兩側へその自轉車を並べたてた。そして、鐵葉のやうなサーベルを稻にもつらせながら、田の中へ急ぎ散つた。

薄墨色の雲は、その黑さを加へ、頭を壓しつけるやうに、重つ苦るしく村の上にのしかゝつた。太陽は黑い雲のかたまりに包まれ、夕映一ッ殘さずに、いつのまにか沈んで行つた。村は暗くなつてきた。稻田は物が見分けられなくなつた。百姓は、依然として、田に入り亂れ、渦卷いてゐた。

「なに、おまはりが來た。」彼等は冷笑した。

「おまはりなんど、何が怖いもんか。俺等が作つた稻を、俺等がどんなに處分しようと勝手ぢやないか！」

彼等は俯向いて稻を刈るのがまだるつこかつた。××は稻を完全に半次郎のものとして保有せしめやうがためにやつて來たのだ。それは、彼等の反抗力を押し潰さうとしてやつて來たのだ。彼等は、今稻を叩き散らし、胸に湧きたぎる憤怒と憎惡を幾分なりとも癒やすより外、とるべき方法がなくなつた。それがせめてもの復讐であつた。彼等の憤激と憎惡は、一層強く奔放に荒れ狂ひだした。

最高度の能率に於て、鎌は振りまはされた。穗は頸からなで切られ、左右へ激しくとんだ。子供は稻を踏みつけ、田の中を走りまはつた。娘達も同樣に走つた。彼女等の髮や着物には、ちぎれた穗がさゝつて、ぶら〳〵ゆれた。

警官の靴は田の粘土にずりこんだ。稻は劍にまつはりついた。それは丁度、稻が警官を引きとめて動かせまいとするかのやうだつた。懷中電燈が銃を發射したやうに青くところ〴〵に光つた。子供達は、その光を見ると、稻をかき分けて逃げた。

啓助は、河の堤を走つてゐた。向うから兩手を前にさし上げて一散に馳せて來る少年があつた。鞘

を拂はない××××を振り上げて、あとからせいの高い男が追つかけて來た。

「お母ア！　お母ア！」子供は必死に叫んだ。

××××が子供の肩でガチヤッと鳴つた。子供は瞬間、斬られたやうに、道の上にへたばつた。

「お母ア！　お母ア！」子供は拜むやうに兩手をさし上げた。「お母ア！」

啓助は、またしても、子供の頭の上で×が鳴る音を聞いた。恐怖と痛さから、子供がわれるやうに泣きだした。

警官は、顏をあげると、不意に山猫のやうに啓助にとびかゝつて來た。堅い、氷のやうな金屬が、彼の耳を切らんばかりに打つた。頭がくらくらッとした。鼓膜が破れたやうだつた。と、彼の背後から別の手が、頸を摑み上げた。拳が、××××が來た方とは反對側の耳の上へ螺蟒殼のやうにとんできた。彼は、有りつたけの力を搾つて四ッの手を振りもがうとした。今度は、つぶてのやうな拳が、彼の鼻を天に向けてもぎ上げた。彼は眼が見えなくなつた。粘つこい鼻血がたら〳〵落ちだした。

「こあ、こつちへ來い！」四ッの手が彼を引きたてた。「こつちへ來るんだ！」

彼の背後では、さつきの少年が、なほ、泣きわめき、母を呼んでゐた。

重ッ苦るしい、星のない空から雨がぽつ〳〵落ちだした。

一時間、或は、一時間半毎に通過する列車から、出稼人達があたふたと、さびれたプラットフォームへ吐き出された。彼等は身輕く裾を端折つて、村へ急いだ。

眞ッ暗な、さきの見えない、濁つた晩であつた。空氣は生溫く、窒息するやうに蒸した。道は狹くうねつてゐた。人形屋に奉公してゐる辨吉が眞ッ先に歩いた。

「私、お母あが急病だつて、親方に嘘をついてきたの。」

辨吉のあとから行つてゐる君江がくすぐられたやうに、げら〳〵笑ひだした。

「何がおかしいんだ。俺だつてさうだよ。」辨吉があとへ振りかへつて腹立たしげに云つた。

「――まともなことを云ふて、親方がかへしてくれると思ふとるんか？」

「私もだまして歸つたん。」うしろの方で、いくえは、お淸に囁いた。お淸が啓助の妹であることに、肉身のやうな親しみを感じながら、彼女はよりそつてゐた。

「私だつてさうよ。」

白石をすぎ、北向地藏の前を通つた。人々は疲れて息を切らした。細い雨が降りだした。生活の糧がなくなるかどうか、必死になつてゐる際、いくえは、結婚が延期される、そのことは考へたくなか

つた。もう一年、結核菌がうよ〳〵してゐる莫大小工場へ年期を入れて、妹や弟を養はなければならないかもしれない。

「稻を差押へるつて、田に生えとるものをどうするんでせう！」彼女はお清に訊ねた。お清は、喜作がどうしてゐるか！　それを思つてゐた。

「成程な。」お清よりさきに、放浪好きの老人が答へた。「それや、いんで見なけや、分らねえ。」

北向地藏から大江に來る途中で雨裝束をした青年の一隊が、あとから追ひついてきた。彼等は顏が分らないやうに、頭巾冠りをして、繃の帶を引きしめてゐた。

「橘の衆ぢやないか。」老人があとへ振りかへつてきいた。

「さうだ。――西條はどうなつとるか知らんか？」てきぱきした聲が云つた。

「分らねえ。俺等も歸りよるところだ。」老人が答へた。「……田に立つとる稻を差押へるつて、お前さん方、どないするんだね。俺等のやうな昔人間にや、皆目想像がつかねえ。」

青年は、二十人くらゐ一隊をなしてゐた。橘村の農民組合からの應援隊であつた。大江をすぎ、一本道を、やう〳〵松林へやつて來た。墨のやうに黑い暗闇の中に、鈍く松林の梢がすけて見えた。

「あ、聞える。聞える！」辨吉が歩きながら耳を澄ました。村の騷動が松林を越してひゞいて來た。

彼等の脚は戰き躍つた。そして速力が早まつた。心臟がドキ〳〵波立ちだした。松林へさしかゝつた時、突然、威嚇するやうな聲が闇の中からひゞいた。

「待てッ！」

松の下で、四五本のサーベルが、ガヂ〳〵鳴つた。帽子をかむり、靴をはいた、屈强な男が、彼等の行手に立ちふさがつた。

「待て！　お前達はどつから來たんだ？」

青い懷中電燈が、殺人光線のやうに、サッと娘達の顏を射た。

警官隊が、松林の中に張りこんでゐるのであつた。そこは關所だつた。隣村からの應援隊も、各列車から吐き出された出稼人も、殘らずそこで捕虜になつてゐた。

「俺達は、なんにも惡いことはすれやせん。一寸、村へ歸るだけかへしてくれんかのう。」老人が哀願するやうに云つた。

「いや、待て！」

娘達は慄へた。

「俺達は、女や、子供や年寄りで、なんにも亂暴はすれやせん。ほんの一寸だけ通してくれんかのう。」

老人は繰りかへした。「俺やもう長いこと村へ歸らんので、孫がどうしとるか氣にかゝるんぢや。ほんの一寸だけ通してくれんかのう！」

「みんなこつちへ來い！」

部長が下の者に何か命令した。老人も娘も橘の青年達も、眞暗闇の、二三尺さきさへ分らない松林へつれこまれ、檢束されてしまつた。

雨が大粒に落ちて來た。彼等は、一緒に歸つた者がどこにゐるか、それさへ分らなかつた。いくえは、一人で家のことを心配した。お清は、喜作の顏を思ひ浮べやうとした。それは、劍の音と共に、彼女の腦裏から破壞され、消えてしまつた。彼女は、冷たい石のやうな牢屋を想像して、恐怖に慄へた。

坂の下から、捕虜のやうに、檢束された百姓達の群が登つて來た。

九

河水が、堤防から溢れ、物凄い音響をたてゝ流れた。雨は來る日も來る日も降りつゞいた。そして氣溫は降下した。潮が滿ちて來た。誰も、河口の水門を閉す者がなかつた。潮は河水を逆に押し上げた。水は溝を埋め、稻を浸した。昨日まで黃金色に熟つて美しかつた稻は、折れ、踏みにじられ、穗を失つて死んでゐた。

町へ引つぱつて行かれた者達は歸つて來なかつた。家々では、女や子供が寒さと不安に顫へながら餓ゑてゐた。村は火が消えたやうに滅入つてしまつた。雨に細道の土が流され、礫がでこぼこ地中から露出した。その細道に添ふた或る茅屋の前には、雨にぬれた堆肥がむせて、白い蒸氣をたてゝゐた。家の中には、老婆が息たえ〴〵にうめき、あがいてゐた。雨水は破れ屋根を通して、座敷へぽつ〳〵落ちてきた。そのしづくは煤の間を通つて、黑茶色に染まつてゐた。千代と榮枝とは、納屋で、前日必死に穗からすごき取つた粃を人に氣づかれぬ片隅へかくさうと骨折つてゐた。粃には、ごみや土がまじつてゐた。穗莖から切取つたそのまゝのもあつた。その粃は、すぐ穀を脫して食はなければならないものだ。

三束ばかり、慌てゝ根元から刈取つた稻があつた。それは榮枝に分けさして、母親が稻扱きで扱いた。新しい藁の匂ひが、彼女に娘の時代を思ひ起させた。青つぽい藁は、若々しく牧歌のやうに匂つた。

「おーい、おーい、おーい。」婆さんは苦るしさうにうめいてゐた。

「おーい、おーい、誰れぞ來て、さすつて呉れ。――痛うて辛抱が出來ん。おーい！」

千代は、芥子を水に解いて納戸へ持つて行つた。

「おーい、おーい、おーい。婆さんはうめきつゞけた。「なんとかしてくれい。苦しうてならん。早よ死ぬ方がえゝ。おーい、おーい！」

お鹿は、餓ゑまいがために、食ふべき米を取りこんで置かうとして、必死に稲を苅り、穂をすごき取つたのであつた。彼女は、一生、餓ゑまいがために、――たゞ、餓ゑることにのみおびやかされて、始終、慾ばり、息子や嫁を休みなく働かせやうと、がみ〳〵追ひ立てゝきたのであつた。彼女は鎌を取り上げた警官に反抗した。枯枝のやうな手を爪立てゝ×を振り上げて來る男に摑みかゝつた。彼女は、手や脚や、頸を毆られた。ひからび皺のよつた皮膚には、打撲のあとが到るところに刻みこまれてゐた。それは、細長く、黒紫に、死色を呈してゐた。

「痛た、痛たあ！　あ、あ、痛うてたまらん！」

「さすらうかな。」

千代の手が老婆の腕に觸れると、老婆は割れるやうな悲鳴をあげた。彼女の手は、ほんの一寸と觸れたばかりであつた。それが老婆の肉體に堪へ難い疼痛を起すのであつた。千代は、何か自分がひどい

ことをしたものゝやうに、びつくりして手を引いた。老婆は寢がへりを打つことが出來なかつた。彼女は腕骨を折られてゐるのであつた。

榮枝が學校で手習ひに使つた紙の裏へ、千代は、芥子をのばした。そして、恐る〳〵それを老婆の身體へ貼りつけた。

「痛たあ、痛たあ、なんどしてくれい、痛たあ！」

戸外では、水に浸された細道を、半次郎が人夫をつれて、茅葺の家々を縫つて歩いてゐた。人夫は、大きな籠を六尺棒で擔つてゐた。頑丈な荒つぽさうな男だつた。そのあとから×××をさげた男が、長靴を大事さうにして歩いてゐた。細あひから、ぢかに納屋をめがけて這入つて行くと、そこで半次郎は、何か大聲に叫鳴つた。暫らくすると、人夫は籠に籾を滿たして、六尺棒を撓ませながら出て來た。

「取られたものを取りかへすんは、あたりまへだ。それや當然だ！」半次郎は、ぶつ〳〵云つてゐた。

「籾があんたの所有であつた確證さへあれや取りかへすのは一向差支ないこつてす。」×××が云つた。

「さうですよ。みんな、わしが錢を出して買つたもんでさ。このドン百姓の籾つたら、一粒だつて有

る筈がねえ。」

「は、は。」

半次郎は、一つの納屋から出て來ると、また次の家へ這入つて行つた。そして、それからまた次へ行つた。やがて彼は、堆肥から湯氣が立つてゐる家へやつて來た。家の中から、老婆の瀕死のうめき聲がもれて來た。

「おい、おい。誰れかゐるか。」彼はいきなり呶鳴つた。

「へい。」千代が、蒼い、血の氣のない唇をして出て來た。

「納屋の口に藁を三束置いてあるが、あれについとつた籾はどこへかくした？」

「置いてあります。」

「出して來い。」

半次郎は土のついてゐる下駄でかまはず納屋へ這入つて行つた。彼は、蓆をびしや〳〵踏んだり、空俵の束を蹴つたりした。下駄の泥がそこら中に散つた。彼の足は先日店へ抑し入られたその仕返しをするやうに、殘酷に執拗だつた。

叺に四斗ばかりの籾が入れてあつた。

「これだけか？」

「へい。」

「まだかくしとるだらう。」

「いゝえ。」

「嘘を云へ！」彼は背伸びをして、唐箕の漏斗へ手を突きこんだ。「そら、こゝにかくしとる。だましたつてすぐ分るんだ！」

「ほう。前の家にもそこにかくしてあつた。」入口に立つて見てゐた××××が愉快さうに笑つた。

「は、は、そこには必ず入つとるもんですな。」

「へえ。百姓の奴は、淺はかですからな。」

「ふむ。ふゝゝ。」サーベルは、繰りかへしおかしさうに笑つた。

千代は、眼を落して、下駄の土をぬりつけられた新しい蓆を見てゐた。顏を上げる勇氣がなかつた。サーベルと半次郎に對する憤りと共に、折角、長い間、あらゆる勞苦を積んで作つた籾が、結局、一粒も殘らず取り上げられてしまつた、口惜しさと、悲しさを同時に感ぜずにはゐられなかつた。

半次郎は、人の家へ侵入する權利が十分あるかのやうに、納屋、木納屋、物置きの隅々をくまなく、

そこらに置いてあるものを、引つくりかへしながら、探しまはつた。彼は、手籠にある最後の籾の一粒まで、人夫の大籠に移した。そして、それ以上、かくしてゐないことをたしかめると、性急に人夫を追ひたて、千代には一言も、物を云はずに、眼で挨拶さへせず、横柄に出て行つてしまつた。

サーベルと半次郎に對する憎悪と反感は、千代の胸にこみ上げて來た。彼女は、厚顔にして貪慾な半次郎と、貧乏人が餓ゑるのもかまはず、滿ち足りてゐる半次郎に味方して、なほ、最後のものまで取上げる手助けをする、××××を胸がすくまで、罵倒しつくしてやりたかつた。彼等の面の皮を引きむいてやりたかつた。しかし二人の冷酷な男は、近道をして、納屋の脇の細あひから、隣家の方へ消えて行つてしまつた。彼女は自分達が無茶苦茶に踏みにじられてしまつたやうな氣がした。

彼女は、薄暗い納屋の隅へ行つた。一家が食つて行く何物も殘つてゐず、わざ〳〵娘に分けさして稲を扱き、穂をすごき取つたことが、全然無駄な骨折りであつたことを思つた。嗚咽が激しくのどもとへこみ上げて來た。彼女は、壁に顔をむけて、それを押し怺へ、嚥み下さうと努力した。

「どうしたんぢや。籾は見つけられやせなんだか？」

お鹿は痛さに顔をしかめ、唸りながら、いつのまにか上り框へ這ひ出て來た。薄暗い納戸では、はつきり分らなかつた紫暗色に膨れ上つてゐる毆られたあとが、痛々しく眼だつた。

「半次郎とおまはりの鬣がしよつたが、なにしに來たんぢや？」

「なんでもない。」

千代は狼狽した。が、突嗟に、瀕死の祖母に一粒の籾もないことを知らせてはいけないと考へた。

「籾は取つて行かれやせなんだか？」

「いゝや。」

「あんじようかくしてあつたんか？」

「……。」

千代は祖母から顔を見られるに堪へなかつた。胸の奥から再び激しい、のどがつまるやうな嗚咽がこみあげて來た。

（昭和三年・五月）

渦巻ける烏の群

一

「アナタア、ザンバン、頂だい。」

子供達は青い眼を持つてゐた。そして、毛のすり切れてしまつた破れ外套にくるまつて、頭を襟の中に埋めるやうにすくんでゐた。娘もゐた。少年もゐた。靴が破れてゐた。そこへ、針のやうな雪がはみこんでゐる。

松木は、防寒靴をはき、ズボンのポケットに兩手を突きこんで、炊事場の入口に立つてゐた。風に吹きつけられた雪が、窓硝子を押し破りさうに積りかゝつてゐた。谷間の泉から湧き出る水は、その周圍に凍てついて、氷の岩が出來てゐた。それが、丁度、地下から突き出て來るやうに、一昨日よりは昨日、昨日よりは今日の方がより高くもれ上つて來た。彼は、やはり西伯利亞だと思つた。氷が次第に地上にもれ上つて來ることなどは、内地では見られない現象だ。

子供達は、言葉がうまく通じないなりに、松木に憐れみを求め、こびるやうな顔つきと態度とを五人が五人までしてみせた。

彼等が口にする「アナタア」には、露骨にこびたアクセンがあつた。

「ザンバンない？」子供達は繰かへした。「……アナタア！　頂だい、頂だい！」

「あるよ。持つて行け。」

松木は、殘飯桶のふちを操つて、それを入口の方へころばし出した。

そこには、中隊で食ひ殘した麥飯が入つてゐた。パンの切れが放りこまれてあつた。その上から、味噌汁の殘りをぶちかけてあつた。

子供達は、喜び、うめき聲を出したりしながら、互に手をかきむしり合つて、携へて來た琺瑯引きの洗面器へ殘飯をかきこんだ。

炊事場は、古い腐つた漬物の臭ひがした。それにバターと、南京袋の臭ひがまざつた。

調理臺で、午蒡を切つてゐる吉永が、南京袋の前掛けをかけたまゝ入口へやつて來た。

武石は、ペーチカに白樺の薪を放りこんでゐた。ペーチカの中で、白樺の皮が、火にパチ〳〵はぜつた。彼も入口へやつて來た。

「コーリヤ。」
松木が云つた。
「何？」
コーリヤは眼が鈴のやうに丸くつて大きく、常にくる〳〵動いてゐる、そして顔にどつか尖つたところがある少年だつた。
「ガーリヤはゐるかね？」
「ゐるよ。」
「どうしてるんだ。」
「用をしてる。」
コーリヤは、その場で、汁につかつたパン切れをむしや〳〵頬張つてゐた。
ほかの子供達も、或はパンを、或は汁づけの飯を手に掴んでむしや〳〵食つてゐた。
「うまいかい？」
「うむ。」
「つめたいだらう。」

彼等は、残飯桶の最後の一粒まで洗面器に拾ひこむと、それを脇にかゝへて、家の方へ雪の丘を馳せ登つた。
「有がたう。」
「有がたう。」
「有がたう。」
子供達の外套や、袴の裾が風にひら〳〵ひるがへつた。
三人は、炊事場の入口からそれを見送つてゐた。
彼等の細くつて長い脚は、強いバネのやうに、勢ひよくぴん〳〵雪を蹴つて、丘を登つてゐた。
「ナーシヤ！」
「リーザ！」
武石と吉永とが呼んだ。
「なアに？」
丘の上から答へた。
子供達は、皆な、一時に立止まつて、谷間の炊事場を見下した。

「飯をこぼすぞ。」

吉永が日本語で云つた。

「なアに？」

吉永は、少女にこちらへ來るやうに手まねきをした。

丘の上では、彼等が、きやあ〳〵笑つたり叫んだりした。

そして、少し行くと、それから自分の家へ分れ〳〵に散らばつてしまつた。

二

山が、低くなだらかに傾斜して、二つの丘に分れ、やがて、草原に連つて、廣く、遠くへ展開してゐる。

兵營は、その二つの丘の峽間にあつた。

丘のそこかしこ、それから、丘のふもとの草原が延びて行かうとしてゐるあたり、そこらへんに、露西亞人の家が點々として散在してゐた。革命を恐れて、本國から逃げて來た者もあつた。前々から、西伯利亞に土着してゐる者もあつた。

彼等はいづれも食ふに困つてゐた。彼等の畑は荒され、家畜は掠奪された。彼等は安心して仕事をすることが出來なかつた。彼等は生活に窮するより外、道がなかつた。

板壁の釘が腐つて落ちかけた木造の家に彼等は住んでゐた。屋根は低かつた。家の周圍には、藁やごみを散らかしてあつた。

處々に、うづ高く積上げられた乾草があつた。

荷車は、軒場に乗りつけたまゝ放つてあつた。

室内には、古いテーブルや、サモヴールがあつた。刺繍を施したカーテンがつるしてあつた。でも、そこからは、動物の棲家のやうに、異樣な毛皮と、獸油の臭が發散して來た。

それが、日本の兵卒達に、如何にも、毛唐の臭だと思はせた。

子供達は、そこから、琺瑯引きの洗面器を抱へて毎日やつて來た。ある時は、老人や婆さんがやつて來た。ある時は娘がやつて來た。

吉永は、一中隊から來てゐた。松木と武石とは二中隊の兵卒だつた。

三人は、パン屑のまじつた白砂糖を捨てずに皿に取つておくやうになつた。食ひ殘したパンに味噌汁をかけないやうにした。そして、露西亞人が來ると、それを皆に分けてやつた。

「お前ンとこへ遊びに行つてもいゝかい？」

「どうぞ。」

「何か、いゝことでもあるかい？」

「何ンにもない。……でもいらつしやい、どうぞ。」

その言葉が、朗かに、快活に、心から、歡迎してゐるやうに、兵卒達には感じられた。

兵卒は、殆んど露西亞語が分らなかつた。けれども、そのひゞきで、自分達を歡迎してゐることを、捷く見てとつた。

晩に、炊事場の仕事がすむと、上官に氣づかれないやうに、一人づゝ、別々に、息を切らしながら、雪の丘を攀ぢ登つた。吐き出す呼氣が凍つて、防寒帽の房々した毛に、それが霜のやうにかたまりついた。

彼等は、家庭の溫かさと、情味とに飢ゑ渴してゐた。西伯利亞へ來てから何年になるだらう。まだ二年ばかりだ。しかし、もう十年も家を離れ、內地を離れてゐるやうな氣がした。海上生活者が港にあこがれ、陸を戀しがるやうに、彼等は、內地にあこがれ、家庭を戀しがつた。

彼等の周圍にあるものは、はてしない雪の曠野と、四角ばつた煉瓦の兵營と、××合ひばかりだ。

誰のために彼等はかういふところで雪に埋もれてゐなければならないだらう。それは自分のためでもなければ親のためでもないのだ。懷手をして、彼等を酷使してゐた者どものためだ。それは、彼等×××なのだ。

敵のために、彼等は、只働きをしてやつてゐるばかりだ。

吉永は、胸が腐りさうな氣がした。息づまりさうだつた。極刑に處せられることなしに兵營から逃出し得るならば、彼は、一分間と雖も我慢してゐたくはなかつた。——僅かの間でもいゝ、兵營の外に出たい、情味のある家庭をのぞきたい。さういふ慾求を持つて、彼は、雪の坂道を攀ぢ登つた。

丘の上には、リーザの家があつた。彼はそこの玄關に立つた。

扉には、隙間風が吹きこまないやうに、目貼りがしてあつた。彼はポケットから手を出して、その扉をコツ〳〵叩いた。

「今晩は。」

屋內ではペーチカを焚き、暖氣が充ちてゐた。その氣はひが、扉の外から既に感じられた。

「今晩は。」

「どうぞ、いらつしやい。」

朗かで張りのある女の聲が扉を通してひゞいて來た。

「まあ、ヨシナガサン！　いらつしやい。」

娘は嬉しさうに、にこ〳〵しながら、手を出した。

彼は、始め、握手することを知らなかつた。それまで、握手をしたことがなかつたのだ。何か惡いことをするやうに、胸がおど〳〵した。

が、まもなく、平氣になつてしまつた。

のみならず、相手がこちらの手を強く握りかへした時には、それは、何を意味してゐるか、握手と同時に、眼をどう使ふと、それはかう云つてゐるのだ。氣がすゝまぬやうに、だらりと手を出せば、それは見込がない。等々……。握手と同時に現はれる、相手の心を讀むことを、彼は心得てしまつた。

吉永がテーブルと椅子と、サモワールとがある部屋に通されてゐる時、武石は、鼻から蒸氣を吐きながら、他の扉を叩いてゐた。それから、稻垣、大野、川本、坂田、みなそれ〴〵二三分間おくれて、別の扉を叩くのであつた。

「今晩は。」

そして、相手がこちらの手を握りかへす、そのかへしやうと、眼に注意を集中してゐるのであつた。

彼等のうちのある者は、相手が自分の要求するあるものを與へてくれる、とその眼つきから讀んだ。そして胸を湧き立たせた。

「よし、今日は、ひとつ手にキスしてやらう。」

一人の女に、二人がぶつかることがあつた。三人がぶつかることもあつた。そんな時、彼等は、歸りに、丘を下りながら、ひよいと立止まつて、顏を見合はせ、から〳〵笑つた。

「ソベールニクかな。」

「ソベールニクつて何だい？」

「ソベールニク……競爭者だよ。つまり、戀を爭ふ者なんだ。はゝゝ。」

三

松木も丘をよぢ登つて行く一人だつた。

彼は笑つてすませるやうな競爭者がなかつた。

彼は、朗かな、張りのある聲で、「いらつしやい、どうぞ！」と女から呼びかけられたこともなかつた。

若しそれが戀とよばれるならば、彼の戀は不如意な戀だつた。彼は、丘をば登りしなに、必ず、パンか、乾麵麭か、砂糖かを新聞紙に包んで持つてゐた。それは兵卒の配給すべきものゝ一部をこつそり取つておいたものだつた。彼は、それを持つて丘を登り、そして丘を向うへ下つた。

三十分ほどたつて、彼は手ぶらで、悄然と反對の方から丘を登り、それから、兵營へ丘を下つて歸つて來た。ほかの者たちは、まだ、ペーチカを焚いてゐる暖かい部屋で、胸をときめかしてゐる時分だつた。

「あゝ、もうこれでやめよう！」彼は、ぐつたり雪の上にへたばりさうだつた。「あほらしい。」

丘のふもとに、雪に埋もれた廣い街道がある。雪は橇や靴に踏みつけられて、固く凍つてゐる。そこへ行くまでに、聯隊に鐵條網が張りめぐらされてあつた。彼は、毎晩、その下をくぐりぬけ、氷で辷りさうな道を横切つて、ある窓の下に立つたのであつた。

「ガーリヤ！」

彼は、指頭で、窓硝子をコツ〳〵叩いた。睫毛まで凍りつきさうな寒い風が吹きぬけて行つた。彼は、その軒の下で暫らく佇でんゐた。

「ガーリヤ！」

そして、また、硝子を叩いた。

「何？」

女が硝子窓の向うから顏を見せた。唇の間に白い齒がのぞいてゐる。それがひどく愛嬌を持つてゐる。

「這入つてもいゝ？」

「それ何？」

「パンだ。あげるよ。」

女は、新聞紙に包んだものを窓から受取ると、すぐ硝子戸を閉めた。

「おい、もつと開けといてくれんか。」

「……室が冷えるからだめ。——一度開けると薪三本損するの。」

彼女は、櫻色の皮膚を持つてゐた。笑ひかけると、左右の頰に、子供のやうな笑窪が出來た。彼女は惡い女ではなかつた。だが、自分に出來ることをして金を取らねばならなかつた。親も、弟も食ふことに困つてゐるのだ。子供を持つてゐる姉は、夫に吸はせる煙草を貰ひに來た。

松木は、パンを持つて來た。砂糖を持つて來た。それから、五圓六十錢の俸給で何かを買つて持つ

て來た。

でも、彼女の一家の生活を支へるのには、あまりに金を持つてゐなすぎる。もつとよけいに俸給を取つてゐる者が望ましい。

肉に餓ゑてゐるのは兵卒ばかりではなかつた。

松木の八十五倍以上の俸給を取つてゐるえらい人もやはり貪慾に肉を求めてゐるのであつた。

「私、用があるの。すみません、明日來てくださらない。」

ガーリヤは云つた。

「いつでも明日來いだ。で、明日來れや、明後日だ。」

「いえ、ほんとに明日、——明日待つてます。」

四

雪は深くなつて來た。

炊事場へザンパンを貰ひに來る者たちが踏み固めた道は、新しい雪に蔽はれて、あと方も分らなくなつた。すると、子供達は、それを踏みつけ、もとの通りの道をこしらへた。

雪は、その上へまた降り積つた。

丘の家々は、石のやうに雪の下に埋もれてゐた。

彼方の山からは、始終、バルチザンがこちらの村を覗つてゐた。のみならず、夜になると、歩哨が、たびく狼に襲はれた。四肢が沒してもまだ足りない程、深い雪の中を、狼は素早く馳せて來た。

狼は山で食ふべきものが得られなかつた。そこで、すきに乘じて、村落を襲ひ、鷄や仔犬や、豚をさらつて行くのであつた。彼等は群をなして、わめきながら、行くさきにあるものは何でも喰ひ殺さずにはおかないやうな勢ひでやつて來た。歩哨は、それに會ふと、ふるへ上らずにはゐられなかつた。こちらは銃を持つてゐるとは云へ、二人だけしかゐないのだ。慓悍な動物は、彈丸をくぐつて直ちに、人に迫つて來る。それは全く凄いものだつた。衞兵は總がゝりで狼と戰はねばならなかつた。惡くすると、腋の下や、のどに喰ひつかれるのだ。

薄ら曇りの日がつゞいた。晝は短く、夜は長かつた太陽は、一度もにこ〳〵した顏を見せなかつた。松木は、これで二度目の冬を西伯利亞で過してゐるのであつた。彼は疲れて憂鬱になつてゐた。太陽が、地球を見棄てゝどつかへとんで行つてゐるやうな氣がした。こんな狀態がいつまでもつゞけばきつと病氣にかゝるだらう。——それは、松木ばかりではなかつた。同年兵が悉く、ふさぎこみ、疲

憾してゐた。そして、女のところへ行く、そのことだけにしか興味を持つてゐなかつた。

ガーリヤは、人眼をしのぶやうにして炊事場へやつて來た。古いが、もとは相當ものが良かつたらしい外套の下から、白く洗ひ晒された彼女のスカートがちら〳〵見えてゐた。

「お前は、人をよせつけないから、ザンパンが有つたつてやらないよ。」

「あら、さう。」

彼女は響きのいゝ、すき通るやうな聲を出した。

「さうだとも、あたりまへだ。」

「ぢやいゝ。」

黒く磨かれた、踵の高い靴で、彼女はきりつと、ブン廻しのやうに一とまはりして、丘の方へ行きかけた。

「いや、うそだ〳〵。今さつきほかの者が來てすつかり持つて行つちやつたんだ。」

松木はうしろから叫んだ。

「いゝえ、いらないわ。」

彼女の細長い二本の脚は、強いばねのやうに勢ひよくはねながら、丘を登つた。

「ガーリヤ！　待て！　待て！」

彼は乾麵麭を一袋握つて、あとから追つかけた。

炊事場の入口へ同年兵が出てきて、それを見て笑つてゐた。

松木は息を切らし〳〵女に追ひつくと、空の洗面器の中へ乾麵麭の袋を放り込んだ。

「さあ、これをやるよ。」

ガーリヤは立止まつて彼を見た。そして眞白い齒を露はして、何か云つた。彼は、何といふことか意味が汲みとれなかつた。しかし女が、自分に好感をよせてゐることだけは、圓みのあるおだやかな調子ですぐ分つた。彼は追つかけて來ていゝことをしたと思つた。

歸りかけて、うしろへ振り向くと、ガーリヤは、雪の道を辷りながら、丘を登つてゐた。

「おい、いゝかげんにしろ。」炊事場の入口から、武石が叫んだ。「あんまりぢやれつきよると競爭に行くぞ！」

五

吉永の中隊は、大隊から分れて、×××へ守備に行くことになつた。

HとSとの間に、かなり廣汎な區域に亘つて、森林地帶があつた。そこには山があり、大きな谷があつた。森林の中を貫いて、河が流れてゐた。そのあたりの地理は詳細には分らなかつた。

だが、そこの鐵橋は始終破壞された。枕木はいつの間にか引きぬかれてゐた。不意に軍用列車が襲撃された。

電線は切斷されづめだつた。

HとSとの聯絡は始終斷たれてゐた。

そこにバルチザンの巢窟があることは、それで、ほゞ想像がついた。

×××へ守備中隊を出すのは、そこの聯絡を十分にするがためであつた。

吉永は、松木の寢臺の上で私物を纏めてゐた。炊事場を引き上げて、中隊へ歸るのだ。

彼は、これまでに、しば〳〵危險に身を曝したことを思つた。

彈丸に倒れ、眼を失ひ、腕を落した者が、三人や四人ではなかつた。

彼と、一緒に歩哨に立つてゐて、夕方、不意に、胸から血潮を迸らして、倒れた男もあつた。坂本といふ姓だつた。

彼は、その時の情景をいつまでもまざ〳〵と覺えてゐた。

どこからともなく、誰れかに射擊されたのだ。

二人が立つてゐたのは山際だつた。

交代の歩哨は衞兵所から列を組んで出てゐるところだつた。もう十五分すれば、二人は衞兵所へ歸つて休めるのだつた。

夕日が、あか〳〵と彼方の地平線に落ちようとしてゐた。牛や馬の群が、背に夕日をあびて、草原をのろ〳〵歩いてゐた。十月半ばのことだ。

坂本は

「腹がへつたなあ。」と云つてあくびをした。

「内地に居れや、今頃、野良から鍬をかついで歸りよる時分だぜ。」

「あ、さうだ。もう芋を掘る時分かな。」

「うむ。」

「あゝ、芋が食ひたいなあ！」

そして坂本はまたあくびをした。そのあくびが終るか終らないうちに、彼は、ばたりと丸太を倒すやうに芝生の上に倒れてしまつた。

吉永は、とび上つた。

も一發、彈丸が、彼の頭をかすめて、ヒウと唸り去つた。

「おい、坂本！　おい！」

彼は呼んでみた。

軍服が、どす黑い血に染つた。

坂本はたゞ、「うう」と唸るばかりだつた。

內地を出發して、ウラヂオストックへ着き、上陸した。その時から、既に危險は皆の身に迫つてゐたのであつた。

機關車は薪を焚いてゐた。

彼等は四百里ほど奧へ乘り込んで行つた。時々列車からおりて、鐵砲で打ち合ひをやつた。そして、また列車にかへつて、飯を焚いた。薪が燻つた。冬だつた。機關車は薪がつきて、しよつちゆう動かなくなつた。彼は二ヶ月間顏を洗はなかつた。向うへ着いた時には、まるで黑ン坊だつた。息が出來ぬくらゐの寒さだつた。そして流行感冒がはやつてゐた。兵營の上には、向うの飛行機が飛んでゐた。街には到るところ、赤旗が流れてゐた。

そこでどうしたか。結局、こつちの條件が惡く、負けさうだつたので、持つて歸れぬ什器を燒いて退却した。赤旗が退路を遮つた。で、戰爭をした。そして、また退却をつゞけた。赤旗は流行感冒のやうに、到るところに傳播してゐた。また戰爭だ。それからどうしたか？……

雪解の沼のやうな泥濘の中に寢て、戰爭をしたこともあつた。頭の上から、機關銃をあびせかけられたこともあつた。

吉永は、自分がよくもこれまで生きてこられたものだと思つた。一尺か二尺、自分の立つてゐた場所が橫へそれてゐたら、死んでゐるかもしれないのだ。

これからだつて、どうなることか、分るものか！　俺が一人死ぬことは、誰れも屁とも思つてゐないのだ。たゞ、自分のことを心配してくれるのは、村で薪出しをしてゐるお母だけだ。

彼は、お母がこしらへてくれた守り袋を肌につけてゐた。新しい白木綿で縫つた、かなり大きい袋だつた。それが、垢や汗にしみて黑く臭くなつてゐた。彼は、それを開けて、新しい袋に入れかへやうと思つた。彼は袋を鋏で切り開けた。お守りが澤山慾張つて入れてある。金刀比羅宮、男山八幡宮、天照皇大神宮、不動明王、妙法蓮華經、水天宮。——母は、多ければ多いほど、御利益があると思つたのだらう！　それ等が、殆んど紙の正體が失はれるくらゐにすり切れてゐた。——まだある。別に、

紙に包んだ奴が。彼はそれを開けてみた。そこには紙幣が入つてゐた。五圓札と、五十錢札と、一圓札とが合せて十圓ぐらゐ入つてゐる。母が、薪出しをしてためた金を內所で入れといてくれたのだらう。

「おい、おい、お守りの中から金が出てきたが。」

吉永は嬉しさうに云つた。

「何だ。」

「お守りの中から金が出てきたんだ。」

「ほんとかい。」

「嘘を云つたりするもんか。」

「ほう、そいつあ、儲けたな。」

松木と武石とが調理臺の方から走せ込んで來た。

札も、汗と垢とで黑くなつてゐた。

「どれ〳〵、內地の札だな。」松木と武石とはなかしさうに、それを手に取つて見た。「內地の札を見るんは久しぶりだぞ。」

「お母が多分內所で入れてくれたんだ。」

「それをまた今まで知らなかつたとは間がぬけとるな。……全く儲けもんだ。」

「うむ、儲けた。半分わけてやらう。」

吉永は、自分が少くとも、明後日は、×××へ行かなければならないことを思つた。雪の谷や、山を通らなければならない。そこにはバルチザンがゐる。また擊ち合ひだ。生命がどうなるか。誰れが知るもんか！　誰れが知るもんか！

六

松木は、酒保から、餡パン、砂糖、パインアップル、煙草などを買つて來た。

晩におそくなつて、彼は、それを新聞紙に包んで丘を登つた。石のやうに固く凍てついてゐる雪は、靴にかち〳〵鳴つた。空氣は鼻を切りさうだ。彼は丘を登りきると、今度は向うへ下つた。丘の下のあの窓には、灯がともつてゐた。人かげが、硝子戸の中で、ちら〳〵動いてゐた。

彼は歩きながら云つてみた。

「ガーリヤ。」

「ガーリヤ。」

「ガーリヤ。」

「あんたは、なんて生々してゐるんだらう。」

さて、それを、ロシア語ではどう云つたらいゝかな。

丘の下でどつか人聲がするやうだつた。三十すぎの婦人の聲だ。それに一人は日本人らしい。何を云つてゐるのかな。彼はちよいと立止まつた。なんでも聲が、ガーリヤの母親に似てゐるやうな氣がした。が、聲は、もうぷつゝり聞えなかつた。すると、まもなくすぐそこの、今まで開いてゐた窓に青いカーテンがさつと引つばられた。

「おや、早や、寢る筈はないんだ　……」彼はさう思つた。そして、鐵條網をくゞりぬけ、窓の下へしのびよつた。

「今晩は、――ガーリヤ！」

――彼が窓に屈くやうに持つて來ておいた踏石がとりのけられてゐた。

「ガーリヤ。」

碎かれた雪の破片が、彼の方へとんで來た。彼の防寒外套の裾のあたりへばらゝゝと落ちた。雪は

またとんできた。彼の背にあたつた。でも彼は、それに氣づかなかつた。そして、ぢいつと、窓を見上げてゐた。

「ガーリヤ！」

彼は、上に向いて云つた。星が切れるやうに冴えかへつてゐた。

「おい、こらッ！」

さきから、雪を投げてゐる男が、うしろの白樺のかげから靴をならしてとび出て來た。武石だつた。松木は、ぎよつとした。そして、新聞紙に包んだものを雪の上へ落しさうだつた。彼は、若し將校か、或は知らない者であつた場合には、何もかも投げすてゝ逃げ出さうと瞬間に心かまへたくらゐだつた。

「また、やつて來たな。」武石は笑つた。

「君かい。おどかすなよ。」

松木は、暫らく胸がどきゝするのが止まらなかつた。彼は、武石だと知ると同時に、吉永から貰つた金で、すぐさま、女の喜びさうなものを買つて來たことをきまり惡く思つた。「砂糖とパイナップルは置いて來ればよかつた。」

「誰れかさきに、こゝへ來た者があるんだ。」と武石が聲を落して窓の中を指した。「俺れや、君が這入つたんかと思ふて、こゝで樣子を伺ふとつたんだ。」

「誰れだ？」

「分らん。」

「下士か、將校か？」

「ぼつとしとつて、それが分らないんだ。」

「誰奴かな。」

「――中に這入つて見てやらう。」

「よせ、よせ、……歸らう。」

松木は、若し將校にでも見つかると困る、――そんなことを思つた。

「このまゝ歸るのは意氣地がないぢやないか。」

武石は反撥した。彼は、ガン〳〵硝子戸を叩いた。

「ガーリヤ、ガーリヤ、今晩は！」

次の部屋から面倒くささうな男の聲がひゞいた。

「ガーリヤ！」

「何だい。」

ウラヂオストックの幼年學校を、今はやめてゐる弟のコーリヤが、白い肩章のついた軍服を着てカーテンのかげから顏を出した。

「ガーリヤは？」

「用をしてる。」

「一寸來いつて。」

「何です？　それ。」

コーリヤは、松木の新聞包を見てたづねた。

「こら酒だ。」松木が答へないさきに、武石が脚もとから正宗の四合罎を出してきた。「澤山いゝものを持つて來とるよ。」

武石は、包みの新聞紙を引きはぎ、硝子戸の外から、罎をコーリヤの眼のさきへつき出した。松木は、その手つきがものなれてゐるなと思つた。

「臭れ。」コーリヤは手を動かした。